

那覇市文化財調査報告書第30集

那 崎 原 遺 跡

—那覇空港ターミナル用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告—

1996年 3 月

那覇市教育委員会

なー ざき ばる
那 崎 原 遺 跡

—那覇空港ターミナル用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告—

1996年 3 月

那覇市教育委員会



上：鋏跡と溝跡
下：鋏跡の近景

序

この報告書は、沖縄総合事務局の那覇空港用地造成工事に伴う埋蔵文化財「那崎原遺跡」の緊急発掘調査の成果を記録したものです。

発掘調査は1992年7月に開始し、同年11月に完了しました。遺跡の上面は米軍などの造成工事によって破壊されていましたが、それでも多くの成果が得られました。特に、沖縄の農耕を考える上での鉄跡・溝跡等の貴重な遺構が確認され、それに伴って土器・石器等の遺物なども得られました。

その他には、グスク時代・琉球王朝時代の貴重な資料も多く得られ、この地が遙かな時代より先人たちが延々と生活を営んでいたことが窺われます。

末尾になりましたが、本報告書が「那崎原遺跡」を理解していただくとともに、広く埋蔵文化財に対する認識と理解を深める資料として活用されんことを願います。なお、発掘調査及び資料整理にあたり、多大なるご協力を頂いた関係各位に対して深く感謝申し上げます。

那覇市教育委員会

教育長 嘉手納 是 敏

例 言

1. 本報告書は平成4年度に実施した「那崎原遺跡緊急発掘調査」の成果を収録したものである。
2. 調査は「那覇空港ターミナル用地造成工事」に伴うもので、沖縄総合事務局那覇港工事事務所の委託を受けて那覇市教育委員会が実施した。
3. 石質・炭化種子の同定は下記の方々による。記して感謝申し上げる次第である。
石質 神谷 厚昭氏（浦添高等学校教諭）
炭化種子 高宮 広土氏（札幌大学女子短期大学部）
なお、本土産須恵器については池田栄史氏（琉球大学）の御教示を得た。明記して感謝申しあげる。
4. 発掘調査・資料整理に際し、下記の方々の指導・助言をいただいた。記して謝意を表する次第である。
高宮 廣衛氏（沖縄国際大学）
高宮 広土氏（札幌大学女子短期大学部）
長野 信一氏・鶴田 静彦氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）
中山 清美氏（笠利町歴史民俗資料館）
呉屋 義勝氏・宮城 奈々子氏（宜野湾市教育委員会）
5. 本報告書をまとめるにあたって、編年については第1表に示した高宮廣衛氏作成の「沖縄諸島の暫定編年」を用いた。
6. 本書の執筆と編集は下記のとおりである。
編集 島 弘
執筆 渡久地 政嗣 第V章第2節i・j
島 弘 第I～V章第1・2節a～h・k～q、第VI章
7. 付編として札幌大学女子短期大学部の高宮広土氏から「古代民族植物学的アプローチによる那崎原遺跡の生業」の玉稿を頂いた。記して謝意を申し上げる。
8. 本書に掲載した空中写真および地形図・国土基本図は、国土地理院発行のものを複製した。
9. 第I層出土の自然遺物については、時間の都合で割愛した。後日あらためて報告したい。
10. 出土した資料については、すべて那覇市教育委員会文化課で保管している。

報 告 書 抄 録

ふりがな	なーざきばるいせき							
書名	那 崎 原 遺 跡							
副書名	那覇空港ターミナル用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第30集							
編著者名	島 弘・渡久地政嗣							
編集機関	那覇市教育委員会文化課							
所在地	〒900 沖縄県那覇市樋川 2-8-8 TEL 098-853-5775							
発行年月日	西暦1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
なーざきばる 那崎原	おきなわのくに はしりあが 沖縄県那覇市字 あしひななーざきばる 安次嶺那崎原	47201		26度 12分 58秒	127度 39分 9秒	1992. 7. 22 1992. 11. 30	1,313	那覇空港ターミナル用地造成工事に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
那崎原	生産遺跡	古墳～平安相当期	鍛跡遺構・焼土遺構 溝跡遺構・竪穴状遺構	土器 石器 土製品		沖縄新石器時代後Ⅳ期の文化層を丘陵地に確認 燧跡を検出		

目 次

序

例言

報告書抄録

第Ⅰ章 調査に至るまでの経緯	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査体制及び成果の記録	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
第Ⅲ章 調査経過	7
第Ⅳ章 層序と遺構	7
第1節 層序	7
第2節 遺構	10
第Ⅴ章 出土遺物	17
第1節 沖縄新石器時代後Ⅳ期	18
第Ⅱ・Ⅲ層の遺物	18
a. 土器	18
b. 土製品	33
c. 石器	33
d. 本土産須恵器	37
第2節 グスク時代以降	38
第Ⅰ層の遺物	38
a. 青磁	38
b. 青花	38
c. タイ産土器	41
d. 褐釉陶器	41
e. 進草	41
f. 沖縄産陶器	42
g. 本土産陶磁器	60
h. 円盤状製品	61
i. 金属製品	66
j. 煙 管	71
k. 土製品	73

l. 碁石	73
m. 人形	73
n. 印章	73
o. 塔形製品	73
p. ブラシ状製品	75
q. 瓦	75
第VI章 まとめ	78
付 編 古代民族植物学的アプローチによる那崎原遺跡の生業	83

挿 図 目 次

第1図 那覇市の位置	
第2図 那覇市及び周辺の後期～グスク時代の主要な遺跡	3
第3図 那崎原遺跡の位置	4
第4図 グリッド設定及び発掘調査地区	6
第5図 層序断面図	9
第6図 遺構配置図	10
第7図 鍬跡群・溝跡群・焼土遺構群・堅穴状遺構群	12
第8図 ちー97周辺の鍬跡群拡大図	13
第9図 溝跡群	14
第10図 焼土遺構群	15
第11図 堅穴状遺構群	16
第12図 有文土器・無文土器（第1種）	26
第13図 無文土器（第1種）	27
第14図 無文土器（第1種、第2種、第3種）・有段口	
緑土器	28
第15図 底部：第1種 a	29
第16図 底部：第1種 b、第2種	30
第17図 底部：第2種、第3種 a	31
第18図 底部：第3種 b	32
第19図 土製品、石製品	33
第20図 石器：石斧	35
第21図 石器：すり石	36
第22図 本土産須恵器	37

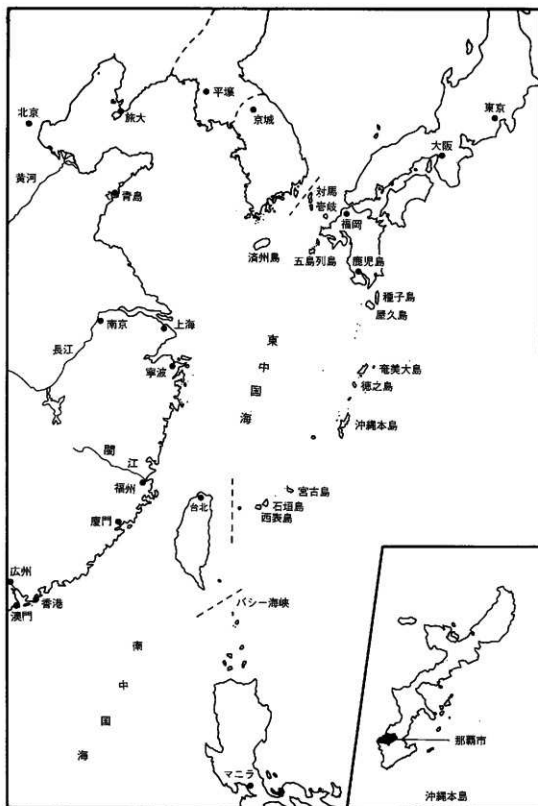
第23図	中国産青磁：碗・香炉	39
第24図	中国産青花：皿・碗	40
第25図	タイ産土器：蓋・褐釉陶器・蓮華	41
第26図	灰釉陶器：碗・皿・壺	44
第27図	鉄釉陶器：碗、鉄釉＋灰釉：碗、鉄釉＋白釉：碗、黒釉陶器：碗	45
第28図	白釉陶器：碗	46
第29図	白釉陶器：小碗・碗	48
第30図	施釉陶器：皿・角皿・蓋・鍋	49
第31図	施釉陶器：灯明具・火入れ	50
第32図	無釉陶器：甕・鉢・搥鉢	54
第33図	無釉陶器：搥鉢	55
第34図	無釉陶器：水鉢・壺	56
第35図	無釉陶器：小皿・火炉・不明	57
第36図	陶質土器：鉢・鍋・土瓶	58
第37図	陶質土器：炉・不明	59
第38図	本土産陶磁器：小碗・皿・碗・水注	60
第39図	円盤状製品	62
第40図	円盤状製品	63
第41図	金属製品：カンザシ・カンザシ状製品	68
第42図	金属製品：貨銭	69
第43図	金属製品：用途不明品	70
第44図	煙管：陶製・金属製	72
第45図	土製品、碁石、人形、印章、塔形製品、ブラシ状製品	74
第46図	瓦：丸瓦	76
第47図	瓦：平瓦	77

表 目 次

第1表	沖縄諸島の暫定編年	
第2表	出土遺物一覧	17
第3表	土器分類出土量	17
第4表	有文土器観察一覧	18
第5表	無文土器観察一覧	19
第6表	有段口縁土器観察一覧	20
第7表	底部分類別出土表	21
第8表	底部観察一覧	21
第9表	石器出土一覧	34
第10表	青磁観察一覧	38
第11表	青花観察一覧	38
第12表	沖縄産陶器集計	42
第13表	施釉陶器出土一覧	47
第14表	施釉陶器（碗類）出土一覧	53
第15表	無釉陶器出土一覧	53
第16表	陶質土器出土一覧	53
第17表	本土産陶磁器観察一覧	60
第18表	材質と大きさ別出土状況	61
第19表	円盤状製品計測一覧	64
第20表	カンザシ計測一覧	66
第21表	貨銭観察一覧	67
第22表	用途不明品計測一覧	67
第23表	煙管計測一覧	71
第24表	瓦集計一覧	75

図 版 目 次

図版 1	1944年の遺跡周辺の空中写真		タイ産土器：蓋、褐釉陶器、蓮華
図版 2	1984年の遺跡周辺の空中写真	図版21	石器：石斧
図版 3	上：北東側より遺跡を望む 下：北側より発掘調査を望む	図版22	石器：すり石
図版 4	上：発掘調査風景（南西側より） 下：発掘調査風景（北西側より）	図版23	本土産須恵器
図版 5	上：そライン・94ラインの層序 下：そー97層序の近景	図版24	中国産青磁：碗・香炉
図版 6	上：鉄跡の検出状況 下：鉄跡の近景	図版25	中国産青花：皿・碗
図版 7	上：鉄跡の断面状況 下：鉄跡の発掘調査風景	図版26	灰釉陶器：碗・皿・壺
図版 8	上：1号溝跡の検出状況 中：2・1号溝跡全景（東側より） 下：2号溝跡の断面状況（西側より）	図版27	鉄釉陶器：碗、鉄釉＋灰釉：碗 鉄釉＋白釉：碗、黒釉陶器：碗
図版 9	「鉄跡＋溝跡」の連景	図版28	白釉陶器：碗
図版10	上：鉄跡・1号溝跡の近景 下：雨上がりの1・2号溝跡	図版29	白釉陶器：小碗・碗
図版11	上：焼土遺構群 下：焼土Aの検出状況	図版30	施釉陶器：皿・角皿・蓋・鍋
図版12	上：焼土Aの断面状況 中：竪穴状遺構群 下：竪穴状遺構の断面	図版31	施釉陶器：灯明具・火入れ
図版13	有文土器・無文土器（第1種）	図版32	無釉陶器：甕・鉢・擂鉢
図版14	無文土器（第1種）	図版33	無釉陶器：擂鉢
図版15	無文土器（第1種、第2種、第3種）・有段口縁土器	図版34	無釉陶器：水鉢・壺
図版16	底部：第1種 a	図版35	無釉陶器：小皿・火炉・不明
図版17	底部：第1種 b、第2種	図版36	陶質土器：鉢・鍋・土瓶
図版18	底部：第2種、第3種 a	図版37	陶質土器：炉・不明
図版19	底部：第3種 b	図版38	本土産陶磁器：小碗・皿・碗・ 水注
図版20	土製品、石製品	図版39	円盤状製品
		図版40	円盤状製品
		図版41	金属製品：カンザシ・カンザシ状 製品
		図版42	金属製品：貨銭
		図版43	金属製品：用途不明品
		図版44	煙管：陶製・金属製
		図版45	土製品、基石、人形、印章、塔形 製品、ブラシ状製品
		図版46	瓦：丸瓦
		図版47	瓦：平瓦



第1図 那覇市の位置

第1表 沖縄諸島の暫定編年（高宮編年）

九州	暫定 編年	土 器 型 式	沖縄諸島発見の 九 州 系 土 器	その他の年代資料	現行 編年
縄 文 時 代	早 期	前期 I ヤブチ式土器 東原式土器	} 瓜形文土器 }	ヤブチ式 6670±140Y. B. P. 東原式 6450±140Y. B. P.	早
	前期	II 室川下層式土器 曾畑式土器 桑痕文土器 桑痕文土器 神野A式土器 神野B式土器		曾畑式土器 桑痕文土器 曾畑式（波具知東原） 4880±130Y. B. P.	期
	中期	III 具志川式土器 神野C式土器 面縄前庭式土器			
	後 期	IV 神野D式土器 神野E式土器 伊波式土器 萩堂式土器 大室川式土器	出水系土器 市来式土器	伊波式（熱田原） 3370±80Y. B. P. 伊波式（室川） 3600±90Y. B. P.	前 期
	晩 期	V 室川上層式土器 宇佐浜式土器 仲原式土器		宇佐浜式は黒川式 並行とみられる	中 期
弥 生 時 代	前期	後期 I 真栄里式土器	板付Ⅱ式土器 亀ノ甲類似土器		後
	中期	II 具志原式土器	山ノ口式土器		
	後 期	III アカジャンガー式土器	免田式土器	アカジャンガー式 は中津野式並行と みられる	
	古墳時代 / 平安時代	IV フェンサ下層式土器		須恵器	期

注「フェンサ下層式土器はグスク時代初期」とする見解もある。

第Ⅰ章 調査に至るまでの経緯

第1節 調査に至るまでの経緯

沖縄総合事務局では、那覇空港への乗降客の増加や国内線・離島線・国際線が分散し機能的でないことより、新ターミナル建設の計画を行った。同計画の段階で、那覇市宇安次嶺の用地造成工事地内においての埋蔵文化財の有無について平成3年12月3日付けで照会がなされた。

当教育委員会では当該地域については、戦後は米軍、復帰後は防衛庁施設局等によって管理されており埋蔵文化財については十分に把握されてなく、試掘調査が必要であるとの回答を行った。その後調整の結果、平成4年3月2日～同月5日の期間で埋蔵文化財の確認調査を実施することになった。

調査は当教育委員会が主体になり、用地造成工事地内（20ha）を対象にバックホーを用いて25ポイントの試掘を行った。その結果、用地内の南側丘陵の頂部一帯に沖縄新石器時代後期の遺跡が1カ所発見された。遺跡名は、遺跡の所在する那覇市宇安次嶺の小字名「那崎原」より那崎原遺跡と命名した。

当教育委員会は試掘調査の結果を踏まえて、沖縄総合事務局那覇空港工事事務所と発見された埋蔵文化財（那崎原遺跡）の取り扱いについて速やかに協議を行った。協議の結果、工事計画の変更は極めて困難であり、やむを得ず記録保存の措置をとることとなった。

その後、沖縄総合事務局は平成4年6月16日付けで文化庁長官に文化財保護法第57条の6第1項の規定に基づき「埋蔵文化財発見通知」を提出した。

これについて当教育委員会は文化庁の指導により、同年7月9日付けで「工事着手前に発掘調査を実施」するように送付通知した。

その結果、調査に要する経費は沖縄総合事務局が負担し、調査を当教育委員会が実施することになった。

調査は平成4年7月22日より開始された。

第2節 調査体制及び成果の記録

(1) 調査体制

発掘調査及び報告書作成は次の体制により実施された。

事業主体	那覇市教育委員会	教 育 長	嘉手納是敏
事業所管	〃	文化課 課 長	高江洲 隆
調査総括	〃	主 幹	金武 正紀
事業事務	〃	係 長	新城 和範(平成4・5年度)
〃	〃	〃	仲間 健幸(平成 6年度)
〃	〃	〃	佐久川 馨(平成 7年度)
〃	〃	主任主事	手登根 朗(平成4・5年度)
〃	〃	〃	我那覇生男(平成6・7年度)
〃	〃	主 事	當銘 優子
調 査 員	〃	〃	島 弘
〃	〃	〃	内間 靖
〃	〃	〃	玉城 安明
〃	〃	〃	仲宗根 啓

(2) 発掘調査作業員

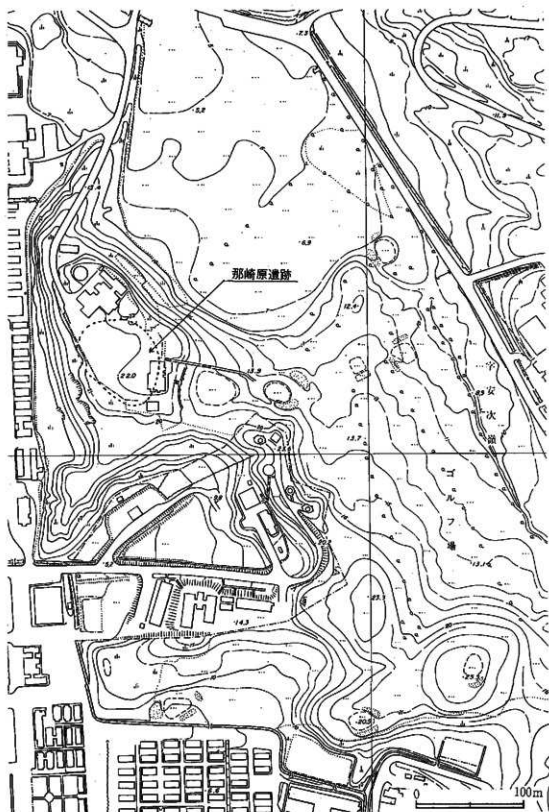
赤嶺春美・石原昌浩・上地末子・上原正夫・大城 浩・太田吉光
 小那覇美恵子・喜舎場盛安・金城 文・金城ツネ子・金城由美子
 瑞慶覧長祐・渡嘉敷光栄・富田和美・中塚末子・仲村トヨ子
 並里富子・西原とも子・比嘉すが子・与那覇勢津子・真栄城千枝子
 松田和江・宮国恵子

(3) 成果の記録(資料整理)

洗浄・注記・接合：大城園美・伊良波房子・大城綾子
 実 測：城間千栄子・宮良文子・内間浩子・慶田秀美
 伊良波房子・大城綾子・浦崎順子・大城真由美
 拓 本：宮良文子・大城真由美
 ト レ ース：宮良文子・慶田秀美・伊良波房子
 撮影・現像・焼付：金武正紀・栗山初美・仲里志麻子・赤嶺知子・野村知子・
 津波古清美



第2図 那覇市及び周辺の後期～グスク時代の主要な遺跡



第3図 那崎原遺跡の位置

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

那崎原遺跡は、沖縄県那覇市宇安次嶺に所在する。那覇市は東中国海に面した沖縄本島南西部にあり、北に浦添市、東に西原町、東南に南風原町、南に豊見城村と隣接する県内人口の約1/4 (301,928人) を擁する沖縄の政治・経済の中心都市である (第1図)。

本市は、ほぼ略三角形を呈し東西に約11km、南北に約8kmを測り、総面積37.89km²を占める。地形的には、東中国海側の市街地の標高2～10mの沖積地を琉球石灰岩の台地が北に天久台地、東に首里台地、南に識名台地・小禄台地が取りまき大きく低地と石灰岩台地の2つに分けられる。また、市内には台地より安謝川・久茂地川・国場川等が東中国海に流れ込む。市内は首里地区・那覇地区・真和志地区・小禄地区に大きく分けられる。

小禄地区は国場川以南の一带に展開する地域である。さらに、安次嶺は小禄一带の西側に位置する。本遺跡は、その安次嶺の最西端に占地する。一带には那覇空港と自衛隊駐屯基地が展開する。

遺跡はその施設内に立地し那覇空港の東側に延びる標高約22mの小さい丘陵上南端部に占地する。南端部はやや馬の背状を呈し、遺跡はその一带に展開していたものと思われる。丘陵の西方前面には東中国海に向けて標高約4mの海岸部 (リーフ) が広がり、丘陵の後背地には湿地帯が控えている。湿地帯では戦前水田農耕が営まれていたとのことである。

遺跡に立つと、瀬長島～三重城一带が一望でき、さらに、東中国海西方洋上には慶良間諸島が眺望できる景勝地である。このような自然環境は、那崎原の人々に自然の恵みや外來からの情報、文物を大いにもたらしたものと考える。

ところで、小禄周辺の遺跡分布は軍用地との関係で那覇港周辺の琉球石灰岩一带に偏在する傾向が見られるが、旧石器～近世までの遺跡が幅広く立地している。

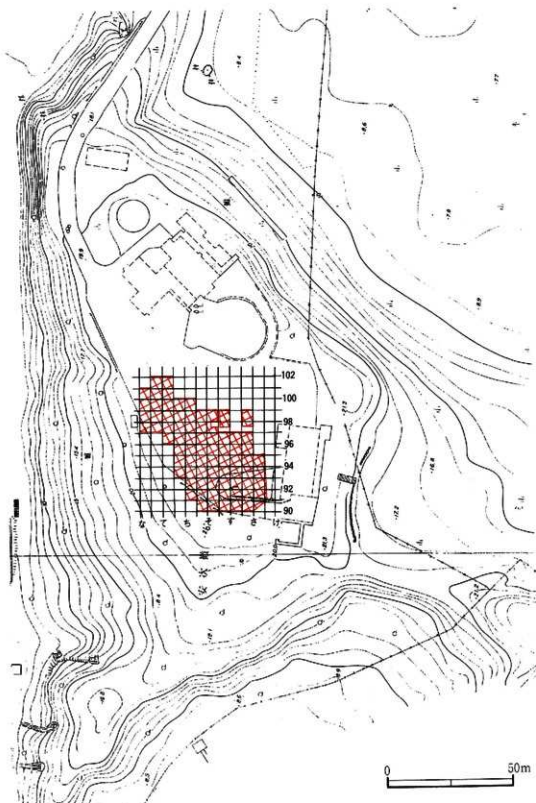
その大半がグスク時代～近世にかけての遺跡である。このことは、グスク時代以降小禄一带へ遺跡が広がっていたことが窺い知れる。その延長線上に那崎原遺跡が展開していたものと考ええる。

<参考文献>

『統計那覇』 No102 那覇市 1996年2月

『あけもどろの都市への道しるべ』 第2次総合計画 那覇市 1988年

上原静・太田宏好他『那覇市の遺跡』 那覇市教育委員会 1982年3月



第4図 グリッド設定及び発掘調査地区

第三章 調査経過

本遺跡の発掘調査は1992年7月22日～11月30日までの約4ヶ月行った。調査は周辺に広がる表土（アスファルト・その下位に広がるコーラル層）の整地層をバックホーを用いて取り除く作業より開始した。

グリッド設定は、ほぼ磁北に沿って基準線を設け、4×4mを単位とした方眼を調査区全体に設定した。東西の軸を北側より算用数字の100・99・98・・・、南北軸に東側よりあ・い・う・・・と付し、グリッド読みは南西隅の交点を「さ-94・し-94・・・」と呼称した。

調査は、セラインと95ラインに土層観察用の畦を残し、せ-95・そ-94・た-94の3グリッドより本格的に開始した。

調査の進め方としては、遺物包含層を追う形で徐々に北西側に広げていった。その状況より、遺物包含層は南から北へ堆積した状況を呈していた。包含層をほぼ完掘後、地山面に半月状のピットが群をなして北西側を中心に露出し始めた。それに併せて、溝状の遺構等も検出され「鉄跡と溝跡」のセット関係より畑跡(?)の遺構が想定された。このことより、県内では当該期の農耕に関する遺構としては、初めての発見なので慎重に発掘調査を実施した。併せて、遺物包含層及び遺構群の土壌サンプリングを行いフローテーション法も実施した。その後、遺構を完掘後、全体の地形測量・細部測量等を繰り返し、11月30日にすべての発掘調査を完了した。

第四章 層序と遺構

第1節 層序

本遺跡は、ほぼ独立した小丘陵状に形成された遺跡である。遺跡は第I章でも記したように、試掘調査によって発見されたものである。土層の堆積状況は周辺の地形に左右されるが、現在の地形は北側が高く、そこから約1.1mの落差で中央から南側にかけて平坦面に造成された地形を呈している。北側と南側にそれぞれ近代の建物跡が確認され、米軍の保養施設（クラブハウス等）の建設のために南北の頂きが削平されたものと考えた。

それらのことを踏まえて、当該期の地形を試掘調査や地山ラインから復元すると、米軍が接収以前は南北にそれぞれ小高い丘がみられ、北側が最も高く、それについて南側にも小高い頂きが見られたものと考えられた。いわゆる馬の背状の地形を呈していたものと推察される。そのことより、土層の堆積状況は全体的に南北の高いところから中央～西側の

窪みにかけて緩やかに堆積したものであった。確認された層序は基本的に第Ⅰ層（擾乱層）・第Ⅱ・Ⅲ層（遺物包含層）第Ⅳ層（いわゆる地山）の4枚見られた。ところで、南側では第Ⅲ層上面が削平され、直接第Ⅰ層が堆積した状況を呈していた。以下、個々の土層について記述する。土層の側壁図は典型的な部分を掲載した。

第Ⅰ層：擾乱層で、Ⅰa層とⅠb層に細分される。

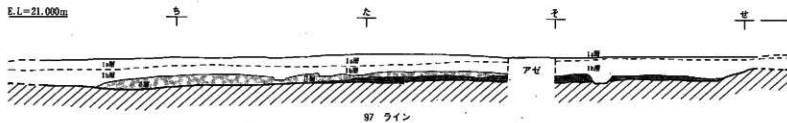
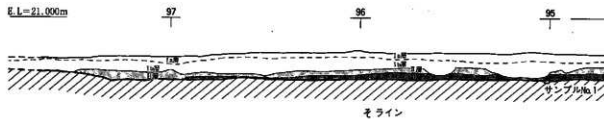
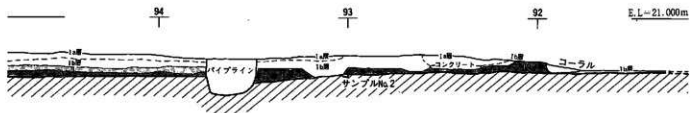
Ⅰa層は米軍等によって造成された赤黄褐色土層でアスファルト及びコーラルの整地層の下位に広がる。本層より現・近代の遺物が得られている。戦後の客土層である。Ⅰb層は旧表土で淡い黄褐色の砂質土層である。グスク時代～近世にかけての遺物が得られている。

第Ⅱ層：淡い茶褐色土層で新石器時代後Ⅳ期の包含層である。本層は南側では削平され確認されなかったが、調査区の中央で顕著に見られた。遺物は後期土器等単独に得られたが、上面では第Ⅰ層と接するためグスク～近世にかけた遺物も僅かに見られた。

第Ⅲ層：第Ⅱ層の下位に広がる黒褐色土層で新石器時代後Ⅳ期の包含層である。調査区全面で確認された地層で、南側では上面が削平され、第Ⅰ層と接する。遺物は後期土器が単独に得られ、僅かに本土産須恵器と石器等が見られた。

第Ⅳ層：淡い赤褐色の土層で無遺物層である。赤褐色の烏尻マージに類似するが粘性が弱く、砂質状にサラサラとした土層である。本層の上面に鉄跡等の各種の遺構が確認された。

第5図 層序断面図



第2節 遺構

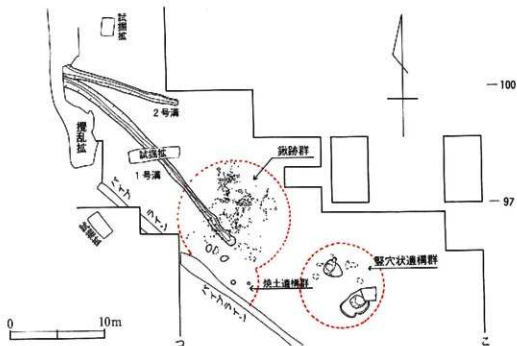
遺構は遺物包含層（第Ⅱ・Ⅲ層）を完掘後、地山面（第Ⅳ層）において鉄跡群・溝跡群・焼土遺構群・竪穴状遺構群がそれぞれ検出された。下図に遺構配置図を示した。以下、鉄跡より略述する。

（鉄跡群）

調査区の北西側斜面地、ち-96・97グリッドを中心に約250基以上が確認された。平面形は半月状で、複数の場合は多角形を呈する。主に、単独で検出された。断面は概ね「レ」字状を呈し、大きさは半月状の弦にあたる部分が、15cm前後、深さ8cm前後を測るものが主である。鉄跡の方向としては、緩やかな斜面地に対して鉄先を振り下ろしたものと思われる。鉄跡の特徴としては鉄先を振り下ろし、土を起す際に生じる鉄屑痕が残るものもいくつか観察された。内部に堆積している埋土は第Ⅲ層で、僅かに後期土器片が得られた。

（溝跡群）

溝跡群も北西側斜面地において、鉄跡群を南北より挟む形でV状に2本確認された。南側の溝を1号溝跡、北側の溝を2号溝跡と呼称した。1号溝跡は南東側の高い所から北西部の低い所に延びる形で、2号溝跡は東側の高い所より低い北西部へ延びる形で検出され



第6図 遺構配置図

た。1・2号溝跡とも北西側の低地で合流する。両遺構には重複関係が見られ合流地点で2号溝跡が1号溝跡を切る形で確認された。やや2号溝跡が新しいものと解した。溝跡の幅約70～80cmを測るが、先端部は狭く掘野は幅広である。断面は逆台形状を呈するが、部分的には溝縁に段を設ける箇所も見られた。

溝跡内部の埋土は第Ⅲ層で、僅かに土器片が得られた。

(焼土遺構群)

1号溝跡の先端部南側(ち・つ-95)の周辺地山面(第Ⅳ層)においての焼土遺構が5基確認された。保存状態は悪かったが、地山面を僅かに皿状に掘り窪めたものである。平面形は不定形で、概ね略円形を呈したものとされた。その中で最も保存状態の良い焼土Aの堆積状況を見てみると、焼土層と炭化層が互層を呈していた。平面形の最大のもので約120cm、最小のもので約45cmを測る。断面の深さ20cmである。

焼土遺構群・その周辺の土壌については、フローテーション法を試みた。僅かであったが、炭化種子を検出した。詳細については、高宮広土氏の報文に譲る。

(竪穴状遺構群)

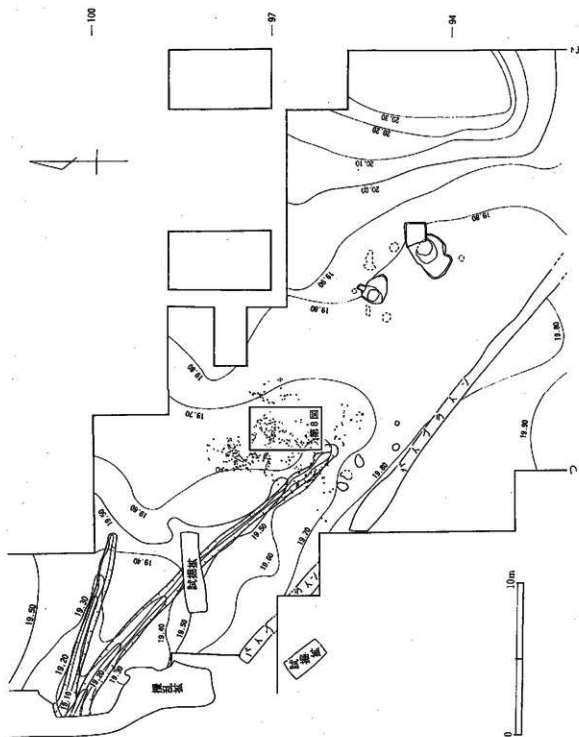
1号溝跡の先端部東南側(せ-94・そ-95)の周辺地山面において竪穴状遺構群が2基確認された。その竪穴状遺構群の周辺に不定形ピット群らしき落ち込みがいくつか確認されたが、判然としなかった。本遺構群も保存状態は悪かったが、地山面を不定形に浅く掘り込んだものである。

両遺構とも内部に有段状に立ち上げる共通な特徴を有する。

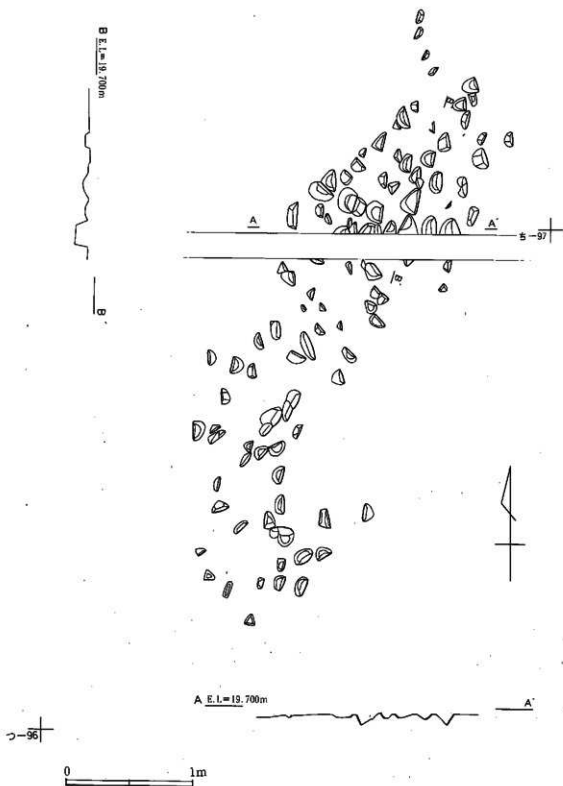
1号竪穴状遺構は隅丸長方形を呈し、せ-94グリッドにおいて検出された。主軸をN-45-Eを示し、西側に幅広の平坦面を1段設ける。さらに、帯状に中心部を取り囲む形状を呈している。サイズが長軸300cm、短軸220cm、最深部24cmを測る。

2号竪穴状遺構も1号竪穴状遺構と同じような特徴をもち、内部の東側に幅広の有段面と北側にステップ状の平坦面を持つ。主軸はN-50-Wである。サイズは長短ともにほぼ200cmを測り、最深部が25cmである。

両遺構とも内部に堆積している埋土は第Ⅲ層で、遺物は土器片が僅かに得られた。



第7図 鉄跡群・溝跡群・焼土遺構群・竪穴状遺構群



第8図 ち-97 周辺の鋳跡群拡大図

A E.L.=20.000m

A'

B E.L.=20.000m

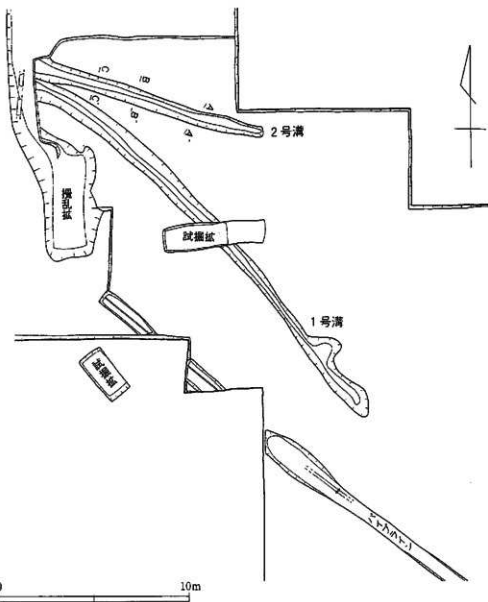
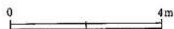
B'

C E.L.=20.000m

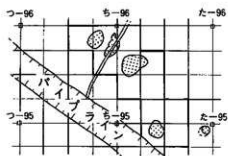
C'



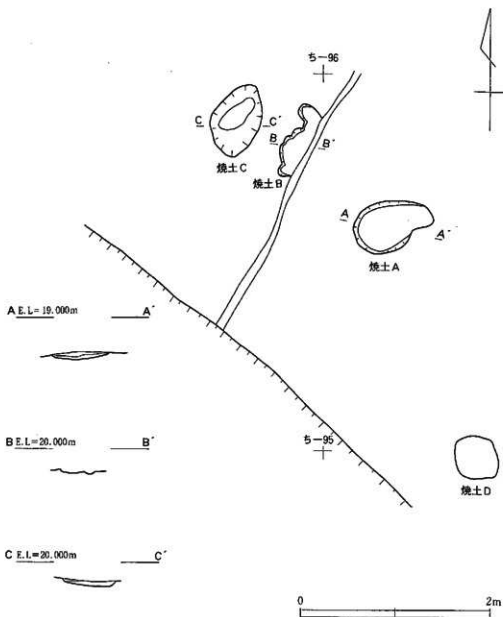
2号溝跡の断面



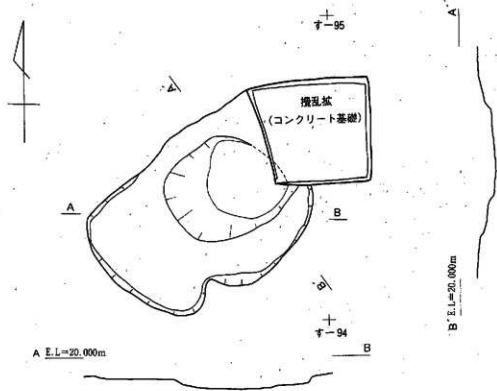
第9図 溝跡群



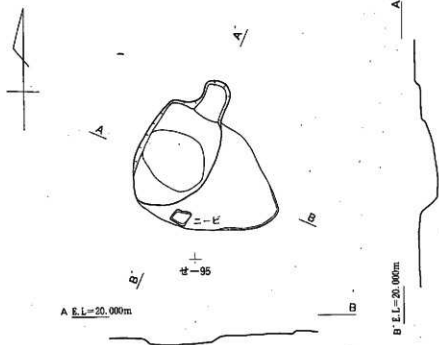
焼土遺構群配置図



第10図 焼土遺構群



1号遺構



2号遺構



第11図 竪穴状遺構群

第V章 出土遺物

本遺跡から得られた遺物は人工遺物と自然遺物に分けられる。人工遺物には土器・石器・陶磁器・青銅製品・印章・瓦等が各種得られている。自然遺物としては、貝類・獣骨・炭化種子等が見られた。貝類・獣骨については、近代に比定される第Ⅰ層（攪乱層）よりの出土である。

その中で、特筆されることは、後Ⅳ期の土器群が単独で出土したことである。一部第Ⅱ層上面で第Ⅰ層の遺物も見られたが、基本的には第Ⅱ層及びその下位に確認された第Ⅲ層は未攪乱層である。そのことを踏まえて、以下、第Ⅱ・Ⅲ層と第Ⅰ層出土別に報告する。その他に、注目を惹いたのは、植物の炭化種子が、焼土遺構及び第Ⅲ層より僅かであるが検出されたことが挙げられる。詳細については、高宮広土氏の報文に譲る。

以下、層序別に記述する。

第2表 出土遺物一覧

種類 層序	土器	土製品	石器	石製品	本土産須恵器	青磁	青花	タイ産土器	褐釉陶器	産	沖縄産陶器	本土産陶磁器	白磁器	円盤状製品	金属製品	煙管	基石	人形	印章	塔形製品	ブラス状製品	瓦	合計
I 層	148	2	1	8		14	143	1	3	1	793	129	81	104	14	9	1	1	1	1	3	247	1705
II 層	831		1	7			6				35	2	4	3	1							4	894
III 層	1275	1		4	3																		1283
IV 層				2																			2
1遺構	2																						2
2遺構	1																						1
鉄跡	1																						1
溝 1	19																						19
溝 2	13		1																				14
不明	2																						2
合計	2292	3	3	21	3	14	149	1	3	1	828	131	85	107	15	9	1	1	1	1	3	251	3923

第3表 土器分類出土表

分類	有文				無文			有段	胴部	合計
	凸帯文	刻目文	沈線文	凸帯+刻目文 +沈線文	第1種	第2種	第3種			
Ⅰ層	①				1			1	129	132
Ⅱ層	②		①		3			2	759	767
Ⅲ層	1 ④		1	①	20	6	1		1149	1183
1遺構									2	2
2遺構									1	1
鉄跡									1	1
溝 1		①			1				17	19
溝 2									12	12
不明						1	1			2
小計	8	1	2	1	25	7	2			
合計				12			34	3		
								49	2070	2119

※ ○ 口縁部付近資料

第1節 沖縄新石器時代後Ⅳ期

第Ⅱ・Ⅲ層の遺物

第Ⅱ・Ⅲ層から得られた遺物は、無文土器が殆どで僅かに、石器・本土産須恵器などが見られた。以下、土器より記述する。

a. 土器

土器は、第2表に示すように総数2292点得られた。全形を知り得る土器は得られず、すべて小破片である。その口縁部の破片の形状から器種を推定すると殆どが甕形土器で、甕形土器等の他の器種は確認できなかった。その中で、口径推算可能なものについては図上復元を試みた。土器の一般的特徴を簡記すると、口縁部でやや外反し胴部で僅かに張り丸・平底に至る甕形の土器が殆どである。無文土器が主体を占め、僅かに有文土器が得られた。

分類は文様の有無で有文土器と無文土器に分け、無文土器は口縁部の傾きで細分した。さらに、口縁部を有段状に成形する特徴的な資料も得られているので別に一括して取り扱うことにした。底部は外形によって、乳房状尖底・平底・くびれ平底に大きく分けた。以下、有文土器より記述する。掲載した資料の個々の記述は観察表に譲る。参照されたし。

(有文土器)

第12図1～8に示したものである。器形は無文土器の第1種に含まれるものと考えられる。文様はすべて小破片のため全体の構図は把握できないが、概ね後期土器に見られる文様構図と想定される。それもだいたい簡略された文様と考えられる。基本的な文様の種類としては、刻目文・沈線文・凸帯文等の文様が見られ、それらを組み合わせて文様を構成している。

第4表 有文土器観察一覧

(cm)

標記番号 図録番号	出土地点 出土順序	器種	分類	法 量				形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色 質	混入物
				口径	唇径	底径	底厚						
第12図1 図録1941	せー94 Ⅱ	甕	1	19.0	0.6	-	-	口縁部で外反し胴部で縮まる甕形。口唇部は尖底を帯びる。胴部に孔が穿たれている。	口縁部に沈線文を描くナゲ刷しを施すが、裏に指紋が残る。	灰質 精製	やや 軟質	黄褐色 褐色	石灰質砂粒
" 2 2	すー92 Ⅱ	"	1	-	0.8	-	-	上記1に準じた器形が想定される。	胴部に刻目凸帯を逆し縁部に有段状の沈線をナゲ刷し。裏面に指紋が残る。	灰質 精製	"	暗褐色 赤褐色 黒色粒	石灰質砂粒 赤褐色 黒色粒
" 3 3	せー92 Ⅱ	"	1	14.5	0.4	-	-	上記1に同じ。	口唇部は舌状に直形し、胴部に凸帯を張り付ける。裏面はナゲ刷しで磨製。指先に粉痕が付く。	灰質 精製	軟質	黄褐色	赤色粒 黒色粒
" 4 4	たー94 Ⅰ	"	1	-	0.4	-	-	"	胴部に乳房状の凸帯を張り付ける。裏面ともナゲ刷すが、手触りはザラザラする。	砂質 粗製	硬質	黄褐色	石灰質砂粒 赤褐色 ガラス質の結核

# 5	と目	1	-	0.5	-	-	小破片のため不明。	頸部に横位の凸部を1条、腹部に縦位の2条張り付ける。	砂質 緑製	やや 硬質	黒褐色	石灰質砂粒 ガラス質の 鉱物
# 6	た目	1	-	0.5	-	-		口縁部に凸部を連らす。ナデ無し。指先に粉束が付く。	"	"	"	"
# 7	た目	1	-	0.5	-	-			"	"	"	"
# 8	て目	1	-	0.8	-	-	腹上縁の隆起が限定される。他の土器群と色を異にする。口縁部は丸味を帯びる。	頸部に斜目文を連らす。器面に灰人物が露出し手触りはザラザラする。	砂質 粗製	やや 軟質	暗褐色	石灰 石灰質砂粒

(無文土器)

第12～14図に示したものである。その殆どが、小破片のため口径推算可能な資料とガジャ
(定1) (定2)
ンビラ遺跡・安謝東原遺跡等の当該期に属する遺跡の資料を参考に下記のとおり分けた。

第1種 胴部で膨らみ口縁部を外反させるもの

第2種 胴部でやや膨らみ口縁部を僅かに折り曲げるもの

第3種 胴部から口縁部に直に立ち上げるもの

第5表 無文土器観察一覧

(cm)

図版番号	出土地点	器種	分属	法 量				形状の特徴	手法の特徴	粘土	焼成	色 調	混入物
				口径	器型	底径	底径						
第12図9 図版1349	し-94 直	Ⅱ	1	-	0.6	-	-	口縁部を丸味に成形し、ラッパ状に外側へ開くものである。	ナデ無しを施すが、器面が一部新着している。	砂質 粗製	やや 軟質	黒褐色	石灰質砂粒 ガラス質の 鉱物 赤色粒
# 10 # 10	き-93	"	1	-	0.4	-	-	口縁部を舌状に成形。胴部の上端、口縁部をくの字に折り曲げる。	ナデ無し。器面に指痕が残る。	泥質 粗製	"	暗茶褐色	石灰質砂粒 赤色粒 黒色粒
第13図1 図版1401	Ⅱ	"	1	17.2	0.1	-	-	口縁部を丸味に成形。胴部で膨らみ口縁部を外反するものである。	ナデ無し。	"	やや 硬質	"	赤色粒 ガラス質の 鉱物 石灰質砂粒
# 2	そ-95 直	"	1	10.0	0.4	-	-	口縁部を平坦に成形する器形は上記3に同じ。	ナデ無しであるが、器面に指痕が残る。	砂質 粗製	"	黄褐色	石灰質砂粒
# 3 # 3	た-96 直	"	1	10.2	0.5	-	-	器形は上記3にほぼ類似。	ナデ無しを施すが、指先に粉束が付く。	泥質 粗製	"	黄褐色	石灰質砂粒 ガラス質の 鉱物
# 4 # 4	そ-92 直	"	1	-	0.5	-	-	口縁部を丸味に成形し、縁部で外反するものである。	ナデ無しを施すが、器面は裏面が残る。手触りは滑らかである。	"	硬質	暗茶褐色	赤色粒 ガラス質の 鉱物
# 5 # 5	し-94 直	"	1	-	0.5	-	-	口縁部は頸部に比べてやや狭く丸味に成形。口縁部で外反し胴部で隆起する器形が限定される。	ナデ無しを施す。器面が新着している。	砂質 粗製	やや 軟質	淡茶褐色	石灰質砂粒 赤色粒 ガラス質の 赤色粒
# 6 # 6	そ-92 直	"	1	-	0.5	-	-	口縁部をやや平坦に成形全体的には上記1に同じ。	"	"	"	暗茶褐色	石灰質砂粒 赤色粒 ガラス質の 鉱物
# 7 # 7	そ-96 直	"	1	-	0.6	-	-	上記2に同じ。	ナデ無しを施す。器面は新着している。手触りは滑らかである。	泥質 粗製	硬質	暗褐色	石灰質砂粒
# 8 # 8	そ-96 直	"	1	-	0.6	-	-	上記1?と同一器形と考えられる。	"	"	"	淡茶褐色 暗褐色	石灰質砂粒
# 9 # 9	う-93 直	"	1	-	0.5	-	-	口縁部を平坦に成形。器形は上記1に類似するものと思われる。	ナデ無し。やや器面にポーラスが見られる。	"	"	淡茶褐色	赤色粒

神田番号 図版番号	出土地点 出土順序	器種	分類	法 量				形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色 調	混入物
				口縁	器壁	底厚	底径						
第14図9 図版1501	し-93	甕	1	-	1.0	-	-	口唇部平坦に成形。胴部は胴縁で隆起するものであり、外反するものである。	ナデ消し。胴縁は胴縁が見られる。	泥質 精製	やや 硬質	灰黄褐色	石灰質砂粒 ガラス質の 結晶 赤色粒
" 2 " 2	そ-94	"	1	-	-	-	-	"	"	"	"	"	石灰質砂粒 赤色粒
" 3 " 3	す-92 " 3	甕	2	-	0.5	-	-	口唇部平坦。胴縁で隆起。胴縁で底面に外反する。全体の状況より大瓶なり土器にもなるものと推測される。	ナデ消し。胴縁に隆起が見える。胴縁部に混入物が露出し、手触りはザラザラする。	砂質 粗製	やや 軟質	緑黄褐色	石灰質砂粒 石灰質
" 4 " 4	そ-92 " 4	甕	2	12.5	0.5	-	-	口唇部は丸縁に作り、やや胴部を厚めに成形。胴縁は上記1に同じ。	ナデ消し。底面に隆起が見える。胴縁部に混入物が露出し、手触りはザラザラする。	泥質 精製	"	緑黄褐色 微褐色	石灰質砂粒
" 5 " 5	す-93 " 5	甕	2	10.1	0.5	-	-	"	ナデ消し。手触りは滑らかである。	"	"	緑黄褐色 赤褐色	石灰質砂粒 赤色粒
" 6 " 6	た-94 " 6	不明	2	-	0.5	-	-	口唇部は舌状に成形。胴縁等の特徴は上記1に同じ。	ナデ消し。胴縁部は胴縁が見られる。	"	"	灰黄褐色	ガラス質の 結晶
" 7 " 7	不明	"	2	-	0.5	-	-	口唇部は舌状に成形。胴縁より底に立ち上がる輪郭。	"	"	やや 硬質	緑黄褐色	石灰質砂粒 赤色粒
" 8 " 8	し-92 " 8	甕	2	-	0.1	-	-	"	ナデ消し。	砂質 粗製	"	灰黄褐色 赤褐色	石灰質砂粒 ガラス質の 結晶

(有段口縁土器)

第14図9～11に示したものである。口縁部に肥厚帯を巡らし、いわゆるカヤウチバンタ式土器に類似した土器である。上記の土器群とは質感が異なり、器面及び胎土はややポーラス状を呈している。全体に淡い黄褐色を呈し、器壁も厚く焼成良好の土器である。

第6表 有段口縁土器観察一覧

(cm)

神田番号 図版番号	出土地点 出土順序	器種	分類	法 量				形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色 調	混入物
				口縁	器壁	底厚	底径						
第14図9 図版1500	せ-91 I	甕	1	-	-	-	-	口唇部は舌状を帯びる。口縁部に約1.8cmの肥厚帯を巡らす。	ナデ消し。器表面内はややポーラス状を呈する。	泥質 精製	硬質	淡黄褐色	石灰質砂粒
" 10 " 10	ち-91 II	"	1	-	0.7	-	-	口唇部は平坦。口縁部に約4.3cmの肥厚帯を巡らす。縁部で外反し胴部で隆起する器形が想定される。底部に約1cmの孔を有する。	" 表面に横位の線画が見える。	"	"	"	"
" 11 " 11	ち-91 III	"	1	-	0.7	-	-	上記10と同一器種と思われる。	"	"	"	"	赤色粒 ガラス質の 結晶 石灰質砂粒

(底部)

第15～18図に示したものである。底面を平底もしくは丸・平底に成形したもので、外面の形状により大きく3種に分けられる。

第1種 乳房状尖底のもの。

第2種 平底のもの。

第3種 くびれ平底のもの。

第1種 乳房状尖底のもの。

第15図、第16図1～7に示したもので、底面が突出したものである。その内面は弧状に成形されるが、底径・厚さ・立ち上がり等の形状により、さらに、a・bに細分される

a：突出部を強調したもの、底面の厚さによって大（第15図11～13）・中（同図6～10）・小（同図1～5）の3種が見られる。

b：底面の突出部が弱いもの。aと同じように中（第16図2～7）と小（同図1）が見られる。

第2種 平底のもの

第16図8～14、第17図1・2に示したものである。底面からほぼ直に立ち上げるもので、厚手の土器である。内面は第1種と同様に弧状に成形されたものである。

第3種 くびれ平底のもの

第17図3～10、第18図に示したものである。底面の厚さや外底面の張り出しの度合いによってa・bに分けられる。

a：底面が厚く、内面が弧状に成形するもの。

b：底面が薄く、内面を平坦もしくは弧状に成形するもの。典型的なくびれ平底のもの。

第7表 底部分類別出土表

分類 層序	乳 房 状 尖 底					平 底		くびれ平底		合計
	a			b		大	中	中	小	
	大	中	小	中	小					
I			2	1		1		2	5	11
II	1	2	1	2		3		2	13	24
III	4	6	6	6	3	9	1	8	5	48
合 計	5	8	9	9	3	13	1	12	23	83

第8表 底部観察一覧

(cm)

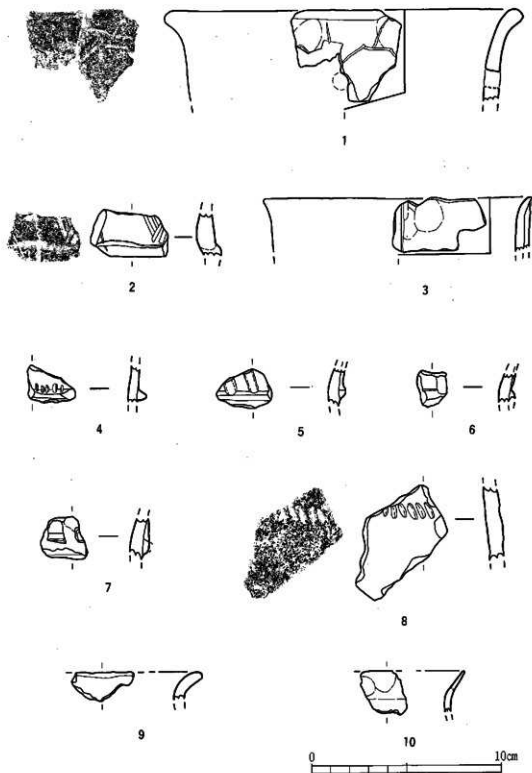
採図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	分類	法 量		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	混入物
				底厚	底径						
第15図1 図版1601	せー95 Ⅲ	底部	1a	1.3	3.4	底面より丸味を持ちながら立ち上げ、斜位に開く唇形。	ナデ消し	泥質 精製	やや 軟	橙褐色 淡黄色	赤色粒 黒色粒 石灰質
" 2 " 2	すー93 Ⅲ	"	"	0.9	3.2	底面平坦。	粉末が手につく。	"	やや 軟	淡黄色	茶色粒 石灰質

拝図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	分類	法 量		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色 調	混入物
				底厚	底径						
第15図3 図版1683	そー92 Ⅲ	底郎	1 a	1.1	3.2	底面は丸味。	ナデ消し。	軟	軟	淡褐色 赤褐色	茶色粒 石灰質
" 4 " 4	しー04 Ⅲ	"	"	1.1	3.6	"	"	"	"	淡褐色	"
" 5 " 5	さー98 Ⅱ	"	"	0.7	3.8	薄手の土器。	粉末が手につく。	"	やや軟	"	"
" 6 " 6	すー92 Ⅱ	"	"	1.6	3.0	底面は平坦。	"	"	"	"	赤色粒 茶色粒 石灰質
" 7 " 7	すー93 Ⅲ	"	"	1.7	3.8	底面は丸味。	"	"	軟	赤褐色 淡黄褐色	ガラス
" 8 " 8	すー92 Ⅲ	"	"	1.9	4.0	底面は平坦。	"	"	"	淡褐色 赤褐色	茶色粒 赤色粒 石灰質
" 9 " 9	すー93 Ⅱ	"	"	1.7	4.0	底面を凹状に成形 張り出しは弱い、斜位に開く 器形。	"	"	"	淡黄褐色 白黄褐色	"
" 10 " 10	そー92 Ⅲ	"	"	2.0	4.4	底面は丸味を帯 びる。	"	"	"	淡褐色 淡赤褐色	"
" 11 " 11	そー94 Ⅲ	"	"	2.1	4.1	底面を突出。	立ち上がりに 指頭痕が残る。 内面に磨痕が残 る。	"	"	淡褐色 黒褐色	"
" 12 " 12	たー93 Ⅲ	"	"	2.4	4.0	底面は丸味。 "	ナデ消し。	砂質 粗製	硬	灰褐色	"
" 13 " 13	すー94 Ⅲ	"	"		4.0	底面を突出。 内面擦痕が残る 内面上端に種子 痕らしきものが 2ヶ見られる。	"	泥質 精製	"	赤褐色 灰褐色	"
第16図1 図版1701	そー92 Ⅲ	"	1 b	1.0	4.4	底面は丸味。 かなり開きぎみ に立ち上がる。	ナデ消し	砂質 粗製	軟	赤褐色	"

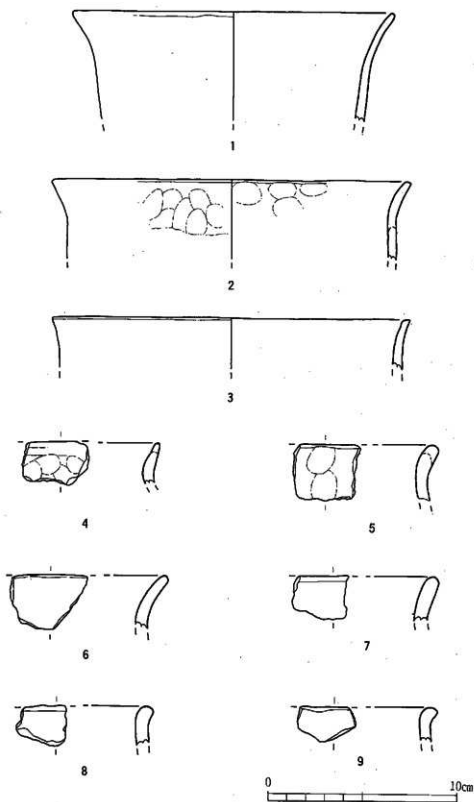
神田番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	分類	法 量		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色 調	混入物
				底厚	底径						
第16図2 図版1702	そー93 Ⅲ	底部	1 b	1.8	3.3	"	ナデ消し。	泥質 精製	"	淡橙褐色	"
" 3 " 3	たー95 Ⅲ	"	"		4.6	"	"	"	"	灰褐色	
" 4 " 4	そー94 Ⅲ	"	"	1.4	4.6	底面より丸味を 持ちながら立ち 上げ、斜位に開 く器形。	" 立ち上がりに指 頭痕が残る。	"	やや 軟	淡褐色 赤褐色	赤色粒 茶色粒 石灰質
" 5 " 5	そー94 Ⅲ	"	"	1.2	4.1	" 底面平坦。	" 粉末が手につ く。立ち上がりに 指頭痕が残る。	"	やや 軟	淡黄色 灰褐色	茶色粒 黒色粒 赤色粒
" 6 " 6	そー92 Ⅲ	"	"	1.5	4.0	" 底面は丸味。	"	"	軟	淡橙褐色 灰褐色	灰色粒 茶色粒 石灰質
" 7 " 7	せー94 Ⅲ	"	"	1.6	5.2	"	表面に僅かに擦 痕が残る。 ナデ消し。	砂質 粗製	"	赤褐色 灰褐色	"
" 8 " 8	たー96 Ⅲ	"	2	0.8	4.1	底面より僅かに 開く器形。 底面は平坦。	"	"	硬	茶褐色	"
" 9 " 9	たー93 Ⅲ	"	"	0.9	5.3	底面よりはぼ直 に立ちあげ底面 は凹状に成形。	ナデ消すが、擦 痕が残る。	"	"	赤褐色	赤色粒 茶色粒 石灰質
" 10 " 10	さー93 Ⅱ	"	"	1.3	4.8	" 底面は平坦	ナデ消し。	泥質 精製	軟	淡黄褐色	茶褐色 石灰質
" 11 " 11	せー95 Ⅱ	"	"	1.2	5.8	底面は平坦。 やや凹状に成 形。	"	"	軟	淡橙褐色	茶色粒 赤色粒 石灰質
" 12 " 12	すー92 Ⅲ	"	"	1.3	5.6	底面は丸味。 底面は丸味。	ナデ消し。 内面に擦痕が残 る。	砂質 粗製	硬	赤褐色 淡橙褐色	"
" 13 " 13	そー93 Ⅲ	"	"	1.4	5.6	底面より直に立 ち上げ底面は平 坦。	ナデ消し。	泥質 精製	"	赤褐色	"

押図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	分類	法 量		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色 調	混入物
				底厚	底径						
第16図14 図版17014	た-93 Ⅲ	底部	2	1.5	6.0	底面は凹状に成 形。	ナデ消し。	泥質 精製	硬	赤褐色 灰褐色	" 白色粒
第17図1 図版1901	す-93 Ⅲ	"	"	1.8	4.9	底面は丸味。	ナデ消し。	泥質 粗製	"	赤褐色 淡橙褐色	"
" 2 " 2	せ-94 Ⅲ	"	"	2.1	6.0	底面は平坦 厚手の土器	"	泥質 精製	"	淡橙褐色 灰褐色	" 赤色粒
" 3 " 3	そ-92 Ⅲ	"	3 a	1.8	5.1	底面は丸味。強 り出しは弱い。	"	"	"	赤褐色 焦げ茶	赤色粒 白色粒 石灰質
" 4 " 4	さ-98 Ⅱ	"	"	1.9	5.7	底面は丸味。開 きぎみに立ち上 がる。	ナデ消し。	"	"	"	"
" 5 " 5	せ-93 Ⅲ	"	"	2.0	3.8	" くびれが強い。	ナデ消し。	"	軟	淡黄褐色	"
" 6 " 6	そ-94 Ⅲ	"	"	1.8	5.6	底面は平坦。 やや凹状に成 形。	"	"	"	淡橙褐色	"
" 7 " 7	た-92 Ⅲ	"	"	1.5	5.2	くびれが強い。 底面は丸味。	ナデ消し。	粗製	"	赤褐色 灰褐色	"
" 8 " 8	た-92 Ⅲ	"	"	1.3	6.6	" 底面は丸味。	ナデ消し。 立ち上がりに指 頭痕が残る。	泥質 精製	"	赤褐色	"
" 9 " 9	す-92 Ⅲ	"	"	1.4	6.7	" 底面は平坦に成 形。	ナデ消し。 内面に擦痕が残 る。	"	"	淡黄褐色 焦げ茶	" 黒色粒
" 10 " 10	す-94 Ⅱ	"	"	2.1	5.2	底面は平坦。 くびれは弱い。 底面は凹状に成 形。	ナデ消し。	"	"	赤褐色 淡橙褐色	"
第18図1 図版1901	そ-98 Ⅱ	"	3 b	0.8	6.2	底面は平坦。 底面よりはぼ直 に立ち上げ、く びれは弱い。	ナデ消し 立ち上がりに指 頭痕が残る。	砂質 粗製	"	赤褐色	赤色粒 白色粒
" 2 " 2	せ-94 Ⅱ	"	"	0.6	5.8	"	"	泥質 精製	"	淡橙褐色	" 茶色粒

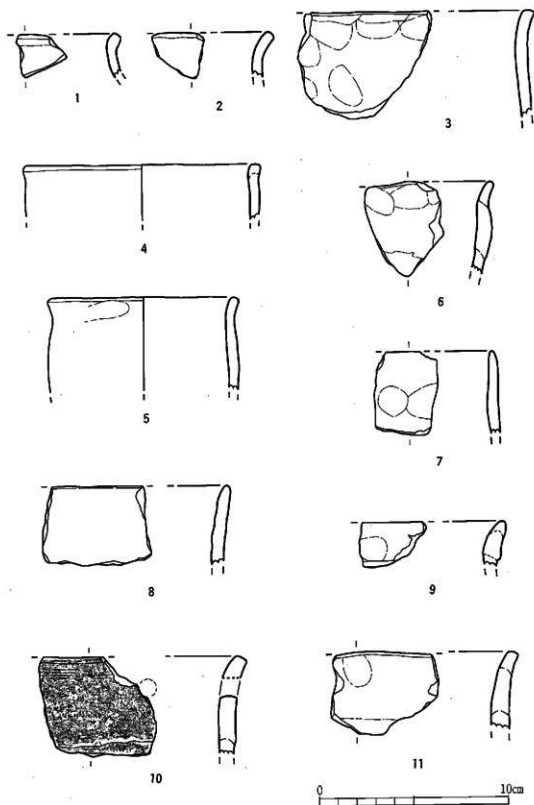
博覧番号 図版番号	出土地点 出土順序	器種	分類	法 量		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色 調	混入物
				底厚	底径						
第18図 3 図版1903	し-92 Ⅲ	底部	3 b	0.9	5.5	"	" 手触りがザラザラする。	砂質 粗製	軟	赤褐色 焦げ茶	" 石灰質 ガラス
" 4 " 4	そ-92 Ⅲ	"	"	0.7	6.3	" 底面を凹状に成形。	ナデ消し。 "	泥質 粗製	"	淡緑褐色	白色粒 赤色粒
" 5 " 5	す-93 Ⅲ	"	"	0.6	4.7	底面は丸味。 くびれは強く、 薄手の土器。	" 立ち上がりに指 頭痕が残る。	砂質 精製	"	赤褐色 淡黄褐色	白色粒 石灰質
" 6 " 6	す-92 Ⅱ	"	"	0.8	5.3	底面は丸味。 くびれは強く、 張り出し縁で波 打つ。	" "	"	"	" 焦げ茶	茶色粒
" 7 " 7	さ-93 Ⅱ	"	"	0.7	6.0	底面は平坦。 くびれは強く、 張り出しは丁 草。	"	"	"	赤褐色 淡黄褐色	白色粒
" 8 " 8	そ-96 Ⅲ	"	"	0.9	5.8	底面は平坦で、 僅かに凹状に成 形。	ナデ消し。	泥質 精製	硬	淡緑褐色 焦げ茶	茶色粒 白色粒
" 9 " 9	す-94 Ⅱ	"	"	0.6	7.2	同図7に同じ。 張り出しは弱 い。斜位に開く 器形。	" 立ち上がりに指 頭痕が残る。 手触りはザラザ ラする。	砂質 粗製	軟	赤褐色	" 石灰質 ガラス
" 10 " 10	さ-92 Ⅱ	"	"	0.8	6.7	"	"	"	"	赤褐色 焦げ茶	"
" 11 " 11	し-94 Ⅱ	"	"	1.4		底面は平坦で、 ほぼ直に立ち上 げる。	ナデ消し。	泥質 精製	"	淡緑褐色 茶褐色	赤色粒 白色粒



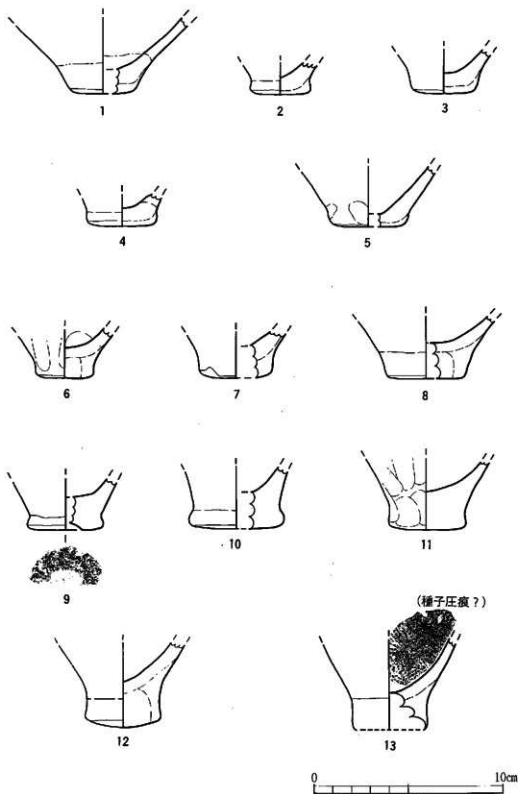
第12圖 (圖版13) 有文土器 (1~8)・無文土器 (第1種 9・10)



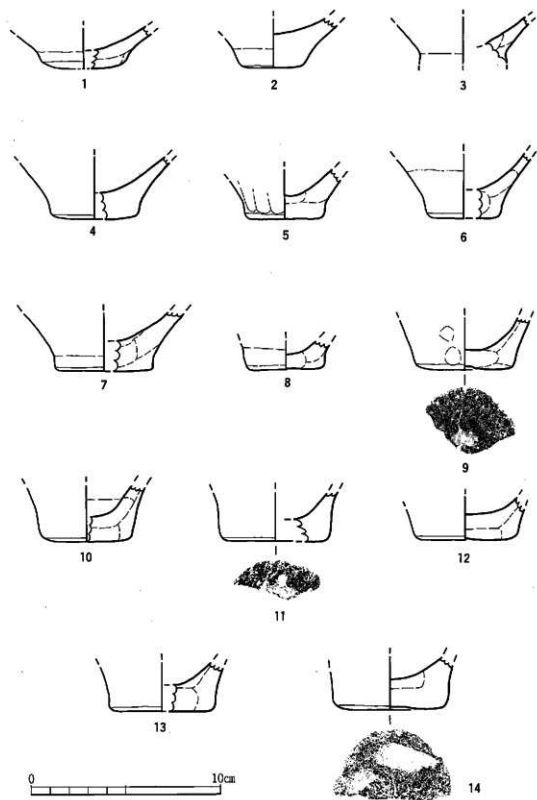
第13圖 (圖版14) 無文土器 (第1種1~9)



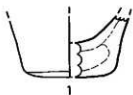
第14図 (図版15) 無文土器 (第1種1・2、第2種3~6、第3種7・8)
有段口縁土器 (9~11)



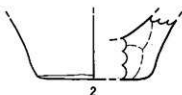
第15図 (図版16) 底部：第1種 a (1~13)



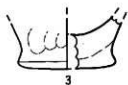
第16圖 (圖版17) 底部：第1種b (1~7)、第2種 (8~14)



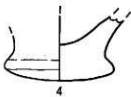
1



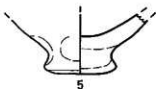
2



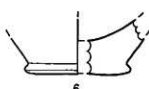
3



4



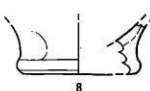
5



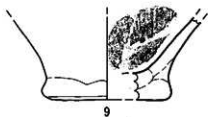
6



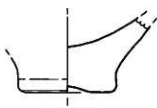
7



8



9



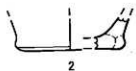
10



第17圖 (圖版18) 底部：第2種 (1・2)、第3種 a (3~10)



1



2



3



4



5



4



7



6



8



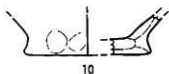
9



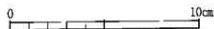
11



11



10



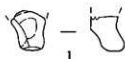
第18図 (図版19) 底部：第3種 b (1~11)

b. 土製品

下図に示した2点が得られた。同図1は全体の形状が円柱状で、底面を斜位に成形したものである。土器と同じ特徴を持ち、表面灰褐色、裏面橙褐色を呈する。胎土は泥質で精選された赤色粒や石灰質砂粒の混入が観察できる。これらのことより、有脚の器等が想定される。す-93第Ⅱ層からの出土。

同図2は土製の勾玉である。頭部は破損しているが、僅かに推定3mmの第1次焼成孔が観察される。表面は全体的にナデ消しを施し滑らかである。本標品も土器と同じ胎土が用いられ、泥質で精選された赤色粒・石灰質砂粒を含む。

現存長2.3cm、幅1.1cm、重さ2.7gを測る。す-93第Ⅲ層出土。



c. 石器

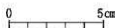
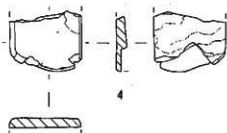
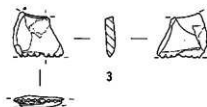
今回の調査で得られた石器は、石製品2点・石斧3点・すり石4点である。すべて破損品である。それらの出土状況・石質・法量等は第9表に示した。以下、器種別に記述する。

(石製品)

右図に示した、扁平な石製品が2点得られた。いずれも破損品で灰褐色を呈している。

同図3は下端部を研ぎ出し鋸歯状の細かい刻みを施したものである。表表面及び上端部は丁寧に研磨が施されている。類例資料としては、奄美諸島で出土している櫛形石器^(註3)の類似しているものと考えられる。

同図4は隅丸長方形の扁平な石器である。表面・側面・頭部は丁寧に研磨が施され、僅かに稜線が観察される。裏面は千枚岩特有の割面で破損。



第19図 (図版20) 土製品 (1・2)、
石製品 (3・4)

(石 斧)

第20図1～3に示したものである。同図1は基端部を欠くもので、基部のほぼ中央で横折れを呈したものである。全体に扁平なやや片刃の磨製石斧である。研磨は自然面を残しながら全面に施す。側面及び刃部は特に丁寧に研磨を施し、刃縁は尖らすのではなく平坦に研磨。

同図2は基部のほぼ中央で横折れ刃部を欠くものである。周辺を打削調整によってやや方形に成形したものである。中央側面は敲打によりややくびれ部をつくる。同図3も横折れの刃部を欠く資料である。基端部を打削・側面は敲打調整を施している。平面形は短冊状を呈する。裏面は削面を残す。

(すり石)

第21図1～4に示したもので、すべて破損品である。同図1は重量感のある標品で表面にかなり擦り面がみられる。側面は平坦を呈する。大型のすり石になるものと考えられる。

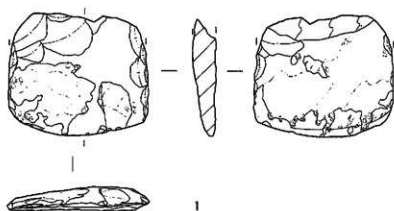
同図2・3ともに表面に擦り面がみられ、側面は敲打によって調整。

同図4は円形状すり石の縁辺部の資料である。全体に擦り面が残り、表面はやや凹状、裏面は弧状に成形。

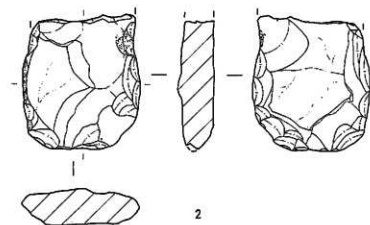
第9表 石器出土一覧

(cm, g)

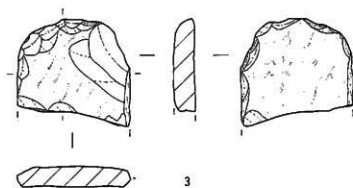
押図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器 種	法 量				石 質
			長 さ	幅	厚 さ	重 さ	
第19図3 図版2003	て-100 溝跡	石製品	2.2	2.3	0.5	4.3	粘板岩
" 4 " 4	そ-96 Ⅱ	"	3.0	3.8	0.5	11.0	緑色千枚岩
第20図1 図版2101	ち-97 Ⅳ	石 斧	6.3	7.3	1.2	88.7	緑色片岩
" 2 " 2	た-95 Ⅱ	"	7.1	6.2	1.9	144.2	緑色片岩
" 3 " 3	そ-96 Ⅱ	"	5.0	5.9	1.1	60.8	砂 岩
第21図1 図版2201	そ-93 Ⅲ	すり石	7.8	3.8	6.3	263.6	安山岩
" 2 " 2	つ-96 Ⅳ	"	6.0	3.7	3.5	74.7	砂 岩
" 3 " 3	ち-94 Ⅱ	"	3.2	2.8	2.7	28.8	砂 岩
" 4 " 4	し-93 Ⅲ	"	6.1	1.6	1.8	20.3	閃緑岩



1



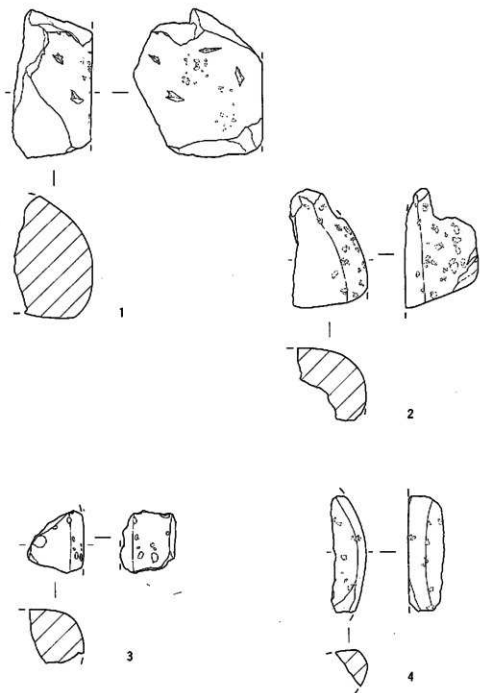
2



3



第20図 (図版21) 石器：石斧 (1～3)



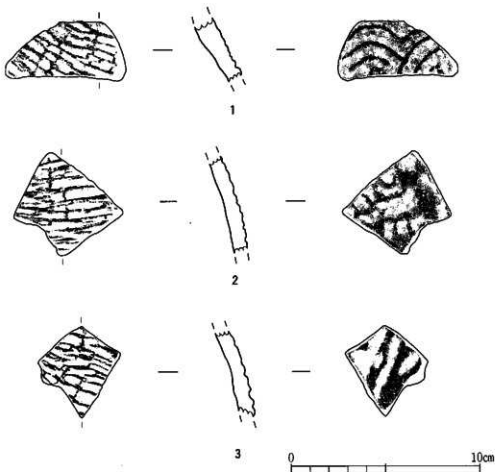
0 10cm

第21図 (図版22) 石器：すり石 (1～4)

d. 本土産須恵器

下図に示した3点が得られた。いずれも灰褐色系で、肩部～胴部にかけての壺形の資料である。同図1は肩部付近の資料で、外面には横位の叩き文を内面には同心円状の宛木痕が見られる資料である。色調は器面が白黄色で断面が淡灰褐色を呈する。素地は精選され、白色粒・黑色粒等が観察できる。す-94第Ⅲ層出土である。

同図2・3は胴部の資料である。2は全体に淡灰褐色を呈し、外面に横位の叩きで内面には同心円状の宛木痕が見られる。し-94第Ⅲ層出土。3も外面は横位の叩きで内面は僅かに横位にラインが見られる。表面淡紫褐色、裏面灰褐色を呈する。た-92第Ⅲ層出土。その他の素地・混入物等は上記1に類似。



第22図（図版23） 本土産須恵器（1～3）

第2節 グスク時代以降

第I層の遺物

本層から得られた遺物は、中国産磁器・タイ産土器・沖縄産陶器・金属製品・印章・瓦等が各種見られた。以下、中国産青磁より記述する。

a. 青磁

第2表に示したとおり14点得られた。すべて破片である。その中で、形状の窺えるものを抜き出し第23図に示した。14c～15cにかけての資料である。以下、個々の観察は第10表に示した。

第10表 青磁観察一覧

(cm)

押図番号 図版番号	出土地点 出土順序	器種	法 量			素 地	観 察 事 項
			口径	器高	底径		
第23図1 図版2401	た-98 I b	碗	-	-	-	灰白色 微粒子	外面に墨文を施す。 釉薬は薄く、緑白色に発色。
" 2 " 2	そ-93 I	"	-	-	-	"	外反口縁で墨文。 釉薬はやや厚く、緑白色に発色。
" 3 " 3	た-96 I	"	-	-	-	"	釉薬はやや厚く、モスグリーンに発色。
" 4 " 4	つ-98 I b	"	-	-	-	淡白色 微粒子	釉薬は厚め、淡い緑色を呈する。
" 5 " 5	た-92 I	"	-	-	6.2	磨胎 微粒子	高台内は磨胎。 釉薬は薄く、緑白色に発色。
" 6 " 6	た-92 I	"	-	-	7.1	"	大振りのおど。釉薬はやや厚く、粗い貫入が見られる。淡い灰緑 白色を呈する。
" 7 " 7	す-92 I b	香炉	11.0	-	-	"	口縁内面より外面に釉薬を施す。外面は薄く、内面やや厚い。細 かい貫入が見られる。

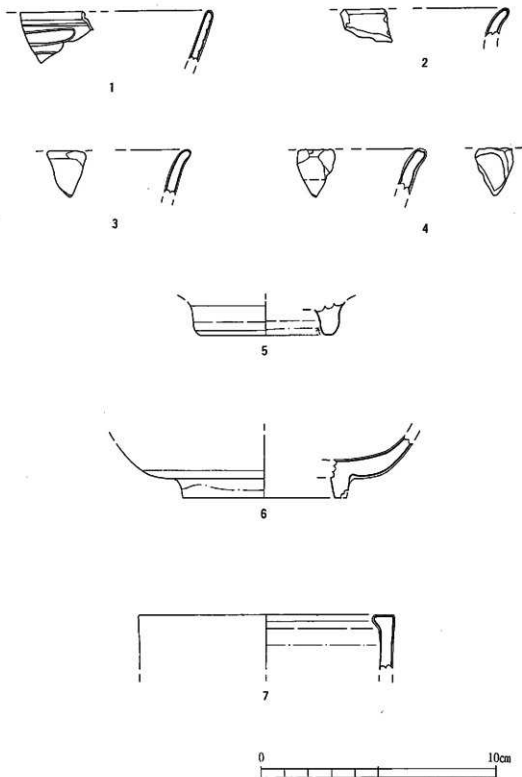
b. 青花

第2表に示したとおり149点得られた。その中で、形状の窺えるものを第24図に示した。17c～18cに属するものである。以下、個々の観察は第11表に示した。

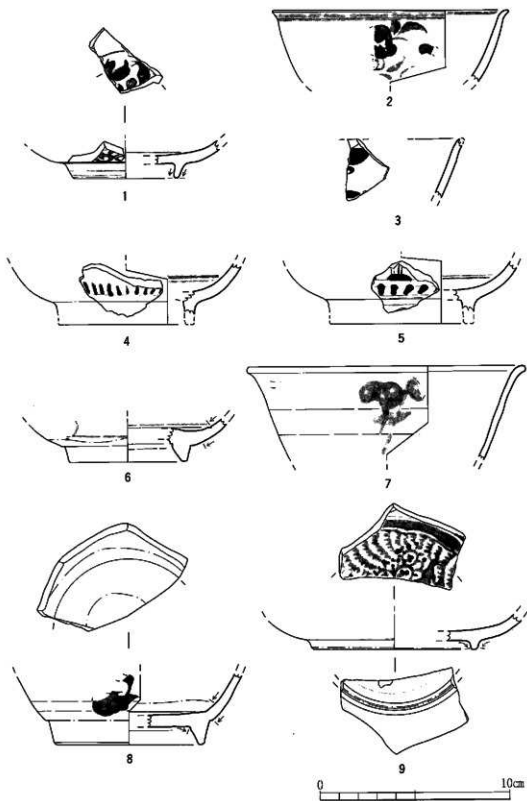
第11表 青花観察一覧

(cm)

押図番号 図版番号	出土地点 出土順序	器種	法 量			素 地	観 察 事 項
			口径	器高	底径		
第24図1 図版2501	と-101 I b	皿	-	-	5.6	淡白色 微粒子	髹付けは磨胎。腹部に如意頭繫ぎ文、高台に蘭線3条を配す。見 込みに草花文と蘭線2条施す。
" 2 " 2	す-96 I b	碗	12.5	-	-	"	外反口縁で外面に草花文を描く。
" 3 " 3	ち-93 I	"	-	-	-	"	典須の発色が悪い。
" 4 " 4	せ-96 I	"	-	-	-	"	腹部に菊花散らし文を施す。 見込みに蘭線2条を配す。
" 5 " 5	す-96 I b	"	-	-	-	"	胴部に寿字文らしきものが見られる。
" 6 " 6	I	"	-	-	6.2	灰白色 粗粒子	腹部～高台・見込みは磨胎。内外面に鉄輪による磨線が見られる が料然としない。乳白色に発色。
" 7 " 7	そ-96 I	"	14.8	-	-	"	外面に抽象的な文様を描く。 全体に乳白色を呈する。
" 8 " 8	そ-94 I b	"	-	-	8.0	"	7と同一個体と思われるものである。高台と見込みは輪状に磨 胎。
" 9 " 9	す-96 I b	皿	-	-	8.8	白色 微粒子	髹付けは磨胎。高台部と内面に磨胎を施す。 内面には磨胎状の文様を描く。



第23图 (图版24) 中国产青磁：碗（1～6）・香炉（7）



第24圖 (圖版25) 中国産青花：皿 (1・9)・碗 (2～8)

c. タイ産土器

第25図1に示したもので、蓋の縁部の資料である。縁部を舌状に成形し内側に細い凸帯を巡らす。

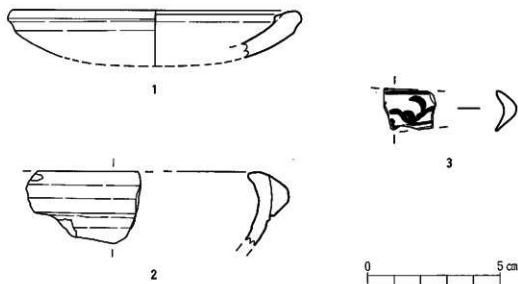
全体には皿状の形状を呈する。本資料では確認されていないが、中央には摘みが付くことが知られている。⁽²⁵⁴⁾色調は淡黄褐色で、素地に赤色粒・黒色鉱物などを多量に混入する。推算で口径11cm、器高2.1cmを測る。て-99第I b層より出土。

d. 褐釉陶器

第25図2に示したもので、内湾する鉢形である。口縁部は口唇部を幅広く成形するが、そのために縁部に三角状の張り付けが断面に観察されるものである。全体に嘴状の断面形態をイメージさせる。釉薬は内面から外面に施したもので、素地は灰褐色を呈し緻密である。と-97第I b層より出土。

e. 蓮華

第25図3に示したもので、蓮華の柄の破片である。断面をV字状に成形し、内面に呉須により「ちり蓮華文」を配したものである。素地は灰白色を呈し緻密である。さ-92第I層より出土。



第25図 (図版20) タイ産土器：蓋 (1)、褐釉陶器 (2)、蓮華 (3)

f. 沖縄産陶器

沖縄産陶器は施釉陶器・無釉陶器・陶質土器の三種が得られた。これらは、焼き物の里「那覇市壺屋」において、それぞれジョウヤチ・アラヤチ・アカムンと通称されているものである。その殆どが、小破片で第Ⅰ層より多数得られた。その中より典型的なものを抜き出し図示した。また、分類に際しては「伊良波西遺跡」「壺屋古窯群Ⅰ」を参考に分けた。以下、施釉陶器から紹介する。

A：施釉陶器

施釉陶器（ジョウヤチ）は第12表に示したとおり総数605点得られた。器種は碗・皿・鍋・火入れ等が得られた。分類に際しては、器種別に分類し、碗類については量的に得られたので釉薬の違いによって灰釉陶器・鉄釉陶器・黒釉陶器・白釉陶器に細分を試みた。以下、碗類の灰釉陶器より述べる。

灰釉陶器

素地に灰釉を「つけ掛け」によって施したもので、見込み・高台は露胎。甃付けに細かい砂粒が残る。

(碗)

第26図1～8に示したものである。直口口縁で高台より逆「ハ」の字状に開く器形である。「いわゆる湧田碗」と呼ばれている一群である。

(皿)

第26図9～11に示したものである。9・10は小皿、11は大皿になるものと思われる。

(壺)

第26図12に示したものでわずか1点得られた。器形は高台脇より丸味を持ちながら立ち上がり、胴下半部で腰の折れる壺である。

第12表 沖縄産陶器集計

器種	施釉	灰釉陶器										鉄釉陶器										陶質土器					
		施釉										施釉										施釉					
		碗	皿	鍋	火入れ	その他	小	中	大	計	碗	皿	鍋	火入れ	その他	小	中	大	計	碗	皿	鍋	火入れ	その他	小	中	大
Ⅰ	口縁部	10	4	11	9	7	10	19	17	11	3	10	8	29	5	9	5	9	10	8	3	1	9	4	1	4	9
	口縁部以下	4	4	11	9	7	10	19	17	11	3	10	8	29	5	9	5	9	10	8	3	1	9	4	1	4	9
Ⅱ	口縁部	10	4	11	9	7	10	19	17	11	3	10	8	29	5	9	5	9	10	8	3	1	9	4	1	4	9
	口縁部以下	4	4	11	9	7	10	19	17	11	3	10	8	29	5	9	5	9	10	8	3	1	9	4	1	4	9
Ⅲ	口縁部	10	4	11	9	7	10	19	17	11	3	10	8	29	5	9	5	9	10	8	3	1	9	4	1	4	9
	口縁部以下	4	4	11	9	7	10	19	17	11	3	10	8	29	5	9	5	9	10	8	3	1	9	4	1	4	9
計		10	4	11	9	7	10	19	17	11	3	10	8	29	5	9	5	9	10	8	3	1	9	4	1	4	9
小計		10	4	11	9	7	10	19	17	11	3	10	8	29	5	9	5	9	10	8	3	1	9	4	1	4	9
大計		10	4	11	9	7	10	19	17	11	3	10	8	29	5	9	5	9	10	8	3	1	9	4	1	4	9
合計		10	4	11	9	7	10	19	17	11	3	10	8	29	5	9	5	9	10	8	3	1	9	4	1	4	9
小計		10	4	11	9	7	10	19	17	11	3	10	8	29	5	9	5	9	10	8	3	1	9	4	1	4	9
大計		10	4	11	9	7	10	19	17	11	3	10	8	29	5	9	5	9	10	8	3	1	9	4	1	4	9
合計		10	4	11	9	7	10	19	17	11	3	10	8	29	5	9	5	9	10	8	3	1	9	4	1	4	9

鉄釉陶器

素地の内外面に鉄釉のみを施したものと、外面に鉄釉、内面に灰釉・白釉を掛け分けたものが見られた。

(碗)

鉄釉

第27図1～3に示したものである。鉄釉を外面は腰までつけ掛けで、内面は総釉で見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施す。畳付け内面に白土が残る。

鉄釉＋灰釉

第27図4～6に示したものである。外面に鉄釉、内面に灰釉を施した一群である。見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施し、畳付けに白土が残る。

鉄釉＋白釉

第27図7・8に示したものである。外面は高台まで総釉がけで、内面は白釉を施す。見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施し、畳付けに白土が残る。

黒釉陶器

素地に黒色釉を施すもので、第27図9に示した。本遺跡よりは黒釉＋灰釉の掛け分けた碗が得られた。外面に黒釉を高台脇まで施し、内面に灰釉を施釉。見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施す。

白釉陶器

素地に白化粘土を塗付後に透明釉を施すものである。釉薬は器体にすべて施すが畳付けは露胎である。見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施し、畳付けには白土が残る。碗と小碗の2種が得られた。

(碗)

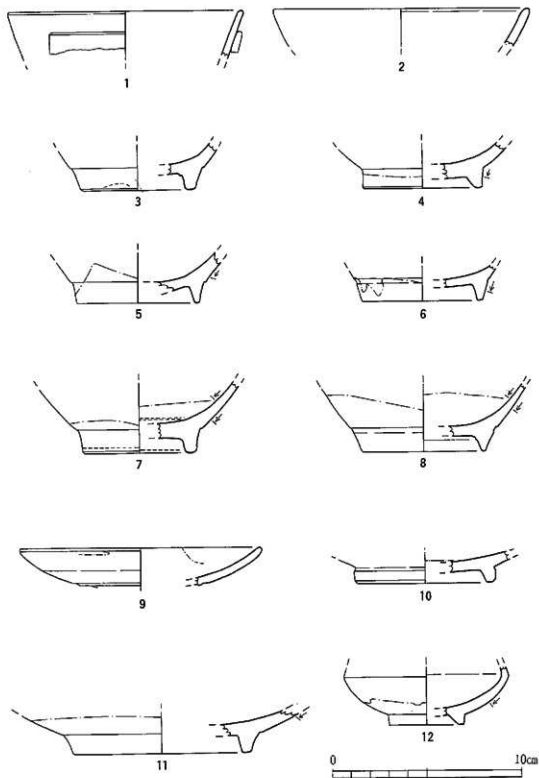
第28図1～9・第29図5に示したものである。器形は胴部より丸味を帯び、口縁部で外反するものである。無文が殆どであるが、第28図1は呉須による草花文(?)を描くものも得られている。

(小碗)

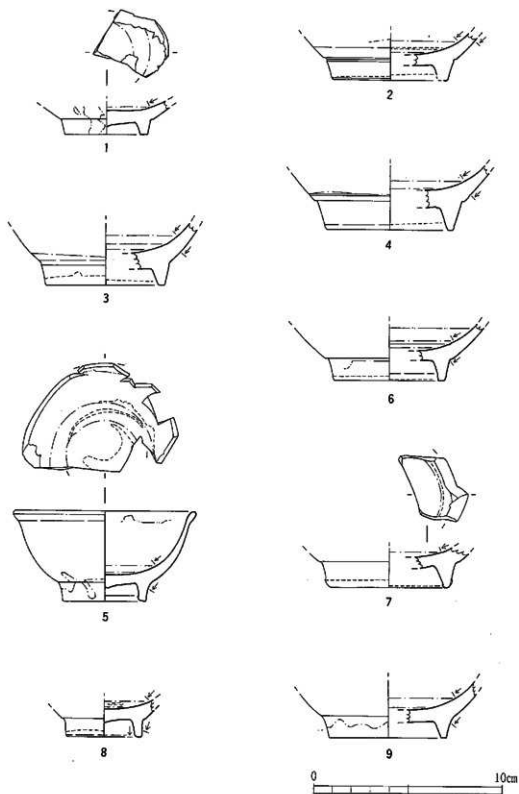
第29図1～4・6～8に示したものである。成形技法等は碗形と同じであるが、形は碗形に比べて開きぎみに立ち上がる特徴を有している。また、腰部に面取りを施したのも得られた。

(皿)

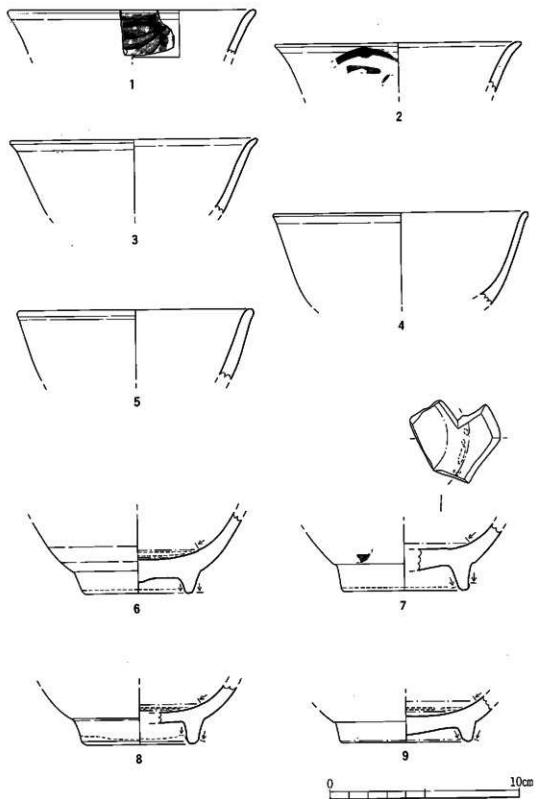
第30図1～4に示したものである。1は口縁部を輪花状に成形し、内面に呉須による円弧文を描く。2は長方形の角皿で、口縁部内面から高台脇まで茶褐色釉を施し、外面に青釉を



第26圖 (圖版26) 灰釉陶器：碗 (1～8)・皿 (9～11)・壺 (12)



第27图 (图版27) 鉄釉陶器：碗 (1~3)、鉄釉+灰釉：碗 (4~6)
鉄釉+白釉：碗 (7・8)、黒釉陶器：碗 (9)



第28图 (图版28) 白釉陶器：碗 (1~9)

やや帯状に巡らしたものである。高台は露胎。

3・4とも外面に鉛釉、内面に灰釉を施し掛け分けた高台資料である。

(蓋)

第30図5・6に示したもので、外面に黒釉を施したものである。底面は高台状の滑り止めを有するもので、水注・壺等の蓋になるものと思われる。

(鍋)

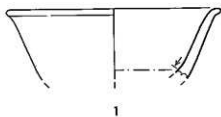
第30図7～9に示したものである。7・8は蓋受け部を露胎にし階段状に成形したものである。前者は内面灰釉、外面黒釉と掛け分けたものである。後者は内外面とも灰釉を施したもので、淡黄褐色に発色した資料である。

9は蓋の縁部をL字状に折り曲げるもので、外面のみに鉛釉を施した資料である。

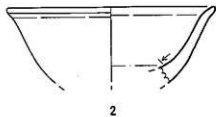
第13表 施釉陶器出土一覧

(cm)

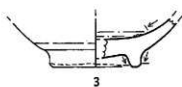
揮図番号 図版番号	出土地点	器種	部位	口径	器高	底径
第30図1 図版30の1	つ95 I a	皿	口縁部	14.2		
" 2 " 2	た92 I 攪乱	角皿	口～底		3.0	
" 3 " 3	つ93 I a	皿	底部			5.5
" 4 " 4	そ96 I a	皿	底部			5.4
" 5 " 5	た92 I b	蓋	口縁部	11.1		
" 6 " 6	た95 I a	蓋	口縁部	12.6		
" 7 " 7	せ95 I	鍋	口縁部	13.6		
" 8 " 8	つ97 I a	鍋	口縁部	15.8		
" 9 " 9	な99 I c	蓋	口縁部	17.0		
第31図1 図版31の1	せ98 I b	灯明具	口縁部	4.6		
" 2 " 2	つ99 I a	灯明具	口縁部	6.6		
" 3 " 3	す96 I a	火入れ	口縁部	11.2		
" 4 " 4	つ95あぜ	火入れ	口縁部	13.2		
" 5 " 5	せ94 I a	火入れ	底部			8.0
" 6 " 6	て99 I a	火入れ	底部			8.4



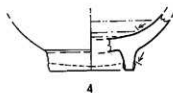
1



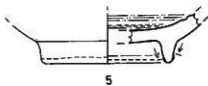
2



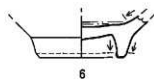
3



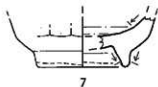
4



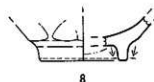
5



6



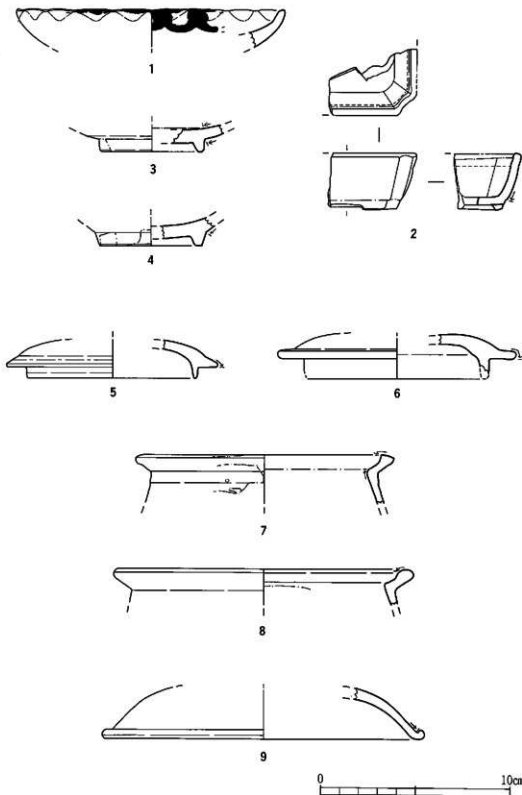
7



8



第29图 (图版29) 白釉陶器：小碗 (1~4·6~8)·碗 (5)



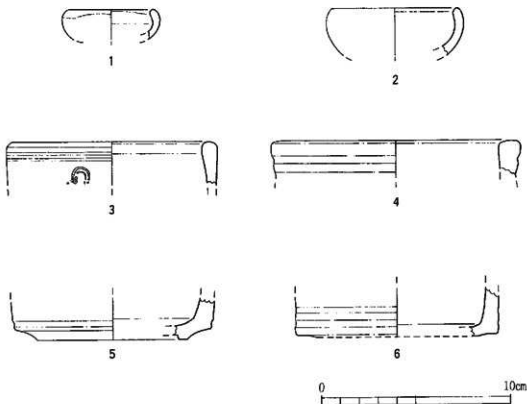
第30図 (図版30) 施釉陶器：皿 (1・3・4)・角皿 (2)・蓋 (5・6)・鍋 (7～9)

(灯明具)

第31図1・2に示した。胴部より内湾状に立ち上がり口唇部を丸味に成形したものである。前者は素地に白化粧土を施釉後、呉須による縁取りを口唇部に施したものである。後者は呉須による全面施釉したものである。両者とも灯心部と脚部は破損しているが、乗燭と考えられるものである。

(火入れ)

第31図3～6に4点示した。筒形の器形をしたもので、通常タバコの火種を蓄える器として知られている。3は灰釉を口縁部内面から外面にかけて施したものである。口縁部外面に白化粧土による渦巻き状の象嵌を施す。4は鉄釉を内外面に施し、口唇部は露胎を呈する。5・6は腰折れで高台を有する資料で、5が白釉、6が鉄釉を腰部まで施す。



第31図 (図版31) 施釉陶器：灯明具 (1・2)・火入れ (3～6)

B：無釉陶器

無釉陶器（アラヤチ）は第12表に示しているとおり総数146点得られた。器種は鉢・壺・甕・皿などが見られた。その中で特徴的なものを抜き出し図示した。以下、甕形より述べる。

（甕）

第32図1に示したもので、胴部より直線的に立ち上げ口縁部を逆「L」字に折り曲げるものである。口唇部端部は凹線を2条巡らし、器表面に赤色顔料（？）を薄く施した資料である。本資料は厳密には、施釉陶器に含まれるが今回は器形等より取りあえず本項で取り扱った。今後、留意する資料と考える。

（鉢）

第32図2・3・5に示したもので、口縁部を逆「L」字に折り曲げたものである。2はL字が弱く、縁部に僅かに屈曲が見られる。3は逆にL字が強く口唇部を幅広く成形し、端部に沈線を1条巡らす。

5は底面より丸味をもたせ立ち上がるもので、重量感のある底部資料である。外面は横位にヘラ削りが内面には布目痕が観察できる。

（播鉢）

第32図4・第33図1～6に示したもので、口縁部を逆「L」字に折り曲げるがその形状により弱いもの（第33図1）、中間のもの（第33図2）、強いもの（第32図4・第33図3）の各種に分けられる。第32図4の資料は口縁部内面をナデ消しを施しているが、わずかにカキ目が観察される。5・6は底部資料で底面より直に立ち上がるものである。

（水鉢）

第34図1～5に示したもので、肩部より内湾する器形である。口縁部の形状により口唇部を平坦にするもの（1～3）と、舌状にするもの（4・5）に大きく分けられる。口縁部には波状沈線文が巡らされている。

（壺）

第34図6～9に示したもので、口縁部を玉縁状（6）、外反するもの（7）、L字状にするもの（8）等が見られた。9は底面より丸味を帯びながら立ち上がるもので、壺の底部と考えられるものである。

（小皿）

第35図1～4に示したものである。内湾ぎみに立ち上がり口縁部で僅かに屈曲し、口唇部を舌状に成形したものである。底部は平底を呈することが知られている。1・2は、口唇部にスス痕が残る灯明皿として用いられたことが窺える資料も得られている。

4は上げ底状の平底の資料で、底面にヘラによるケズリ痕が観察できる。

(火炉)

第35図5に示したもので、器体内に空気を取り入れる火窓付近の資料である。全体は肩部を「く」の字状に折り曲げる器形である。

(器種不明)

第35図6・7に示したもので、どの器種に含まれるか不明の資料である。形状より鉢類に属するものと思われるが、小破片のため判然としない。

C：陶質土器

陶質土器（アカムン）は、第12表に示したとおり総数77点得られた。器種は鉢・鍋・水注・火炉等が見られ、その中より、典型的な資料を図示した。

以下、鉢形より記述する。

(鉢)

第36図1・2に示したものである。胴部で膨らみ、口縁部で内湾する器形である。文様は1が沈線文+波状文、2が波状文のみを縁部に施す。

(鍋)

第36図3・4に示したもので、口縁部を「く」の字状に折り曲げ、胴部で膨らむ器形を呈する。口縁部は受け皿状に成形する。沖縄で「サークー」と通称されている土鍋である。

(土瓶)

第36図5～9に示した。5・6は底が水平もしくはやや下がる蓋の資料である。7は口唇部を玉縁状に成形し、胴部を丸味につくるもので、8・9はその身の両側につく把手の資料である。

(炉)

第37図1～3・5に示したものである。1は火窓の破片で、外面に白化粘土による文様を横位に描く。2は肩部付近に付く横耳の資料である。3は大振りの炉の破片と思われるが全体の形状は判然としない。内外面に茶褐色の釉薬を薄く施している。5も大型の炉になるもので、口唇部内面に三角状の突起を張り付けているものである。内面に煤痕が観察される。

(器種不明)

第37図4に示したもので、どの器種に属するか不明の資料である。底平な高台より丸味を帯びながら胴部へ立ち上がる形状を呈する。今後、資料の増加を待ちたい。

第14表 越前陶器（磁器）出土一覧

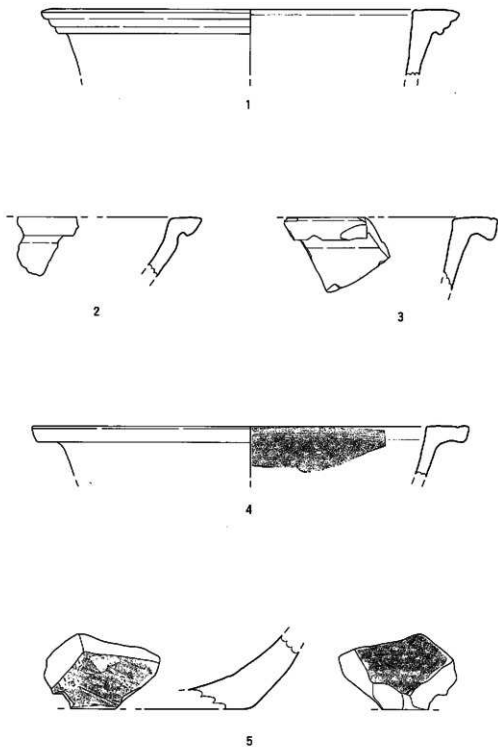
博物館 収蔵番号	出土地点	器種	部位	口径	器高	底径
第25回 国史館の1	マ991a	碗	口縁部	12.4		
* 2	マ991b	碗	口縁部	13.6		
* 3	マ991a	碗	底部		6.1	
* 4	マ991b	碗	底部		6.3	
* 5	マ991b	碗	底部		6.3	
* 6	マ991a	碗	底部		6.4	
* 7	マ991b	碗	底部		6.0	
* 8	マ991b	碗	底部		6.6	
* 9	マ991a	碗	口縁部	11.0		
* 10	マ991b	碗	底部		7.3	
* 11	マ991b	碗	底部		9.4	
* 12	マ991b	碗	底部		3.9	
第27回 国史館の1	マ991b	碗	底部		4.4	
* 2	マ991a	碗	底部		6.1	
* 3	マ991b	碗	底部		6.3	
* 4	マ991b	碗	底部		6.9	
* 5	マ991a	碗	口縁部	9.6	4.6	4.4
* 6	マ991a	碗	底部		6.0	
* 7	マ991a	碗	底部		6.7	
* 8	マ991a	碗	底部		4.0	
* 9	マ991bカク	碗	底部		6.2	
第28回 国史館の1	マ991a	碗	口縁部	13.0		
* 2	マ991b	碗	口縁部	13.0		
* 3	マ991a	碗	口縁部	13.0		
* 4	マ991b	碗	口縁部	13.4		
* 5	マ991b	碗	口縁部	12.4		
* 6	マ991b	碗	底部		5.6	
* 7	マ991b	碗	底部		6.8	
* 8	マ991b	碗	底部		6.3	
* 9	マ991a	碗	底部		7.9	
第29回 国史館の1	マ991b	小碗	口縁部	9.1		
* 2	マ991a	小碗	口縁部	8.8		
* 3	マ991a	小碗	底部		3.9	
* 4	マ991a	小碗	底部		3.6	
* 5	マ991b	碗	底部		5.6	
* 6	マ991a	小碗	底部		3.8	
* 7	マ991a	小碗	底部		4.0	
* 8	マ991b	小碗	底部		3.8	

第15表 無釉陶器出土一覧

博物館 収蔵番号	出土地点	器種	部位	口径	器高	底径
第22回 国史館の1	マ991a	碗	口縁部	22.0		
* 2	マ991b	碗	口縁部	破片		
* 3	マ991b	碗	口縁部	破片		
* 4	マ991b	碗	口縁部	23.0		
* 5	マ991a	碗	底部		破片	
第33回 国史館の1	マ991a	碗	口縁部	24.0		
* 2	マ991a	碗	口縁部	25.4		
* 3	マ991a	碗	口縁部	22.8		
* 4	マ991a	碗	口縁部	破片		
* 5	マ991a	碗	底部		8.8	
* 6	マ991a	碗	底部		13.0	
第34回 国史館の1	マ991a	碗	口縁部	破片		
* 2	マ991a	碗	口縁部	破片		
* 3	マ991a	碗	口縁部	破片		
* 4	マ991b	碗	口縁部	25.4		
* 5	マ991a	碗	口縁部	25.6		
* 6	マ991a	碗	口縁部	破片		
* 7	マ991b	碗	口縁部	18.4		
* 8	マ991b	碗	口縁部	18.3		
* 9	マ991b	碗	底部		9.2	
第35回 国史館の1	マ991a	小碗	口縁部	9.9		
* 2	マ991a	小碗	口縁部	10.6		
* 3	マ991a	小碗	口縁部	13.1		
* 4	マ991a	小碗	底部		5.0	
* 5	マ991b	小碗	底部			
* 6	マ991a	小碗	口縁部	破片		
* 7	マ991b	小碗	口縁部	破片		

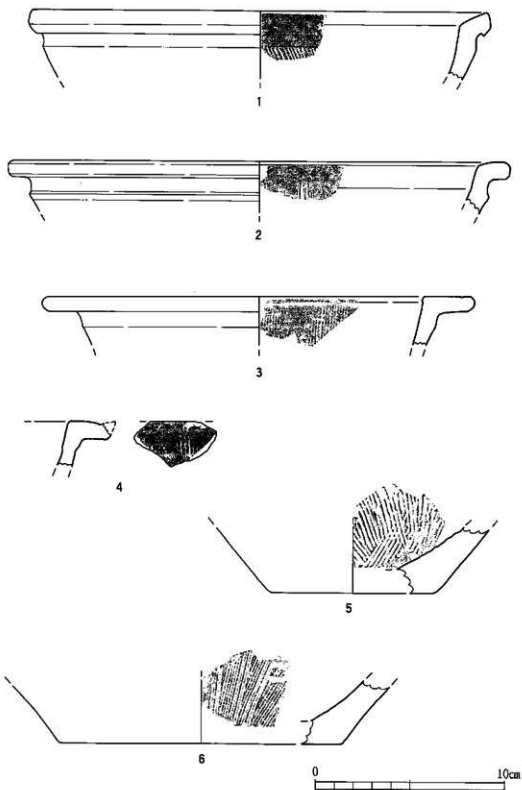
第16表 陶器土器出土一覧

博物館 収蔵番号	出土地点	器種	部位	口径	器高	底径
第25回 国史館の1	マ991a	鉢	口縁部	破片		
* 2	マ991a	鉢	口縁部	13.6		
* 3	マ991a	鉢	口縁部	19.4		
* 4	マ991a	鉢	口縁部	20.6		
* 5	マ991a	土器	底部	7.9		
* 6	マ991a	土器	底部	7.2		
* 7	マ991b	土器	口縁部	7.8		
* 8	マ991a	土器	底部			
* 9	マ991a	土器	底部			
第37回 国史館の1	マ991a	鉢	口縁部	破片		
* 2	マ991a	鉢	口縁部	破片		
* 3	マ991b	鉢	口縁部	破片		
* 4	マ991b	鉢	口縁部	破片		
* 5	マ991b	鉢	口縁部	32.1		

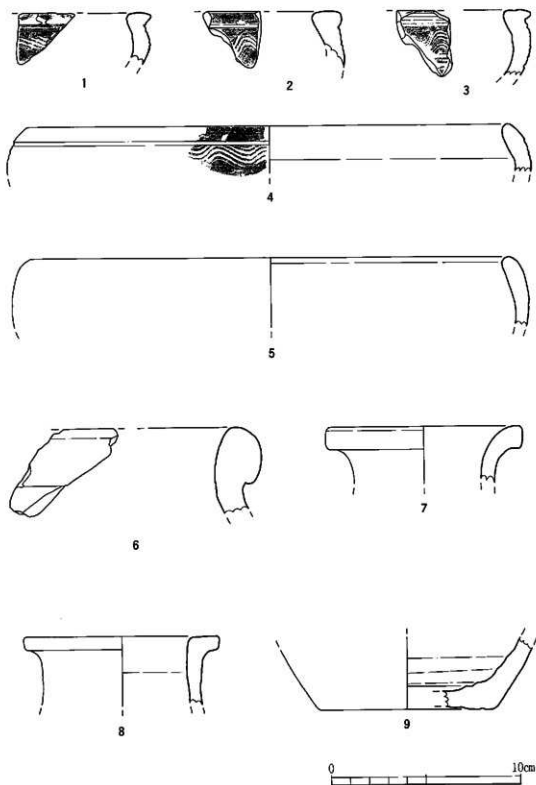


0 10cm

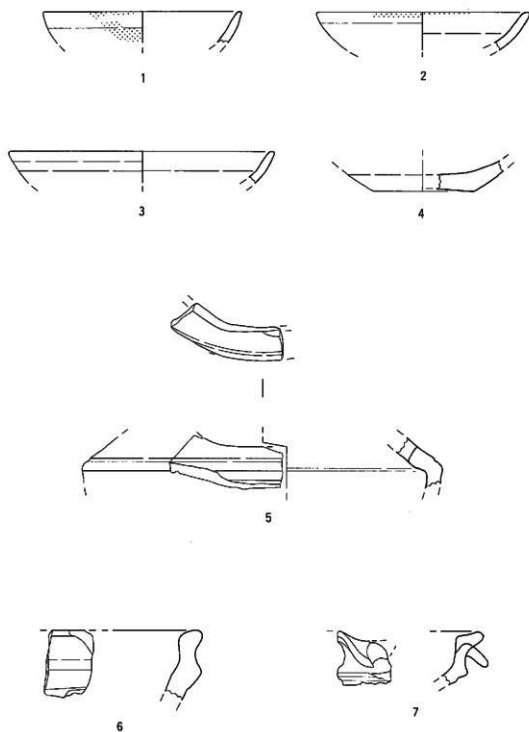
第32図 (図版32) 無釉陶器：甕 (1)・鉢 (2・3・5)・播鉢 (4)



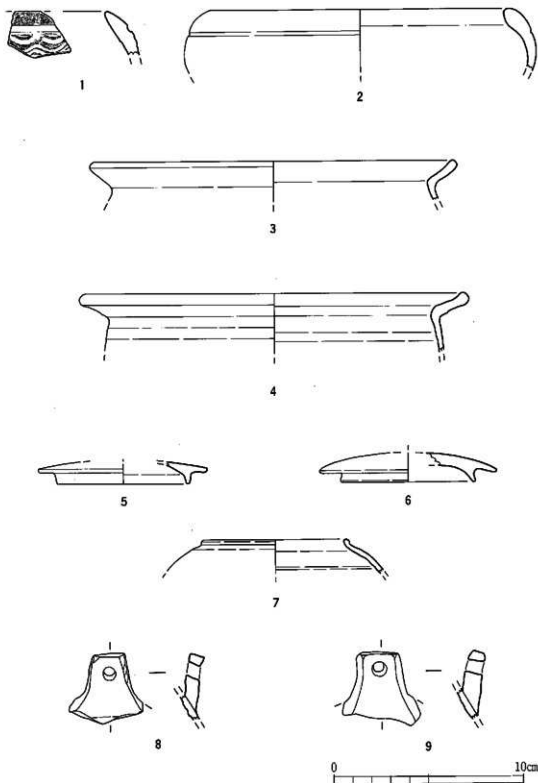
第33圖 (圖版33) 無釉陶器：攪鉢 (1～6)



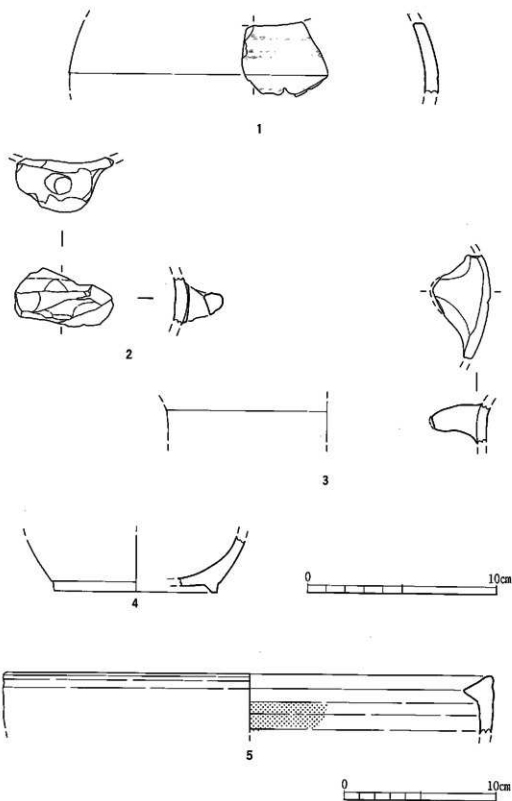
第34図 (図版34) 無釉陶器：水鉢 (1～5)・壺 (6～9)



第35図 (図版35) 無軸陶器：小皿 (1～4)・火炉 (5)・不明 (6・7)



第36圖 (図版36) 陶質土器：鉢 (1・2)・鍋 (3・4)・土瓶 (5～9)



第37図 (図版37) 陶質土器：炉 (1～3・5)・不明 (4)

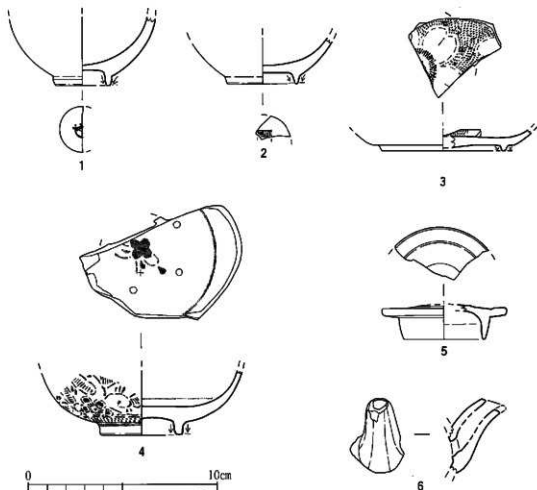
g. 本土産陶磁器

第2表に示したとおり131点得られ、その中で特徴的なものを第38図に示した。器種は碗・水注等で近世～近代にかけてのものである。個々の観察は第17表に譲る。

第17表 本土産陶磁器観察一覧

(cm)

押図番号 図版番号	出土地点 出土順序	器種	法 量		素 地	観 察 事 項
			口 径 底	径 高 程		
第38図1 図版38a1	モ-97 1	小碗	—	3.1	淡白色 粉粒子	透明釉を全面に施す。曇付けは露胎。色調は乳白色を呈する。 高台内に朱書きが見られるが判然としない。細かい貫入が観察できる
" 2	モ-98 1 b	"	—	3.8	白色 微粒子	淡い緑色釉を施胎。外面は厚く緑色に黄褐色。内面は薄くやや白。 高台内に真槨による基銘が見られるが、判然としない。
" 3	たライン 1 b	皿	—	6.6	白色 微粒子	高台は露胎。 内面に真槨による印判捺付。型輪付け。
" 4	と-101 1 b	碗	—	4.4	白色 微粒子	"
" 5	た-98 1 b	水注の蓋	—	4.3	茶褐色 粗粒子	外面にこげ茶色の泥輪を薄く施す。 内面は露胎。
" 6	ち-99 1 b	水注の注口	—	—	"	"



第38図 (図版38) 本土産陶磁器：小碗 (1・2)・皿 (3)・碗 (4)・水注 (5・6)

h. 円盤状製品

碗・皿・壺・甕・瓦などの日用品を円形に2次加工した製品で、第2表に示したとおり総数107点（完形63点、破片44点）得られた。その内、特徴的なものを第39・40図に図示した。個々の計測は第19表に示した。その表をもとに下図のグラフを作成した。

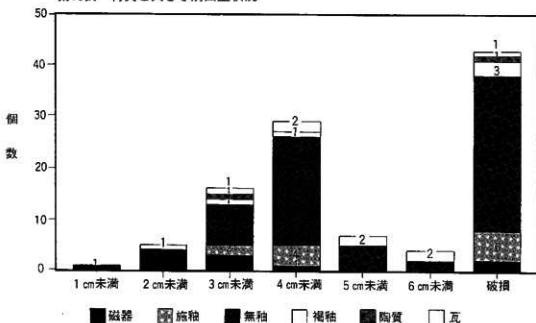
これより、本遺跡の標品をみると磁器・陶器・陶質土器・瓦などを主に材質として用いているが、圧倒的に多いのは沖縄産の無釉陶器を利用したものである。その他は10点前後と稀少である。興味深い資料としては、土製のフィゴの羽口を用いたものも得られている。

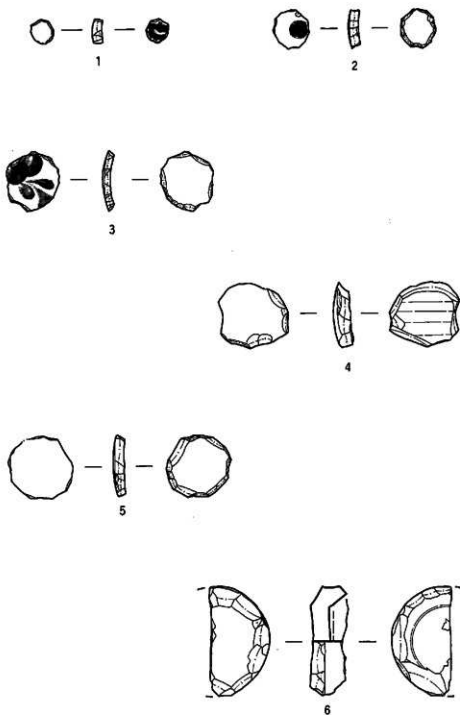
大きさは、大きいもので5.5cm、小さいもので0.8cmを測り、概ねこの範囲に含まれる。最も多いのが、4 cm未満で次いで3 cm未満のものである。全体の73%近くが、3～4 cmの製品に集中してみられる。

利用部位としては、殆どが胴部を加工しており、僅かに1点底部を利用したものが得られている。

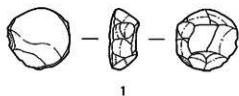
本遺跡の標品をまとめると、沖縄産の無釉陶器の胴部を3～4 cm未満に加工したものが、利用頻度が高いようである。用途については、上原 静氏によって系統的（群）に述べられ遊戯具として捉えられているものである。

第18表 材質と大きさ別出土状況

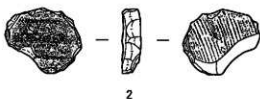




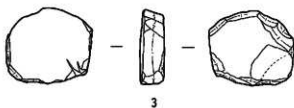
第39圖（図版39） 円盤状製品（1～6）



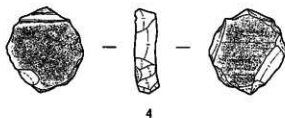
1



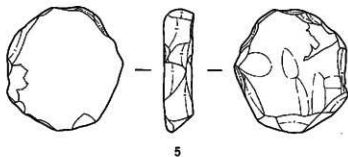
2



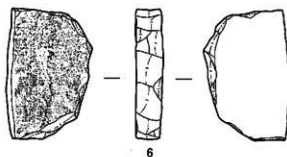
3



4



5



6



第40図 (図版40) 円盤状製品 (1～6)

第19表 円盤状製品計測一覧

(cm, g)

神図番号	計測		種 類	器 種	部 位	完/破	最大径	最小径	厚 さ	重 さ
	No.	層序								
第40図5	1	I b	と97	瓦	胴部	完	5.9	5.1	1.2	45.1
	2	I	せ95	瓦	胴部	完	5.1	4.8	1.1	36.6
	3	I b	て97アゼ	瓦	胴部	完	4.5	3.7	1.4	30.1
	4	I b	ち99	瓦	胴部	完	4.2	3.7	1.4	27.8
	5	I	ち95アゼ	瓦	胴部	完	3.4	2.9	1.2	14.3
	6	I b	て〜と99	瓦	胴部	完	3.6	3.2	1.2	14.3
	7	I b	た94	瓦	胴部	完	2.9	2.5	1.4	12.0
第40図1	8	I b	た94	陶質	胴部	完	2.7	2.4	0.6	5.6
	9	I b	そ91	羽口	胴部	完	2.9	2.6	1.3	10.1
	10	I b	と101	無釉	胴部	完	5.2	4.4	1.0	40.1
第40図3	11	I	つ95	無釉	胴部	完	4.6	4.1	1.1	33.3
	12	I	せ92	無釉	胴部	破	5.3	4.8	1.2	43.0
	13	I b	て〜と99	無釉	胴部	破	4.2	3.7	1.0	24.7
	14	I b	そ92アゼ	無釉	胴部	完	4.3	3.9	0.9	28.3
	15	I	せ96	無釉	胴部	完	3.8	3.2	0.9	21.4
	16	I	す94	無釉	胴部	完	3.8	3.4	0.8	20.3
	17	I	て99アゼ	無釉	胴部	完	3.6	3.2	0.9	19.8
第40図4	18	I b	た94	無釉	胴部	完	4.2	3.4	1.2	28.2
	19	I	た92	無釉	胴部	完	3.0	2.8	0.8	10.5
	20	I b	す95	無釉	胴部	完	3.8	3.2	1.3	25.6
	21	I b	た94	無釉	胴部	完	3.3	3.0	0.8	12.9
	22	I	せ96	無釉	胴部	完	3.6	3.1	0.9	15.8
	23	I b	と98	無釉	胴部	完	2.9	2.3	0.9	10.2
	24	I	せ95	無釉	胴部	完	3.8	3.2	1.2	20.5
	25	I b	た92、93	無釉	胴部	完	3.2	2.9	1.0	15.7
	26	I	せ96	無釉	胴部	完	2.5	2.3	0.6	5.8
	27	I b	て98	無釉	胴部	完	2.8	2.3	0.9	11.7
	28	I b	た96アゼ	無釉	胴部	完	2.7	2.3	1.0	10.2
	29	I b	た〜ち97	無釉	胴部	完	2.3	2.1	1.0	6.2
	30	I	す96	無釉	胴部	破	3.2	3.0	1.1	17.3
	31	I b	つ97	無釉	胴部	破	3.4	3.2	0.8	15.4
	32	I	そ94	無釉	胴部	破	3.5	3.4	1.6	29.8
	33	I b	た95	無釉	胴部	完	3.9	3.2	0.9	19.7
	34	I a	て97	無釉	胴部	破	2.6	2.3	0.7	6.0
第40図2	35	I	つ94	無釉	胴部	破	3.5	2.7	0.7	11.1
	36	I b	ち96	無釉	胴部	破	3.9	3.3	0.6	11.5
	37	I	つ93	無釉	胴部	完	4.3	3.3	1.3	30.8
	38	I	た97	無釉	胴部	完	3.7	2.8	1.2	24.1
	39	I	そ97アゼ	無釉	胴部	完	3.8	2.8	1.2	17.9
	40	I b	た96	無釉	胴部	破	3.5	3.0	0.7	9.2
	41	I b	つ96アゼ	無釉	胴部	破	3.5	2.9	0.8	11.5
第39図4	42	I b	ち98	無釉	胴部	破	3.2	2.6	0.6	8.9
	43	I a	て96	施釉	胴部	完	3.2	2.5	0.8	11.2
	44	I	す96	施釉	胴部	完	2.8	2.5	0.5	5.7
第39図5	45	I b	つ96	施釉	胴部	完	3.5	2.7	0.6	9.6
	46	I b	つ98	施釉	胴部	完	3.0	2.7	0.5	6.5
第39図3	47	I b	て〜と99	施釉	胴部	完	2.3	2.0	0.9	6.6
	48	I	す93	施釉	胴部	完	3.4	4.7	0.8	20.1
	49	I	つ95	磁器	胴部	完	3.0	2.5	0.4	6.2
	50	I	た97	磁器	胴部	完	2.7	2.4	0.4	4.2
第39図2	51	I	ち94	磁器	胴部	完	2.3	2.1	0.8	6.4
	52	I b	ち96アゼ	磁器	胴部	完	1.7	1.5	0.3	1.8
	53	I b	た96アゼ	磁器	胴部	完	1.6	1.5	0.4	2.1
	54	表土	た95	磁器	胴部	完	1.6	1.2	0.4	1.6

押込番号	計測 No.	出土地		種類	器種	部位	完/破	最大径	最小径	厚さ	重さ
		層序	グリッド								
第39図 1	55	I b	ち97	磁器		胴部	完	0.9	0.8	0.4	0.8
	56	I b	つ99	磁器		胴部	完	2.4	1.7	0.5	3.8
	57	I b	て99	磁器		胴部	破	1.5	1.2	0.3	1.2
	58	I	せ	褐釉		胴部	完	2.8	2.5	0.8	8.7
	59	I	す95清掃	褐釉		胴部	完	3.2	2.8	0.9	14.1
	60	I b	つ94	褐釉		胴部	完	1.4	1.2	0.5	1.8
	61	I b	と97	無釉		胴部	完	2.6	2.0	0.8	6.9
	62	I	た97	瓦		胴部	破			1.1	40.1
	63	I b	ち99	陶質		胴部	破			0.8	7.2
	64	I b	と100	無釉		胴部	破			1.1	31.7
第40図 6	65	I	さ94	無釉		胴部	破			1.0	29.0
	66	I	そ95アゼ	無釉		胴部	破			1.0	14.1
	67	I b	す95	無釉		胴部	破			1.7	44.6
	68	I b	せ98	無釉		胴部	破			0.8	8.1
	69	I	せ96	無釉		胴部	破			1.0	7.3
	70	I b	た〜ち97	無釉		胴部	破			0.8	7.5
	71	I b	て101	無釉		胴部	破			0.6	8.5
	72	I	せ98	無釉		胴部	破			0.9	6.9
	73	I a	て98	無釉		胴部	破			1.0	34.5
	74	I b	つ98	無釉		胴部	破			1.0	20.2
	75	I	せ91	無釉		胴部	破			0.9	11.3
	76	I b	た〜ち97	無釉		胴部	破			1.1	12.0
	77	I b	つ98アゼ	無釉		胴部	破			0.9	7.4
	78	I b	す94	無釉		胴部	破			0.6	4.0
	79	I	そ85	無釉		胴部	破			0.7	5.8
	80	I	さ97	無釉		胴部	破			0.8	5.1
	81	I b	た96	無釉		胴部	破			0.9	16.1
	82	I b	ち99	無釉		胴部	破			1.0	12.7
	83	I b	と97	無釉	撚鉢	胴部	破			0.8	10.5
	84	I b	た〜ち97	無釉	撚鉢	胴部	破			0.8	8.1
	85	I b	さ98	無釉	撚鉢	胴部	破			0.8	23.7
	86	I b	て98	無釉	撚鉢	胴部	破			1.0	9.6
	87	I b	つ99	無釉	撚鉢	胴部	破			0.8	16.8
	88	I b	て98アゼ	無釉	撚鉢	胴部	破			0.7	7.4
	89	I	そ96	無釉	撚鉢	胴部	破			0.8	12.2
	90	I	す95	無釉	撚鉢	胴部	破			0.6	6.3
	91	I b	さ97	無釉	撚鉢	胴部	破			0.6	5.9
	92	I	す93	無釉	撚鉢	胴部	破			0.9	14.7
	93	I	アゼ	施釉		胴部	破			0.7	5.5
	94	I	つ99	施釉		胴部	破			0.5	6.4
	95	I	そ95アゼ	施釉		胴部	破			0.9	3.3
	96	I b	た97	施釉		胴部	破			1.0	9.7
	97	I b	す95	施釉		胴部	破			0.5	4.8
	98	I	せ96	施釉		胴部	破			0.7	5.1
	99	I b	つ97	磁器		胴部	破			0.3	3.5
	100	I	す96	磁器		胴部	破			0.3	0.6
	101	I b	と98	褐釉		胴部	破			0.8	5.8
	102	I b	て98	褐釉		胴部	破			0.8	7.4
	103	I	た92	褐釉		胴部	破			0.8	7.9
	104	II	ち94アゼ	無釉		胴部	完	3.2	2.6	0.8	10.7
	105	II	た98アゼ	無釉		胴部	完	2.9	2.2	0.9	9.7
	106	II	せ94	無釉		胴部	破			1.1	9.3
第39図 6	107	I	つ97	褐釉	碗	底部	破	5.4		0.9	24.7

平均 3.354 2.83 0.850 13.99

i. 金属製品

金属製品はカンザシ・貨銭等が得られた。以下、カンザシより記述する。

(カンザシ・カンザシ状製品を含む)

カンザシはカンザシ状製品も含めると7点出土した。内訳は男性用1点、女性用4点、カンザシ状製品2点である。第41図1は、6連の花弁を有するカンザシの頭部である。花芯部を浮き彫りにした装飾部(表)と花弁縁部に末広がりの折れ目がつく裏面部の2枚によって構成されている。花芯部は、中央の円内に小円を7個配している。花弁、花芯とも緩やかな凹面を呈する。

裏面部には中央に竿との接合部と思われる孔が打たれるが竿の部分は得られなかった。男性用である。類例は阿波根古島遺跡^(註1)などで得られている。

2、3、4は頭部が細長の耳掻き状を呈するものである。2は首部が円柱状に加工されるもの。竿部は欠落している。3は2に比べ全体にやや細身である。同様に竿部が欠落している。4は腐食が激しく、首部の形状はわからないが竿部に比べやや細くなるようである。竿部は六角形に面取りされている。先端は六角錐を呈すると思われるが、磨耗し判然としない。

5は竿部のみの資料で六角形に面取りされ、先端は六角錐を呈する資料である。竿部の形状から頭部は耳掻き状であったと推察される。6は銅線的一端を平たく打ち伸ばしたような形状をしており、他の資料に比べ、脆弱な印象である。カンザシの形状は取るがほかの用途があったと思われる。7は欠損部にねじれた跡の残る資料である。銅板を加工したと思われる扁平な製品で端部はやや鋭角に尖り、欠損部に行くに従い細くなるが厚みは増していく。欠損部近くでは四角柱状に加工されており、欠落部以降も同様の形状をある程度残すと思われる。

註1 「阿波根古島遺跡」(一部覇・糸満線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告一)『沖縄県文化財調査報告書第96集』沖縄県教育委員会 1990年3月

第20表 カンザシ計測一覧

(cm, g)

押図番号 図版番号	出土地点 層 序	長 さ (残存長)	重 量	押図番号 図版番号	出土地点 層 序	長 さ (残存長)	重 量
第41図1 図版41a1	せ-97 I b	2.5	1.1	第41図5 図版41a5	せ-96 I	4.7	1.2
" 2 " 2	つ-98 I b	6.1	1.6	" 6 " 6	た-96 I	4.8	0.3
" 3 " 3	た-93 II	6.8	1.3	" 7 " 7	た-05 I	5.1	2.3
" 4 " 4	つ-97 I b	11.9	3.9				

(貨銭)

出土した貨銭は完形資料2枚、破片資料3枚の合計5枚が得られた。そのうち判読可能な資料4枚はすべて寛永通寶(初鑄年1636年)である。第42図1～3はいわゆる「新寛永」と呼ばれるもので、同図4の破片1点も「永」字の第5画に見られる「撥ね」などの特徴から「新寛永」である可能性が高い。上記3点はいずれも文字の肉が細く、孔郭、肉郭共に薄く、総じて稚拙な印象を受ける。模鑄銭の可能性はある。しかし、同図4は陽刻も深く均整の取れた書体をしており精銭と考えられる。

[参考文献]

- 陸原保【改訂版 東洋古銭価格図譜】全 志竜蔵版 4版 1970
- 知部金吉【古銭と紙幣(収集と鑑賞)】全国社
- 「八町堀2丁目遺跡」東京都中央区教育委員会、長岡不動産 平成元年10月

第21表 貨銭観察一覧

(cm, g)

挿図番号 図版番号	出土地点 層 序	貨幣名	法 量				材 質	背 文	特 徴 ・ 備 考
			外径	孔径	厚さ	量目			
第42図1 図版42a1	ち-99 I	寛永通寶	2.5	0.6	0.1	2.4	銅製品	無 背	新寛永、「永」字第6画に更に1画、線が入る。
" 2 " 2	せ-98 I b	寛永通寶	2.4	0.6	0.1	1.7	銅製品	不 明	新寛永
" 3 " 3	ち-98 I	寛永通寶	2.4	0.7	0.1	2.2	銅製品	無 背	新寛永、孔郭が円形状をなし、更に通常より大きい。
" 4 " 4	た-95 I	寛永通寶	2.5	0.6	0.1	0.9	銅製品	不 明	新寛永
" 5 " 5	す-96 I	不明	2.5	0.5	0.1	0.9	銅製品	不 明	破片、小孔が打たれる、全体に青錆が付着。

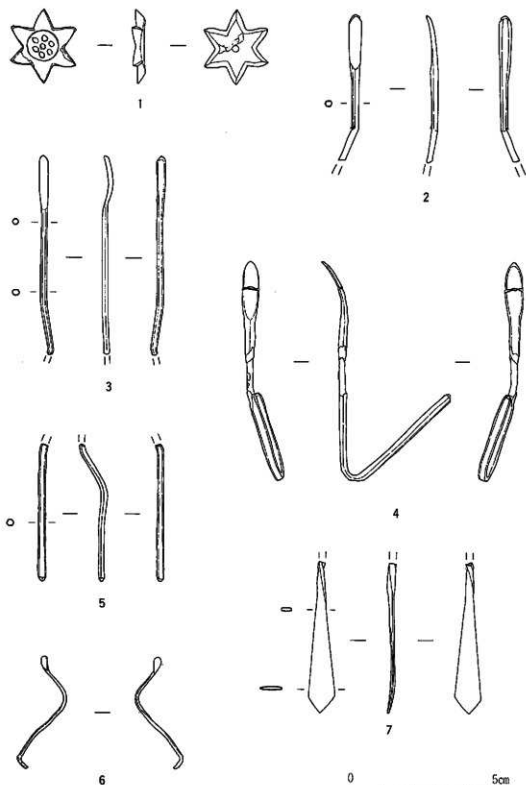
(用途不明品)

第43図1は飛翔する鶴をレリーフにした製品で、鶴の体は円形の台座から左右約3分の1ずつはみ出す部分(尾、翼)がある。裏面は円形に肉抜きされており、さらに尾、翼の裏面には一点ずつ小孔が打たれている。2は渦巻状の浮き彫りを球体上に施した裝飾部と、無裝飾の被孔部からなる製品である。ボタンあるいは飾り金具など、他製品の付属品かと思われる。3はその形状より曲尺の端部と推定される製品である。表面に「一尺五寸同」と目盛りと思われる2本の線の彫り物、裏面にも「七一七」、「C」の彫り物がある。切り口が荒いため判然としないが、2次的な転用を目的に切り取られたように見える。

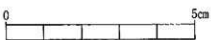
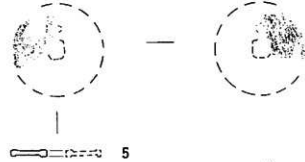
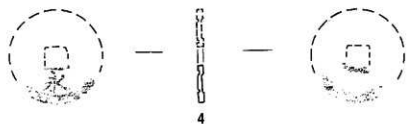
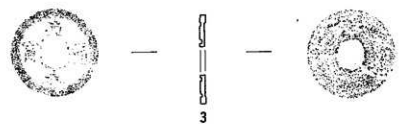
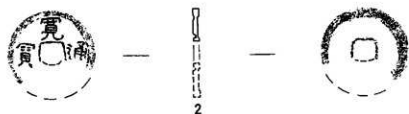
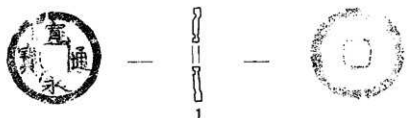
第22表 用途不明品計測一覧

(cm, g)

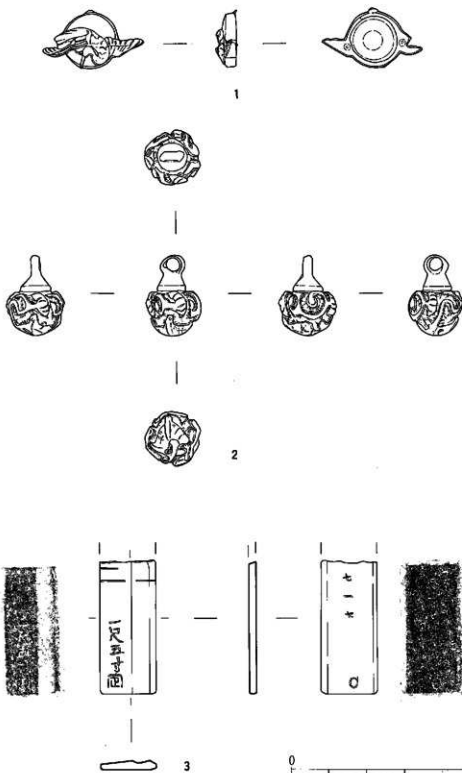
挿図番号 図版番号	出土地点	層 序	長さ、(残存長)	重 量
第43図1 図版43a1	た-96	I層	1.6	3.5
" 2 " 2	ち-99	I層b	2.1	4.8
" 3 " 3	不明-101	I層b	3.5	7.1



第41図 (図版41) 金属製品：カンザシ (1～5)・カンザシ状製品 (6・7)



第42図 (図版42) 金属製品：貨銭 (1～5)



第43図（図版43） 金属製品：用途不明品（1～3）

j. 煙管

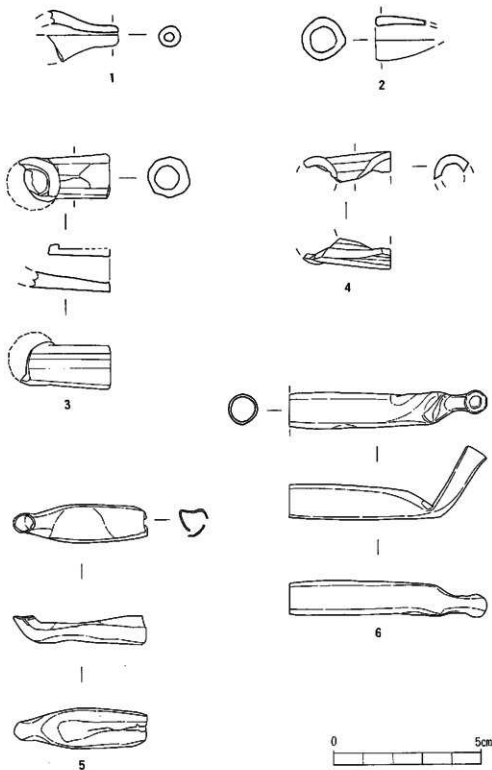
煙管は雁首が4点、吸口が5点の計9点が出土した。その内6点を図示した。第44図1は灰釉の施された吸口である。肩にかけて大きく膨らむが、吸口は細く絞る形をとる。ラウ接続部が欠落しているため肩部の施釉範囲は不明。内面は無釉で、胎土は黄白色の細かなものである。^(註2)2はパイプ形とされる雁首の火皿部である。胎土は灰白色で細かい。外面に緑釉をかける。内面は無釉、首部は欠落している。3、4はパイプ形であるが、無釉のものである。外面を多角形に整形した製品である。4は大半が欠落しているが、3は辛うじて全形の窺える資料である。胎土は茶褐色でやや細かく、わずかに微細な砂粒が観察される。ラウとの接続部は次第に狭くなっていることから「ねじ込み式」に接着したものと思われる。5は金属製の雁首である。板状の金属を円筒状に丸めて製作されたものである。形態はラウ接続部及び火皿部は緩やかに窄まるが火皿部にその度合いは強く、さらに火皿部は首部との一体化、小型化の様相を強めている。6は金属製の吸口である。肩部より吸口までストレートに伸び、吸口で急に窄まり、さらにストレートに伸び、端部で若干開く。

註2 「古我地原内古墓—沖縄自動車道(石川～那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(7)ー」『沖縄県文化財調査報告書85集』 沖縄県教育委員会 1987年12月

第23表 煙管計測一覧

(cm, g)

挿図番号 図版番号	出土地点	層 序	長さ、(残存長)	重 量
第44図1 図版4401	た-94	I b	2.4	1.8
" 2 " 2	つ-95	I	2.0	2.8
" 3 " 3	ち-98	I b	3.1	6.6
" 4 " 4	つ-96	I b	2.9	2.2
" 5 " 5		表採	4.5	5.6
" 6 " 6	た-93	I	6.7	13.3



第44圖 (圖版44) 煙管：陶製 (1～4)・金屬製 (5・6)

k. 土製品

第45図1に示したもので、円形の土製品である。表面に「○に十の字」状の線刻が僅かに観察される。色調は淡い黄褐色を呈し、焼成良好である。胎土に茶色粒やガラス質の鉱物などの混入が見られ、手触りはザラザラする。直径1.7cm、厚さ0.7cm、重さ2.3gを測る。た-92・93第I b層より出土。

l. 基石

第45図2に示したもので、断面半月状を呈する。黒色を呈し、表面には細かい剝離痕が観察される。石質の同定を依頼した神谷厚昭氏より「スラグ?」の御教示を得た。直径2.0cm、厚さ0.7cm、重さ4.0gを測る。た-96第I b層より出土。

m. 人形

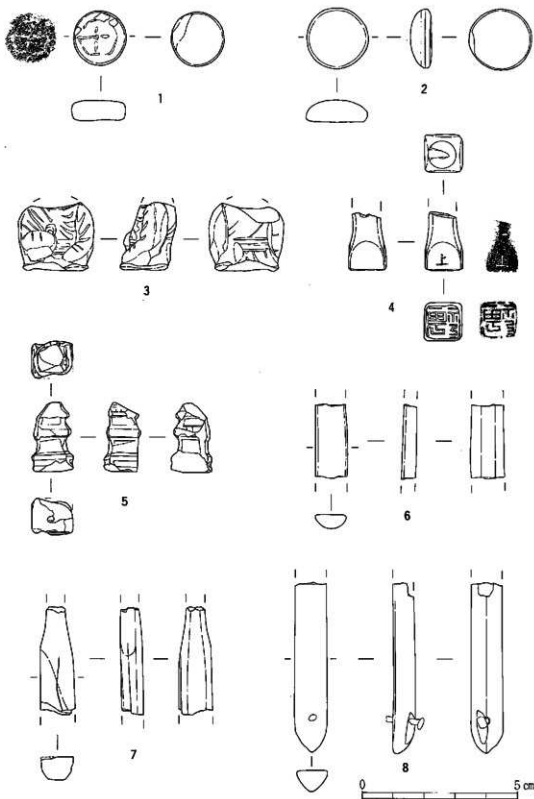
第45図3に示したもので、着物姿の白磁の人形である。頭部～肩部を破損したもので、右腹部には孔を有する。底面は露胎である。現存長2.2cm、重さ10.5gを測る。た-96第I b層より出土。

n. 印章

第45図4に示したものである。全体に乳白色を呈し、摘み部の端部が破損したものである。摘み部の破損面には横位に孔が穿たれている。断面の形状は摘み部が円形で印面は方形を呈する。印面には漢字が4文字観察されるが、判読困難である。さらに正面には「上」の文字が線刻されている。出土層位は不明で盛土からの採集品である。現存長1.9cm、重さ5.0gである。

o. 塔形製品

第45図5に示したもので、ミニチュアの製品である。寺院などに建立されている建物(堂)を模したものである。淡い橙褐色を呈しガラス質の鉱物・石灰質砂粒等を混入。底面には径0.2cmの円孔が穿たれている。現存の高さ2.2cm、重さ2.9gを測る。つ-97、第I b層より出土。



第45図 (図版45) 土製品 (1)、葦石 (2)、人形 (3)、印章 (4)、塔形製品 (5)、
ブラシ状製品 (6~8)

p. ブラシ状製品

第45図6～8に示したもので、3点得られた。いずれも植毛部を破損した製品で、背面部を平坦に整形したものである。同図6は断面を半月状に呈する小ぶりの標品で、おそらく頸部付近のものかと思われる。

同図7は断面を台形状を呈し、かなり光沢を有する。柄の上端部と植毛部の境にあたる頸部の破損品である。

同図8は柄の先端部で柄尻を三角錐状を呈する。柄尻には約1mmの小孔が穿たれ青銅製の留め具が見られる。断面は三角状を呈する。

本標品群については、上原静氏の詳細な論考^(註8)がある。氏は植毛を支える孔の位置に着目し、江戸期に見られる「櫛ハライ」と「ハブラシ」との比較検討を加え、その関係を論じられている。明確にハブラシ(2類)を呈するものについては、年代を大正時代から戦前の年代観を与えている。本遺跡の標品は上原静氏の2類に該当するものと考えられる。

q. 瓦

瓦は灰色瓦と赤瓦の2種が得られた。軒丸瓦や軒平瓦などの飾り瓦は見られず、すべて丸瓦及び平瓦である。出土量は第24表に示したとおり殆どが赤瓦(総数231点)で、灰色瓦は僅かに(総数20点)得られた。

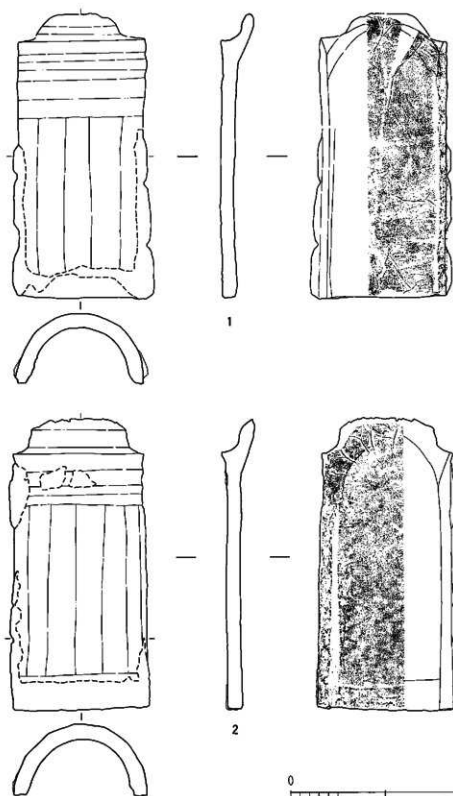
その中で赤瓦の典型的な資料を第46・47図に示した。灰色瓦は小破片のため掲載しなかった。

灰色瓦は明朝系瓦と呼ばれているもので、平瓦と丸瓦の2種が得られた。それらの特徴を大まかに述べると、外面はナデ消しで内面に布目痕が残る。素地は泥質で、ガラス質鉱物・茶褐色粒・灰色粒等を混入する。焼成は良好と不良のものが見られる。

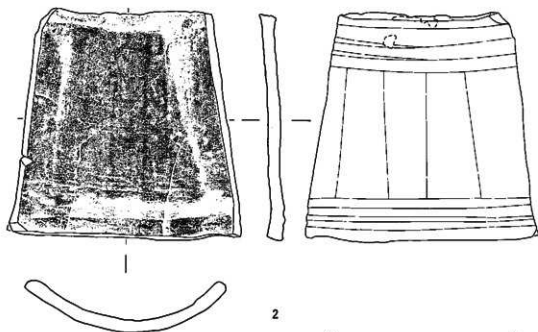
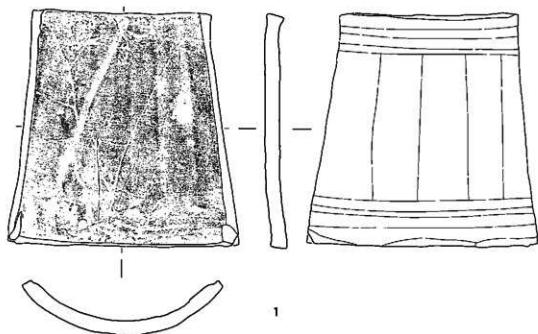
赤瓦も平瓦と丸瓦の2種が得られた。外面は面取りされ、内面に布目痕を残す。素地は泥質で、石灰質砂粒・ガラス質の鉱物・赤色粒等の混入物を含む。焼成は良好。

第24表 瓦集計一覧

種類	部位 層序	丸 瓦	平 瓦	合 計
灰色瓦	I 層	2	16	18
	II 層	0	2	2
	小 計	2	18	20
赤色瓦	I 層	58	171	229
	II 層	1	1	2
	小 計	59	172	231
合 計		61	190	251



第46図 (図版46) 瓦：丸瓦 (1・2)



0 20cm

第47図 (図版47) 瓦：平瓦 (1・2)

第Ⅵ章 まとめ

以上、発掘調査の成果について述べてきた。調査に至る経緯については、第Ⅰ章に述べたとおり新ターミナル予定地内の埋蔵文化財の試掘調査によって発見されたのがきっかけであった。ここでは、発掘調査の成果をいま一度整理して若干の要点に触れまとめた。特に、沖縄新石器時代後Ⅳ期に相当する第Ⅱ・Ⅲ層を中心に述べたい。

以下、個々について述べる。

立地について

第Ⅱ章でも述べたとおり、本遺跡は那覇空港の東側に延びる独立丘陵上の南端部に立地する。丘陵上はやや馬の背状を呈し、遺跡はこの一帯に展開していたと思われる。このような遺跡のあり方は、グスク時代直前の伊良波東遺跡^(註3)に類似しており、それ以後の丘陵上に占地する石垣いのグスクに近似しているのは興味深い。すでに、後Ⅳ期初頭で丘陵上に占地していたことが窺うことができる。今後、類例遺跡の増加に伴い当該期の遺跡のあり方がより明確になるものと思われる。

層序について

層序は地山を含めて4枚からなる。第Ⅰ層はグスク時代～近世・近代の遺物が混在した形で得られた。近世の遺物が殆どで僅かにグスク時代の遺物が検出された。

その第Ⅰ層の下位に広がる文化層が第Ⅱ・Ⅲ層で未攪乱層である。両層とも遺物の種類・変化などの顕著な違いは見られなかった。

得られた遺物は後Ⅳ期に比定されている土器で、僅かに本土産須恵器・石器・土製品が得られた。また、両層には中国産陶磁器などはまったく見られなかった。そのことより、後Ⅳ期の単一の文化層と解釈した。このような遺跡は県内において、初例をなすものと考えられ今後の後Ⅳ期とグスク時代の直前を研究する上で重要な遺跡と考えられる。

遺構について

遺構は、鉄跡・溝跡・焼土群・堅穴状遺構群などが調査区西側の緩やかな斜面地において集中的に検出された。鉄跡は半月状を呈し、その刃先の幅は約10～15cmサイズで検出された。鉄跡の方向としては、概ね緩やかな斜面地に対して、刃先を振り下ろしたものと思われる。そのシャープな刃先痕は鉄鋏を彷彿させるものであった。溝跡は鉄跡群を南北より挟む形でV字状に確認された。そのことより、溝跡は鉄跡群の配水路としての機能を有していたものと思われた。さらに、興味深いことは、溝跡の先端部においてはほぼ円形の焼土遺構群が確認されたことである。この焼土群は、いわゆる「炉跡」と言われている遺構

群とはその出土状況・形状などが異なり、焼土層の厚さ・炭層の堆積状態より短期的に使用されたものと思われた。

このことより、鋤跡・溝跡のセット関係より畑跡が想定され、従来グスク時代までしか遡れなかった農耕の上限を確実に後Ⅳ期まで押し上げたのは大きな成果として挙げられる。

ところで、堅穴状遺構については、保存状態が良好でなかったが両遺構とも壁面にステップ状の施設を有する共通する特徴をもっており、同じような目的で使用された遺構と考えられるが判然としない。畑跡に近接しているため農耕に関する遺構と考えられるが、今後の資料の追加を待ちたい。

出土遺物について

出土遺物は自然遺物と人工遺物に大別される。自然遺物（食料残滓）については、肉眼観察による発掘調査では皆無の状況であった。そのため、焼土遺構等及び第Ⅱ・Ⅲ層の土壌サンプリングを行い、フローテーション法を試みたところ、やはり獣・魚等の自然遺物は皆無の状況であった。ところが、炭化した栽培植物遺体及び野生植物が僅かに検出したことが、画期的な発見として挙げられる。米・大麦・小麦・豆・タデ科等の種子がそれぞれ確認された。このことは、前記した畑跡の想定をさらに補強するものと考ええる。炭化種子についての詳細な報告は高宮広土氏の報文に譲る。

人工遺物は後Ⅳ期に属する土器群が殆どで、石器・本土産須恵器・土製品等が僅かに得られた。石器は希少であったが、注目される資料として鋸歯状の石製品が挙げられる。県内での類例品として、僅かに久米島の北原貝塚で出土している鋸歯状の石製品(註10)が挙げられる。また、奄美諸島のサモト遺跡・手広遺跡・小手野遺跡で出土している鋸歯状製品(註11)にも類似しており、その用途について弥生久志氏は「・・・ベトナム北部から華南にかけの穂摘み具ならびに脱穀具を連想でき・・・」と興味深い見解を示している。前記した畑跡との関係で興味深い資料である。今後の資料の増加を待ちたい。

本土産須恵器は、県内で初めて確認された資料で、壺形土器の胴部片が僅かに得られた。その特徴は外面に格子状のタタキ痕、内面は同心円状の当て具痕が見られるものである。これらの特徴より本資料は9～10世紀に位置づけられるとのことであった。因みに、県内で顕著に出土するカムイ窯須恵器は得られていない。

土器はすべて破片で全形を窺える資料はなく、その形状を知りえるのは僅かであった。

そこで、共通の土器を出土するガジャンピラ丘陵遺跡(註13)や安南東原遺跡(註14)を参考に分類を試みた。その結果、本遺跡の土器は、壺形土器のみで明確な壺形は見られなかった。有文土器は希少で、口縁部に凸帯文を基調に描かれたものが僅かに見られた。文様構図は破片のため判然としなかったが、概ね後期土器の範疇に含まれるものである。その他はすべて無文土器であった。著しく無文化の進んだ土器群である。器形は胴部で膨らみ、口縁部で外

反するものが主体であった。

底部は外形により、乳房状尖底・平底・くびれ平底の3種に細分を試みた。出土量は前二者が卓越し、典型的なくびれ平底（bタイプ）は少ない状況であった。また、層的に違いを見ると第Ⅲ層で乳房状尖底・平底、第Ⅱ層でくびれ平底が出土する傾向が見られた。

本遺跡で出土した第1種aタイプの厚手の乳房状尖底は、グスク時代直前の伊良波東遺跡^(註15)・サーク原遺跡等^(註16)でも出土が知られており、息の長い土器のようである。

次に、細かい検討は行わなかったが、底部の成形技法を見てみると、基本的に底面を団子状の粘土瘤から胴部へ立ち上げる技法と、円盤状の粘土版から成形する技法に大別された。前者には第1種から第3種aタイプが見られ、後者は第3種bタイプが見られた。前者の底部が卓越し、後者は希少であった。今後、外形だけでなく成形技法からの視点で捉えることも後期土器を考える上で有効な手段と考える。以上のことから、本遺跡は沖縄新石器時代後Ⅳ期の生産遺跡と考えられる。従来グスク時代までしか遡れなかった沖縄の農耕の上限を引き上げたことは大きな成果と考える。また、丘陵上に後Ⅳ期の単独の文化層が確認されたことも意義深いものとする。

トロント大学 Isotrace Radiocarbon Laboratory にC-14を依頼したところ、下記の結果を得た。

Sample Identification	Description	Weight Used (mg)	IsoTrace Lab No.	Age (years BP)
NZB LF86	Wood Charcoal	82	TO-4813	2400+/-70
NZB LF97	Wood Charcoal	15	TO-4814	2160+/-70
NZB LF30	Wood Charcoal	179	TO-5225	200+/-60
NZB LF31	Wood Charcoal	...		N / A

なお、上記の測定結果と本遺跡の年代観が異なっているが、同様な土器を出土する安謝東原遺跡^(註17)で後Ⅳ期の測定値が得られている。

《註》

- 註1：上原 静・太田宏好他『ガジャンピラ丘陵遺跡』那覇市教育委員会 1983年
 註2：玉城安明・仲宗根啓・城間千栄子『安謝東原遺跡』那覇市教育委員会 1995年
 註3：弥栄久志『サモト遺跡』住用村教育委員会 1993年
 註4：金武正紀・宮里末廣他『今帰仁城跡発掘調査報告書』今帰仁村教育委員会 1983年
 註5：島 弘・太田宏好他『伊良波西遺跡』豊見城村教育委員会 1986年
 註6：島 弘・内間 靖・玉城安明・島袋春美『壺屋古窯群Ⅰ』那覇市教育委員会 1992年
 註7：上原 静『グスク時代・近世出土の円盤状製品』『談谷村立歴史民俗資料館紀要』第10号

1986年

註8：上原 静「首里城跡出土のブラシと湧水」『文化課紀要』 第6号 沖縄県教育委員会
1990年

註9：安里嗣淳・島 弘他『伊良波東遺跡』 豊見城村教育委員会 1987年

註10：盛本 燕・西銘 章・比嘉優子「北原貝塚」 沖縄県教育委員会 1995年

註11：註3に同じ

註12：琉球大学助教授 池田栄史氏より御教示賜った。

註13：註1に同じ

註14：註2に同じ

註15：註9に同じ

註16：安里嗣淳・島 弘他『北谷町砂辺サーク原遺跡』 沖縄県教育委員会 1987年

註17：註2に同じ

付 編

遺跡と調査の概要

- 1) 遺跡の所在：沖縄県那覇市字安次嶺那崎原
- 2) 遺跡の名称：那崎原遺跡
- 3) 調査の機関：那覇市教育委員会
- 4) 調査担当者：那覇市教育委員会 文化課文化係 島 弘^{しま ひろし}
- 5) 発掘日時：平成4年7月～平成4年11月
- 6) 発掘面積：1,313㎡
- 7) 遺跡の年代：沖縄貝塚時代後期後半（後Ⅳ期）
西暦8～10世紀

A) はじめに

文化を社会環境を含む環境への適応と定義すると（例 Binford 1962）、沖縄本島の先史時代において、環境への適応手段の変遷が少なくとも4度起こったことが推測されている（多和田 1982；新田 1982；金武^{きんぶ} 1983；白木原 1992；高宮 1993等）。まず、遺跡数が急増した貝塚時代前期、次に台地上あるいは丘陵上に住居を営んだ貝塚時代中期、三番目に住居を海岸砂丘上へ移動した貝塚時代後期前半、そして最後に再び内陸部に生活空間を求めた貝塚時代後期後半である。各時代における遺跡立地の移動にともない遺物にも変化がみられる。先史時代における遺跡の立地および遺物の変遷は、適応手段の変遷、特に生業の変遷が要因である場合が多く（Jochim 1976）、沖縄本島においてもこのように理解することが自然であろう。さて、生業という点から沖縄先史時代をみてみると、動物食に関しては判明しつつあるが（例 安里^{あんり} 1985）、主食料源と考えられる植物食については、麦類、粟、および米等の栽培植物がグスク時代に消費された以外はほとんどわかっていない。そこで、グスク時代以前の植物食利用を検討するために、フローテーション法による炭化種子検出を那崎原遺跡発掘調査目的のひとつとした。那崎原遺跡は貝塚時代後期後半の遺跡で、標高約20mの丘陵上に位置し、再び内陸部へ移動したという点で、同時代の立地特徴を示す遺跡である（例 嵩元^{たけもと} 1972；安里 1991）。

炭化種子検出を調査目的の一つとした場合、那崎原遺跡はこの目的のために最も適していた遺跡とは思われなかった。炭化種子を検出する際、炉やカマド等のような種子が炭化した可能性の高い遺構、あるいは住居址床面等のように加熱された植物食が食された空間、

あるいは貝塚のように食料が投棄された場所からサンプリングすると炭化種子を回収する確率は高いものとなることが報告されている (eg. Miksicek 1987; 吉崎 1990)。那崎原遺跡の場合、植物種子が火を受けた可能性のあった遺構は、焼土 A~D の4遺構のみであり、フローテーション法によって得られた浮遊物も極端に少量であった。このため、植物遺体検出に関しては、「余り期待のできない」遺跡と思われた。しかし、浮遊物を実体顕微鏡で観察した結果、栽培植物やオープンサイトに生育する植物の種子が検出された。一方、グスク時代以前の食料として頻繁に取り上げられる堅果類はまったく含まれていなかった。今回の調査結果は、那崎原遺跡の人々が農耕を営んでいたことを強く示唆するものである。また、貝塚時代後期後半の遺跡が、那崎原遺跡のように内陸部に立地するということは、この時期には沖縄本島（あるいは 中琉球地域）においては農耕が存在していたと考えてよいのではないであろうか。

B) 資料土壌の採取と処理

那崎原遺跡発掘調査期間中、3タイプの土壌サンプリングを実施した。まず、遺跡の植物遺体包含状況を調べるために、す-92、た-94、ち-93、および ち-95の各グリッドに50cm四方のユニットを設け、各層ごとに柱状に土壌を採取した（第A図）。次に、炭化種子が検出の可能性が高いと思われた遺構は焼土のみであったので、これらの土壌をすべてサンプリングした。また、これらの焼土遺構を中心に8m×5mのグリッドを設定し、更に、このグリッドを1m×1mのサブグリッドに細分し、この単位で第Ⅱ層および第Ⅲ層ごとに土壌サンプルを採取した（第B図）。最後に、その他の遺構における植物遺体包含状況を検討するために、1号遺構、2号遺構、溝2および「クワ跡」の土壌をサンプリングした（第A図）。時間的な制約により、全ての採取土壌サンプルをフローテーション処理することは不可能であったが、土嚢袋にして145体分、計1,687リットルの土壌サンプルをフローテーション処理した。表1は、サンプル地点、土壌サンプル量（リットル）、およびフローテーションによって回収された浮遊物量（グラム）をまとめたものである。拙稿（高宮1994；または Crawford 1983；椿坂1992；吉崎 1993；1992b）にも述べた通り、フローテーション法とは、炭化植物種子を検出するために、欧米で発明・発展してきた方法であるが、沖縄県でこの方法が使用されたのは、談谷村高知口原貝塚に次いで、那崎原遺跡は二番目であった。

C) 検出された炭化種子

同定不能および不明種子を除き、科あるいはそれ以下のレベルで検出された炭化種子は、イネ、オオムギ、コムギ、麦類、アワ、マメ科、コミカンソウ属、トウダイグサ属（?）、ナス科、カヤツリグサ科、タデ科、カタバミ属、イネ科、キク科（?）の種子である。最

も多く検出された種子はトウダイグサ属(?)種子で73粒、ついでナス科種子(46粒)およびカヤツリグサ科種子(38粒)である(表2)。

1 イネ *Oryza sativa* L.

完形の残っているものが1粒、3/4程の破片が1粒検出されている。前者(図-1a)は長さ3.5mm、幅1.8mm、厚さ1.2mm、後者(図-1b)はそれぞれ、3.6mm、2.1mm、および2.2mmである。

2粒のみで多くを語ることはできないが、これらのイネ穎果は他地域出土のイネ穎果と比較して小型である。例えば、青森県八幡遺跡(弥生前期)出土のイネ穎果50粒の平均長および平均幅はそれぞれ4.58mmおよび2.31mmであるので(吉崎 1992a)、那崎原遺跡出土の穎果が小型であることがわかる。このころの沖縄のイネ穎果が小型であったのか、今後の研究課題である。

2 オオムギ *Hordeum vulgare* L.

オオムギの小破片が3片サンプルNa34(F1.No86)から検出されている。図-2はオオムギの特徴を示す小破片である。この標本はオオムギ穎果の先端約1/2が保存されたもので、先端の形態と背面の縦溝はオオムギの特徴を示している(残存部のサイズ:長さおよび幅2.5mm×1.1mm)。

3 コムギ *Triticum aestivum* L.

全形の残っているコムギ穎果がサンプルNa34(F1.No104)から1粒出土している。図-3にみられるように、背面には縦溝がみられ、背面あるいは腹面からみる両辺がやや平行である。この標本は、長さ2.7mm、幅2.5mm、厚さ2.0mmである。また、胚の部分のみを残すコムギ穎果の小破片がサンプルNa34(F1.No50)から1片出土している。

ここ4~5年程、北海道や本州で検出されたコムギが小型であることが注目されている(吉崎 1993;1992a, b; Crawford 1986)。例えば、Crawford (1986)はサクシュコトニ川遺跡(捺文時代-西暦9世紀代)から出土した106粒のコムギを計測し、平均長3.4mmおよび平均幅2.2mmを得、「異常な程小さく特異なものである(吉崎 1993:11)」ことを指摘している。那崎原遺跡出土コムギの完形は1粒のみなので、サクシュコトニ川遺跡出土のコムギと比較しても多くは語れないが、那崎原遺跡出土のコムギは、北海道出土のコムギと比較しても、より小型であることがわかる。仮に那崎原遺跡出土のコムギが沖縄先史時代の典型的なコムギであれば、小型コムギは北海道および本州のみならず(吉崎 1993:10-11)、ほぼ同時代に沖縄まで広範囲に広がっていたことになる。今後の資料が注目される。

4 麦類

コムギあるいはオオムギの小破片と思われるが、保存状態が悪くどちらとも断定しかねる穀果を麦類として分類した。このカテゴリーに入るものは計4片、溝2、サンプルNo26 (Fl.No123)、サンプルNo34 (Fl.No50) から出土している。

5 アワ *Setaria italica*

横方向に波状のすじがみられる穎が2片焼土 (Fl.No32: 図-4 および Fl.No143: 図-5) から出土している。形態的にアワと思われたが、より確実な同定のために1片を走査電子顕微鏡で検討した。その結果、アワの内外穎の表皮細胞の特徴である乳頭突起 (松谷 1988; 椿坂 1993) が観察された (図-6)。サイズは前者が長さ1.4mm×幅1.2mm、後者が、長さ1.5mm×幅1.1mmである。

6 マメ科 Leguminosae

ほぼ完形のもの4粒および小破片17片のマメ科種子が検出されている。ほぼ完形のマメ科種子は、サンプルNo34 (Fl.No86) から出土し (図-7)、サイズは長さ3.8mm、幅2.5mm、厚さ2.6mmである。椿坂 (1994 私信による) によると、この標本は小豆、緑豆、あるいは大豆の系統ではないらしい。また、サンプルNo12 (Fl.No105) から莢らしきものに納まったマメ科種子が3粒検出された (図-8)。現段階では、これらのマメ科種子が栽培種のものかあるいは野生のものか判断しかねる。今後の詳細な検討が必要である。

7 トウダイグサ科 Euphorbiaceae

コミカンソウ属 *PHYLLANTHUS* L.

みかんの房のような形態を示し、背面は波状の模様が観察される (図-9)。計22粒出土している。図示した標本は、長さ1.0mm、幅0.8mm、厚さ0.7mmである。コミカンソウ (*Phyllanthus urinaria*) 種子と思われる。

トウダイグサ属 (?) *EUPHORBIA* L.

トウダイグサ属の種子であろうと思われるトウダイグサ科の種子が計73粒検出されている (図-10)。この種子は焼土 A, C, D, サンプルNo25 (Fl.No78) およびサンプルNo30 (Fl.No45) のみから検出されている。コミカンソウ属の種子がどちらかという広い範囲で出土したのと比較して、トウダイグサ属 (?) の種子は焼土に集中している。図示した標本は、長さ0.8mm、および径0.6mmである。さて、この種子は、トウダイグサ属種子、特にオオニシキソウあるいはコニシキソウ種子に酷似しているが、牧野 (1982: 286) によると、両種とも北アメリカ原産であるという。それゆえ、ここではトウダイグサ属 (?) としたが、御教示頂きたい。

8 ナス科 Solanaceae

種皮にしわ状の編み目斑が観察され、形態は、扁平広卵形、腎臓のような形態である。(図-11)。計46粒検出されたが、この種子は焼土Aのみから出土した。図示した標本は長さ0.8mm、幅1.0mm、および厚さ0.5mmである。

9 カヤツリグサ科 Cyperaceae

カヤツリグサ科の種子が、計38粒検出された。少なくとも、2タイプのカヤツリグサ科種子が認められ、それぞれテンツキ属(図-12)およびホタルイ属(図-13)かと思われる。図示した標本のサイズは、前者が長さ0.8mm、幅0.6mm、および厚さ0.3mm、そして後者が、長さ1.8mm、幅1.4mm、および厚さ0.7mmである。

10 タデ科 Polygonaceae

断面がほぼ三稜のタデ科種子が8粒検出された。図-14は検出されたタデ科の一タイプで、サイズは長さ1.2mm、幅0.9mm、および厚さ0.9mmである。

11 カタバミ科 Oxalidaceae

カタバミ属 OXALIS L.

わらじ状の形態を示し、表面には波状の模様がみられる Oxalis 属の種子が計9粒出土している(図-15)。図示した標本は、長さ1.2mm、幅0.9mm、および厚さ0.3mmである。

12 イネ科 Gramineae

科以下のレベルで不明イネ科種子が10粒検出された。図-16および図-17はそのうち、もっとも保存のよい種子である。サイズはそれぞれ、長さ1.1mm、幅0.5mm、厚さ0.3mmおよび長さ1.2mm、幅1.0mm、厚さ0.6mmである。

13 キク科? Compositae?

形態的にキク科の種子に類似しているので、キク科?と分類した種子が計29粒出土している(図-18)。図示した標本は、長さ1.4mm、幅0.4mm、および厚さ0.4mmである。キク科?種子はまとまった数で検出されていないが、那崎原遺跡においては普遍的に出土しており、20サンプルから検出されている。

14 不明種子

不明種子の中でも出土数の多かった種子について述べる。不明種子の中でも、最も数が多く広範囲で出土した種子が不明種子がタイプ1で(図-19)、計42粒出土している。キ

ク科?と同様にまとまった数では検出されていないが、最も普遍的に出土しており、計25サンプルから検出されている。図示した標本のサイズは、長さ1.0mm、幅0.8mm、および厚さ0.8mmである。また、図-20、-21、および-22の種子も出土数は多く、それぞれタイプ2~4とすると、タイプ2は18粒、タイプ3は19粒、およびタイプ4は38粒検出された。図示した標本の長さ、幅、厚さはそれぞれ、0.8mm×0.9mm×0.7mm、0.6mm×0.8mm×0.3mm、および0.7mm×0.4mm×0.4mm、である。また、アカザ属 *Chenopodium* L. の種子が2粒出土したが、炭化あるいは未炭化であるのか判断しかねる。

D) 考察および結論

那崎原遺跡採取の土壌サンプルからフローテーション法によって回収された浮遊物は極端に少量であった(計119.11グラム)。例えば、Pearsall (1989) は、北海道縄文期における浮遊物回収率(1リットルにつき約0.6グラム)を回収率の低い遺跡としているが、那崎原遺跡においては1リットルにつき約0.07グラムであった。現在分析中ではあるが、読谷村高知口原貝塚や宜野湾市森川原遺跡と比較しても那崎原遺跡フローテーションから回収された浮遊物の量は極端に少ない。また、検出された炭化種子も多くはない。しかし、沖縄貝塚時代後期後半における生業を知る上で貴重な資料を得ることができた。すなわち、貝塚時代後期の遺跡から栽培植物の炭化種子を得たことである。グスク時代以前に属する遺跡発掘調査で、栽培植物遺体を検出する試みは数カ所の遺跡で実施されたが(例えば熱田貝塚-初痕のついた土器は出土したが栽培植物は検出されなかった。金武 正紀 1992、1995 私信による)、今回の調査以前において、栽培植物の遺体が検出された遺跡の上限はグスク時代初期であった(例久米島ヤジャーガマ遺跡 新田 1982: 37 安里1991)。那崎原遺跡からは、コムギ(完形1;小破片1)、オオムギ(小破片3)、麦類(小破片4)、イネ(完形1;破片1)およびアワ(穎破片2)が検出された。よって、沖縄の考古学で知られていた栽培植物の年代を数百年遡ることになる。また、約1700リットルの土壌サンプルを処理したにもかかわらず、堅果類(破片を含む)は全く検出されていない。この結果是那崎原遺跡の人々が堅果類ではなく、栽培植物を主食量源としていたと解釈できる。

ところで、これら栽培植物は地元で生産されたのであろうか、あるいは交易によって入手されたのであろうか。狩猟採集が生業であったと定説化された地域や時代から栽培植物種子が検出された場合、他地域との交易によって栽培植物が持ち込まれたと解釈されることが少なくない。那崎原遺跡においても、上記した栽培植物のみ出土したのであれば交易の可能性が支持されることであろう。しかし、共伴出土の植物種子を検討すると、那崎原遺跡の人々は農耕を営んでいたと考えられる。同定された栽培植物以外の植物は道ばた、荒地、あるいは畑地に生育する植物が多いようである。那崎原遺跡出土野生植物の生育地

を科あるいは属のレベルで『原色牧野植物大図鑑（牧野 1982）』、『雑草の歴史（笠原 1979）』、および『琉球植物目録（初島・天野 1977）』を概観すると下表（表 3）のような生育地が目立つ（マメ科やキク科？については今回の同定のレベルから生育地は述べ難い）。

表 3：那岐原遺跡出土植物遺体の主な生育地

コミカンソウ属	道ばた、畑
トウダイグサ属（?）	道ばた、河原
タデ科	主に、道ばたや日当たりの良い所（含 畑や田）
ナス科	同上
カタツリグサ科	日当たりの良い平野、畑、湿地、水田
カタバミ属	庭、道ばた、畑
イネ科	主に、道ばたや日当たりのより所（含 畑や田）

科あるいは属のレベルの解釈は若干無理があるかもしれないが、この植物構成をみると那岐原遺跡付近は当時かなり開けていたようである。また、コミカンソウ属およびカタバミ属と同定された炭化種子は、コミカンソウおよびカタバミと思われるが、コミカンソウおよびカタバミであれば両種は人里植物・畑雑草であるので、畑の存在が示唆される（笠原 1979）。カタツリグサ科と同定された種子のなかには、水田雑草のホタルイ（笠原 1979；吉崎 1992a）と酷似する種子があり（図-13）、もし、この種子がホタルイであれば水田が存在した可能性もある。那岐原遺跡の東側には湿地帯があり、鳥（1992 私信による）によると、そこは戦前まで水田として利用されていたとのことであるので、那岐原遺跡付近は地理的にも水田を営める環境にあったのではないだろうか。

以上を要約すると、那岐原遺跡の環境は、森林ではなくオープンサイトであり、畑あるいは水田が存在し、那岐原遺跡で検出された栽培植物種子は、そこで生活していた人々が交易によって入手したのではなく、地元で生産したものであったと解釈できる。朝鮮漂流者のみだ15世紀南島の主作物（例 佐々木 1984）のうち黍以外のものがすでに、那岐原遺跡で生活した人々に栽培されていたのである。

今回の調査により、那岐原遺跡では農耕が営まれていたという結果が得られたが、貝塚時代後期後半には少なくとも沖縄本島（あるいは中琉球地域）では那岐原遺跡タイプの農耕（禾穀類）は完成していたと思われる（追記参照のこと）。例えば、高宮廣衛（1995）は、按司出現の契機を8～12世紀と仮説し、この頃には簡単な農耕が行われていたのではないかと推測している。この推測を支持する考古学的データが遺跡立地である。嵩元

(1972)は10世紀頃の遺跡の立地から、この頃農耕が開始されたと考えたが、彼のいう海岸砂丘地から丘陵地への移動は8～9世紀である(島 1994 私信による)。嵩元(1972)も述べているように、この移動は生業の変遷によるものと考えられ、農耕にある程度依存した生活が開始されたため、人々は再び内陸部へと移動したと理解できる。

今後、那崎原遺跡以前の農耕の可能性および農耕の導入ルートが沖縄考古学の課題になるかと思われる。前者に関しては、多くの研究者が述べているように(国分 1992; 渡部 1986; 佐藤 1990; 多和田 1982; 伊藤 1993; 高宮広上 1993等)、那崎原遺跡タイプとは異なった農耕あるいは系譜を異にした農耕が貝塚時代前・中期に存在した可能性を検討する必要もある。農耕導入のルートに関しても、南方説あるいは北方説(多和田 1982; 国分 1992; 佐藤 1990等)が提唱されているが、今後の研究によっていずれ見通しが得られることであろう。

農耕の起源(タイミング)や導入ルートも興味深い問題点ではあるが、「はじめに」に記したように文化を適応手段と定義した場合、これらの問題点以上に「なぜ、農耕を適応手段として受け入れなければならなかったか」が重要である。ある文化とある文化が接触したからといって、必ずしも文化要素が両文化間で伝わるわけではない。コンタクトがあったから異文化の文化要素を受け入れるのではなく、コンタクトの後、その文化要素を評価し、有益と判断されてはじめて受け入れられるものである。特に農耕に関しては、狩猟採集民が農耕民と交流があったから農耕を受け入れるのではなく(例 Lee 1968)、農耕を取り入れなければならない状況にあったから取り入れたと考える必要がある。仮に貝塚時代後期前半までが狩猟採集の時代で、その後農耕を受け入れたとすると、頻繁に本州弥生文化とコンタクトのあった同時代前半には農耕を取り入れず、その数世紀後取り入れたことになる。その原因は何であったのか。沖縄側に原因があったように思われる。

最後に、フローテーション法を実施する際の土壌サンプリングについてコメントを加えたい。フローテーション法は炭化種子回収を目的とするが、先史人が我々のために意識的に種子を炭化させたということは考えられず、むしろ種子は偶然によって炭化する場合が多い。しかし、その偶然も日々の生活習慣に左右される(Crawford 1989 私信による)。つまり、調理をする空間等においては、種子が炭化する可能性が高くなるが、このような行動と無関係な空間では種子が炭化する確率は低くなる。このため、土壌サンプルを採取する際も、このような遺構やスペースを重視すべきである。今回、炭化種子の検出率をテストするために、那崎原遺跡では3タイプの土壌サンプリングを試みた。炭化種子検出率の最も高かったサンプルはやはり焼上およびその周りの土壌サンプルで、逆に最も低かったのは溝やクワ跡のサンプルであった。遺跡における植物遺体の包含状況を調査するために設けた、す-92等、遺構に無関係な土壌サンプルにおいても炭化種子は検出されたが、

食性や環境の復元という点からいえば、焼土およびその周辺の土壌サンプルからえられた結果よりはるかに劣る（表 2）。炭化種子検出を目的とする場合、手当たり次第に土壌を採取するのではなく目的に沿ってサンプリングすることがより効率的である。

追記

本稿は、1994年12月に那覇市教育委員会に提出したものである。最近、那崎原遺跡タイプの農耕の完成期は本文で記した8～9世紀より若干古く、6世紀頃の可能性があるのではないかと考えている。また、その前段階（おそらく貝塚時代後期Ⅱ期あるいは貝塚時代後期前半期以降から6世紀頃まで）は、那崎原遺跡タイプの農耕の導入期あるいは実験段階であったのではないであろうか。現時点で、筆者は那崎原遺跡タイプの農耕の起源およびその後の過程について、貝塚時代後期Ⅱ期あるいは貝塚時代後期前半以降～6世紀の農耕実験段階を経て6～8世紀の完成期となり、この農耕システムがグスク時代の（集約的）農耕へと変遷していくのではないかと仮説している。那崎原遺跡タイプの農耕の導入期を貝塚時代後期Ⅱ期以降あるいは貝塚時代後期前半以降という結論に達した理由は、貝塚時代後期Ⅱ期における本土との交易と動物食利用である。この時期の交易や動物利用は、その頃沖縄の人口に対して食資源が十分ではなかった（food stress）とも解釈でき、食料を得るために新しい生業戦略（農耕）を導入する必要があったと考えている。この仮説に関しても本文で言及すべきであるが、オリジナルにあまり手を加えたくなかったので省略した。詳細は（高官 印刷中）を参照して頂きたい。

謝辞

那覇市教育委員会 金武 正紀氏および島 弘氏のご厚意により、那崎原遺跡の土壌サンプルを採取・フローテーション処理をすることができた。尚氏をはじめ、同教育委員会の諸氏に深く感謝したい。特に、発掘担当者の島氏には多くの便宜を図って頂いた。彼の深い御理解なしには、こうした重要な資料を回収することは不可能であった。また、サンプリングの際、協力して下さった発掘作業員の方々にもこの場を借りて感謝したい。

前沖縄県教育委員会文化課課長補佐、現沖縄県立石川少年自然の家所長知念 勇氏のご紹介により、那崎原遺跡調査に参加することができ、このきっかけを与えてくれた知念氏にも心から感謝申し上げたい。札幌大学女子短期大学部 工藤 利彦博士は写真引伸に必要な設備を快く利用させて下さった。また、前北海道大学、現静修大学 吉崎昌一教授および北海道大学埋蔵文化調査室椿坂恭代氏にはサンプル採取の段階から植物種子分析や写真撮影に至るまで、各ステップで有益なアドバイスを頂いた。合わせて感謝申し上げたい。図-1、-3、-5、および-6の写真撮影は、椿坂氏による。University of Toronto Drs. Larry Pavlish および R. P. Beukens のご厚意により C-14を実施することができた。

なお、この研究のために Sasakawa Graduate Student Fellowship, Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research Small Grant (Gr. 5501)、科学研究費奨励研究 (A) 萌芽「課題番号: 06851048」の一部を使用した。また、C-14分析の1サンプルは札幌大学研究助成 (個人研究) による。多くのご意見・ご批判をいただければ幸いである。

参考文献

安里 嗣淳

1985 「沖縄グスク時代の文化と動物」『季刊考古学』 11: 68-70

安里 進

1991 『考古学からみた琉球史』 郷土: ひるぎ社

伊藤 慎二

1993 「琉球縄文文化の枠組み」『南島考古』 13: 19-34

金武 正紀

1983 「沖縄の考古学」『言語』 12 (4): 202-210

笠原 安夫

1979 「雑草の歴史」『雑草の科学』 沼田 真 (編)、pp. 69-135. 東京: 研成社

国分 直一

1992 『北の道 南の道 日本文化と海上の道』 東京: 第一書房

佐々木 高明

1984 「南島の伝統的稲作農耕技術」『南島の稲作文化』 渡部 忠世・生田 滋 (編)、pp. 29-66.
東京: 法政大学出版局

佐藤 洋一郎

1990 『稲のきた道』 東京: 裳華房

白木原 和美

1992 「琉球弧の考古学」『琉球弧の世界』 谷川 健一 (責任編集)、pp. 88-129. 東京: 小学館

高宮 廣衛

1995 「崗元通宝から見た先史終末期の沖縄」『王朝の考古学 大川 清博士古稀記念論文集』、pp. 267-286. 東京: 雄山閣

高宮 広土

印刷中 「沖縄諸島における農耕の起源～沖縄本島を中心に」『日文研叢書』
国際日本文化センター

1994 「下上原貝塚フローテーション分析結果およびフローテーションについて」『下上原貝塚』
知念村教育委員会 (編)、pp. 36-41.
知念村教育委員会: 知念村

- 1993 「先史時代の沖縄本島におけるヒトの適応過程」『古文化談叢』 30
(下)：1089-1107
- 萬元 政秀
1972 「沖縄における原始社会の終末期」『南島史論-富村 真演教授還暦記念論文集』 琉球大学史学会(編) pp. 347-365
- 多和田 真淳
1982 「主食の変遷-甘藷以前」『新沖縄文学』 52：40-48
- 椿坂 恭代
1993 「アワ・ヒエ・キビの同定」『吉崎昌一先生還暦記念論集先史学と関連科学』 吉崎昌一先生還暦記念論集刊行会(編)、pp. 261-281. 札幌：北海道図書企画
1992 「フローテーション法の実際と装置」『考古学ジャーナル』 355：32-36
- 新田 重清
1982 「海や山に食物を求めて-貝塚から発掘される食料残滓」『新沖縄文学』 52：28-39
- 初島 住彦・天野 鉄夫
1977 「琉球植物目録」 那覇：でいご出版社
- 牧野 富太郎
1982 「原色牧野植物大図鑑」 東京：北隆館
- 松谷 暎子
1988 「電子顕微鏡でみる縄文時代の栽培植物」『畑作文化の誕生』 佐々木高明・松山利夫(編) pp. 91-117. 東京：日本放送出版協会
- 吉崎 昌一
1993 フローテーション法を用いた東北・北海道両地域の古代農耕技術拡散についての研究 平成2年度～平成4年度 「一般研究C課題研究番号0261087報告」
1992a 「青森県八幡遺跡12号住居から検出された雑穀類とコメほかの植物種子」『八幡遺跡発掘調査報告書 II』 八戸市教育委員会(編) pp. 59-73.
1992b 「古代雑穀の検出」『考古学ジャーナル』 355：2-14
1990 「北海道恵庭市柏木川11遺跡の植物遺体」『北海道恵庭市発掘調査報告書』 恵庭市教育委員会(編) pp. 104-113.
- 渡部 忠世
1984 「八重山の稲の系譜-蓬莱米と在来米」『南島の稲作文化』 渡部 忠世・生田 滋(編) pp. 67-91 東京：法政大学出版局

Binford, L.B.

- 1962 Archaeology as Anthropology. *American Antiquity* 28:217-225.

Crawford, G.W.

- 1986 Sakushu-kotoni River Site: The Ezo-Haji Component Plant Remains. in 『北海道における初期農耕関連資料 1』 吉崎昌一 (編) pp. 1-21. 札幌: 北海道大学文学部
- 1983 *Paleoethnobotany of the Kameda Peninsula Jomon*. Museum of Anthropology, University of Michigan Press.

Jochim, M.

- 1976 *Hunter-Gatherer Subsistence and Settlement. A Predictive Model*. New York: Academic Press.

Miksicek, C.

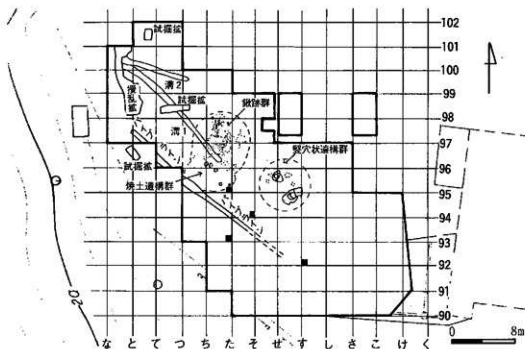
- 1987 Formation Processes of the archaeobotanical record. in *Advances in Archaeological Method and Theory* Vol.4, ed. by M.Schiffer, pp. 211-247. New York: Academic Press.

Lee, R. B.

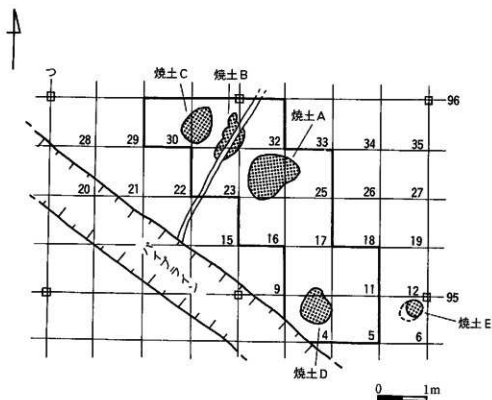
- 1968 What Hunters Do for a Living, or How to Make out on Scarce Resources. in *Man the Hunter*, ed. by R. B. Lee and I. Devore, pp.30-48. Chicago: Aldine Publishing Co.

Pearsall, D.M.

- 1989 *Paleoethnobotany, a handbook of procedures*. New York: Academic Press.



第A図：■土壌サンプル採取地点および遺構配置図



第B図：焼土遺構配置（太枠内より土壌採取）



図-1 a イネ b



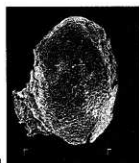
背面 腹面
図-2 オオムギ



図-3 背面 コムギ 側面



アワ 顕
図-4



「」
間隔1.0mm
図-5 アワ 顕 ×35

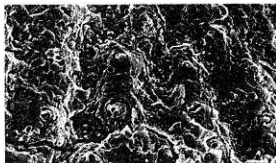


図-6 乳頭突起 ×450



図-7 マメ科



図-8 マメ科



図-22不明種子
Type4



図-21不明種子
Type3



図-20不明種子
Type2



図-19不明種子
Type1



図-18
キク?科



図-17



イネ科



図-16
イネ科



図-15
カタバミ属



図-14タデ科



図-13
アルミ属



図-12
ツギ属



図-11
ナス科



図-10
ドウダイグサ属(?)



図-9
ゴミカンソウ属

英日対比表 (植物名に関しては本文参照のこと)

B: Burntsoil	焼土
D: Ditch	溝
F: Feature	遺構
Feature No 1 / No 2	第一遺構 / 第二遺構
Flotation number (or F1, No)	フローテーション ナンバー (通し番号)
H: Hoe hill	クワ跡覆土
L: Layer	層
Light fraction Amount	浮選物量
N: N/A	該当せず / へにあらずの意
NIL	0.01グラム以下
Q: Quadrant	グリッド
S: Subsquare	サブグリッド
Soil sample Amount	土壌サンプル量
U: Unidentifiable	同定不可能種子
Unknown	不明種子

表1: 那岐原遺跡フローテーション要約

Flotation Number	Quadrant	Subsquare	Layer	Feature	Soil Sample Amount (liter)	Light Fraction Amount (gram)
11	Ta-95	N/A	VI	N/A	12.5	1.78
2	Ta-95	N/A	II	N/A	6.0	0.15
31	Ta-95	N/A	I (B)	N/A	9.0	0.61
41	Ta-95	N/A	I (B)	N/A	7.5	0.83
51	Ta-95	N/A	II	N/A	12.0	1.32
61	Ta-95	N/A	II	N/A	8.0	1.36
71	Ta-95	N/A	II	N/A	14.5	0.89
81	Ta-95	N/A	II	N/A	9.0	1.47
91	Ta-95	N/A	II	N/A	8.0	1.51
101	Ta-95	N/A	VI (Upper)	N/A	11.0	4.36
111	Ta-95	N/A	II	N/A	12.0	5.84
121	Ta-95	N/A	II	N/A	7.0	1.12
131	Ta-95	N/A	II	N/A	16.5	1.25
141	Ta-95	N/A	VI (Upper)	N/A	11.3	2.19
151	Ta-95	N/A	IV	N/A	6.0	1.89
161	Ta-95	N/A	VI	N/A	11.0	2.03
171	Ta-95	N/A	VI	N/A	14.5	0.72
181	Ta-95	N/A	VI	N/A	12.0	1.00
191	Ta-95	N/A	VI	N/A	23.0	4.68
201	Ta-95	N/A	VI	N/A	14.5	1.04
21	Ta-95	N/A	VI	N/A	7.5	1.19
22	Chi-95	N/A	N/A	Burnt Soil A (Upper)	7.0	0.22
23	Chi-95	N/A	N/A	Burnt Soil A (Upper)	5.0	0.97
24	Chi-95	N/A	N/A	Burnt Soil A (Upper)	5.0	0.63
25	Chi-95	N/A	N/A	Burnt Soil A (Upper)	5.0	0.21
26	Chi-95	N/A	N/A	Burnt Soil A (Upper)	7.0	0.33
27	Chi-95	N/A	N/A	Burnt Soil A (Upper)	5.0	0.20
28	Chi-95	N/A	N/A	Burnt Soil A (Upper)	5.0	0.14
29	Chi-95	N/A	N/A	Burnt Soil A (Upper)	4.5	0.30
30	Chi-95	N/A	N/A	Burnt Soil A	5.0	2.85
31	Chi-95	N/A	N/A	Burnt Soil B	4.0	0.24
32	Chi-95	N/A	N/A	Burnt Soil A	8.0	0.35
33	Chi-95	N/A	N/A	Burnt Soil A	9.0	1.66
34	Tsu-95	N/A	N/A	Burnt Soil B	3.5	0.22
35	Tsu-95	N/A	N/A	Burnt Soil C	3.5	0.95
36	Tsu-95	N/A	N/A	Burnt Soil C (Upper)	6.0	0.88
37	Tsu-95	N/A	N/A	Burnt Soil C (Upper)	4.0	0.82
38	Tsu-95	N/A	N/A	Burnt Soil C (Upper)	6.0	0.41
39	Tsu-95	N/A	N/A	Burnt Soil C (Upper)	8.5	0.40
40	Tsu-95	N/A	N/A	Burnt Soil C	1.0	0.04
41	Chi-95	N/A	N/A	Burnt Soil D	1.0	0.22
42	Tsu-95	N/A	II	(Possible Burnt Soil)	1.5	0.04
43	N/A	Sample No.30	II	N/A	17.0	1.02
44	N/A	Sample No.30	II	N/A	19.0	1.53
45	N/A	Sample No.30	II	N/A	14.0	1.53
46	N/A	Sample No.15	II	N/A	19.0	0.65
47	N/A	Sample No.33	II	N/A	20.5	0.86
48	N/A	Sample No.22	II	N/A	17.0	1.04
49	N/A	Sample No.30	II	N/A	17.5	0.91
50	N/A	Sample No.34	II	N/A	17.5	0.81
51	N/A	Sample No.9	II	N/A	12.5	0.88
52	N/A	Sample No.35	II	N/A	12.5	1.08
53	N/A	Sample No.34	II	N/A	12.0	0.81
54	N/A	Sample No.35	II	N/A	10.5	0.39
55	N/A	Sample No.27	II	N/A	15.0	0.50
56	N/A	Sample No.5	II	N/A	15.0	0.41
57	N/A	Sample No.5	II	N/A	12.0	0.41
58	N/A	Sample No.34	II	N/A	11.0	0.36
59	N/A	Sample No.9	II	N/A	10.5	0.62
60	N/A	Sample No.27	II	N/A	7.0	0.18
61	N/A	Sample No.35	II	N/A	11.0	0.48
62	N/A	Sample No.24	II	N/A	11.0	0.70

63	N/A	Sample No12	#	N/A	12.0	0.46
64	N/A	Sample No17	#	N/A	13.3	1.35
65	Ta-94	N/A	#	N/A	12.0	0.83
66	N/A	Sample No24	#	N/A	16.0	0.93
67	N/A	Sample No34	#	N/A	11.5	0.30
68	N/A	Sample No34	#	N/A	11.5	0.31
69	N/A	Sample No10	#	N/A	9.5	0.33
70	N/A	Sample No31	#	N/A	15.0	0.86
71	N/A	Sample No24	#	N/A	16.0	0.68
72	N/A	Sample No5	#	N/A	12.0	0.27
73	N/A	Sample No4	#	N/A	12.0	0.33
74	N/A	Sample No6	#	N/A	7.5	0.28
75	N/A	Sample No19	#	N/A	15.0	0.93
76	N/A	Sample No26	#	N/A	12.0	0.65
77	Ta-94	N/A	#	N/A	13.0	1.21
78	N/A	Sample No25	#	N/A	19.0	1.03
79	N/A	Sample No5	#	N/A	11.0	0.48
80	N/A	Sample No30	#	N/A	15.0	0.51
81	N/A	Sample No34	#	N/A	6.0	0.18
82	N/A	Sample No4	#	N/A	8.0	0.42
83	N/A	Sample No34	#	N/A	10.5	0.28
84	N/A	Sample No22	#	N/A	16.0	0.47
85	N/A	Sample No5	#	N/A	12.0	0.31
86	N/A	Sample No34	#	N/A	13.0	0.46
87	N/A	Sample No23	#	N/A	12.0	1.11
88	N/A	Sample No34	#	N/A	10.0	0.34
89	N/A	Sample No12	#	N/A	11.5	0.66
90	N/A	Sample No23	#	N/A	28.0	1.40
91	N/A	Sample No12	#	N/A	14.0	1.06
92	N/A	Sample No12	#	N/A	12.0	1.21
93	N/A	Sample No19	#	N/A	14.0	0.41
94	N/A	Sample No19	#	N/A	13.0	0.91
95	N/A	Sample No11	#	N/A	13.0	0.48
96	N/A	Sample No17	#	N/A	10.5	0.68
97	N/A	Sample No27	#	N/A	14.0	0.47
98	N/A	Sample No27	#	N/A	12.0	0.26
99	N/A	Sample No18	#	N/A	15.0	0.44
100	N/A	Sample No27	#	N/A	12.5	0.35
101	N/A	Sample No18	#	N/A	16.0	1.10
102	N/A	Sample No17	#	N/A	13.0	0.47
103	N/A	Sample No19	#	N/A	12.5	1.02
104	N/A	Sample No24	#	N/A	16.5	1.04
105	Ch1-95	Sample No12	#	Burnt Soil E	8.0	0.43
106	N/A	Sample No26	#	N/A	15.0	1.54
107	N/A	Sample No27	#	N/A	11.5	0.42
108	N/A	Sample No12	#	N/A	12.0	0.65
109	N/A	Sample No11	#	N/A	12.0	1.43
110	N/A	Sample No10	#	N/A	12.0	0.55
111	N/A	Sample No34	#	N/A	10.5	0.60
112	N/A	Sample No112	#	N/A	13.0	1.35
113	N/A	Sample No18	#	N/A	15.0	1.04
114	N/A	Sample No11	#	N/A	15.0	0.53
115	N/A	Sample No11	#	N/A	13.0	0.30
116	N/A	Sample No11	#	N/A	9.5	0.64
117	N/A	Sample No19	#	N/A	12.0	0.93
118	N/A	Sample No25	#	N/A	20.0	1.02
119	N/A	Sample No27	#	N/A	10.0	0.37
120	N/A	Sample No27	#	N/A	11.0	0.59
121	N/A	Sample No26	#	N/A	12.5	0.55
122	N/A	Sample No25	#	N/A	16.5	1.27
123	N/A	Sample No26	#	N/A	13.0	0.61
124	N/A	Sample No34	#	N/A	12.5	0.40
125	N/A	Sample No10	#	N/A	15.0	0.75
126	N/A	N/A	#	Ditch No 2	16.0	1.35
127	N/A	N/A	#	Ditch No 2	14.0	0.80
128	N/A	N/A	#	Ditch No 2	15.0	0.89
129	N/A	N/A	#	Ditch No 2	7.5	0.87
130	N/A	N/A	#	Ditch No 2	12.0	0.83
131	N/A	N/A	#	Feature No 2	17.0	0.44
132	N/A	N/A	#	Feature No 2	18.0	1.00
133	N/A	N/A	#	Feature No 2	18.0	0.66
134	N/A	N/A	#	Feature No 2	20.5	0.62
135	N/A	N/A	#	Feature No 1	10.5	0.14
136	N/A	N/A	#	Feature No 1	10.0	0.14
137	N/A	N/A	#	Feature No 1	16.0	0.60
138	N/A	N/A	#	Feature No 1	10.0	0.53
139	N/A	N/A	#	Feature No 1	18.0	0.63
140	N/A	N/A	#	Feature No 1	19.0	0.97
141	N/A	N/A	#	Feature No 1	17.0	0.44
142	N/A	N/A	#	Feature No 1	20.0	0.12
143	N/A	N/A	N/A	Burnt Soil A	0.3	0.16
144	N/A	N/A	N/A	Fill No24	0.3	0.01
145	N/A	N/A	N/A	Fill No27	0.2	0.02
				BT	1687	119.11

[illegible]

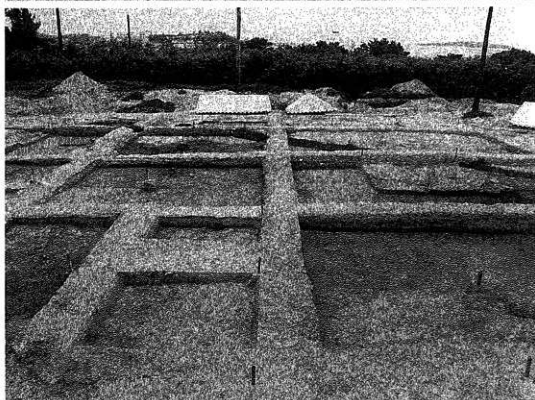
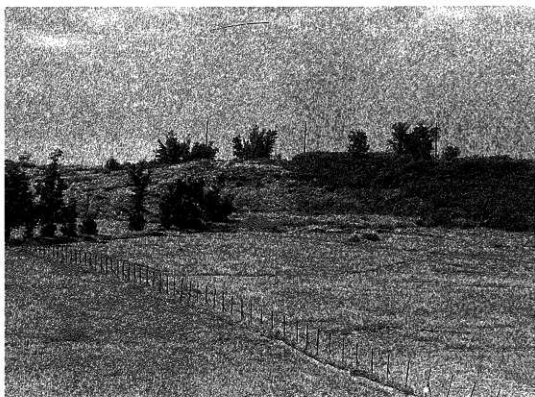
圖 版



図版 1 1944年の遺跡周辺の空中写真（那崎原遺跡の位置）



図版 2 1984年の遺跡周辺の空中写真（郡崎原遺跡の位置）



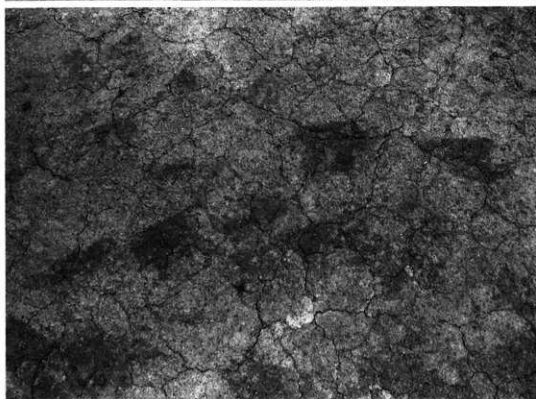
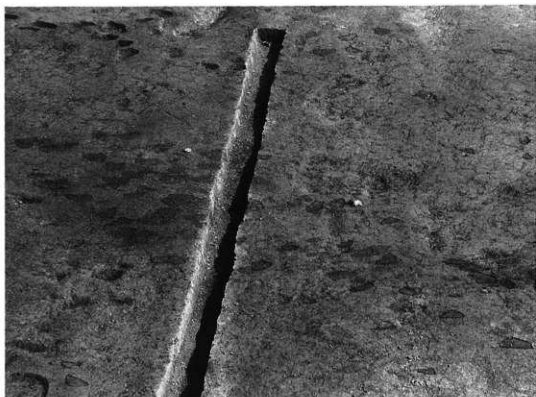
図版3 上：北東側より遺跡を望む
下：北側より発掘調査を望む（右上に見える小島は瀬長島）



図版4 上：発掘調査風景（南西側より）
下：発掘調査風景（北西側より）



図版 5 上：そライン・94ラインの層序
下：そ-97層序の近景



図版 6 上：鉄跡の検出状況
下：鉄跡の近景



図版 7 上：鉄跡の断面状況
下：鉄跡の発掘調査風景



図版 8 上：1号溝跡の検出状況
 中：2・1号溝跡全景（東側より）
 下：2号溝跡の断面状況（西側より）



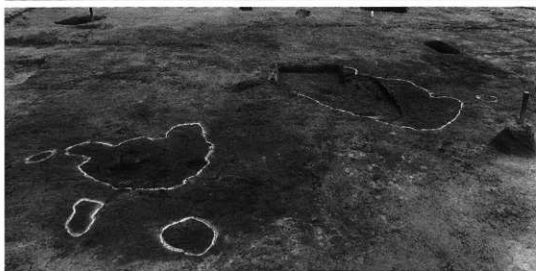
図版9 「鋳跡+溝跡」の連景



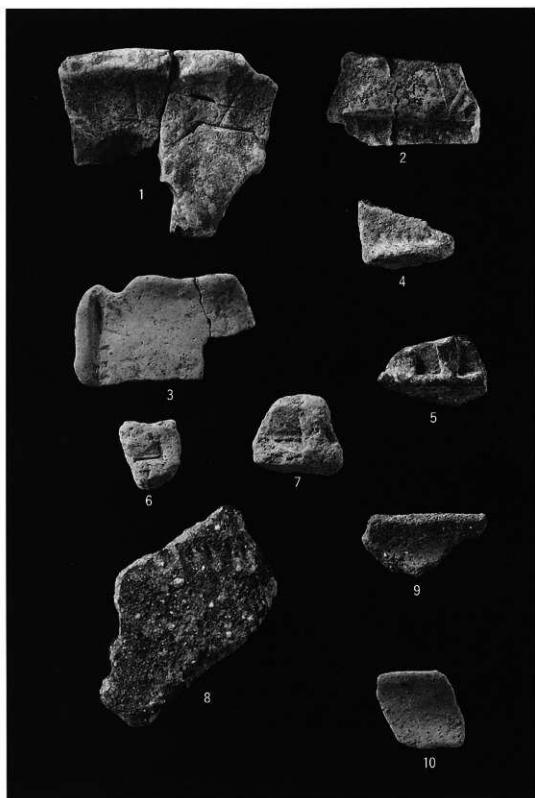
図版10 上：鍬跡・1号溝跡の近景
下：雨上がりの1・2号溝跡



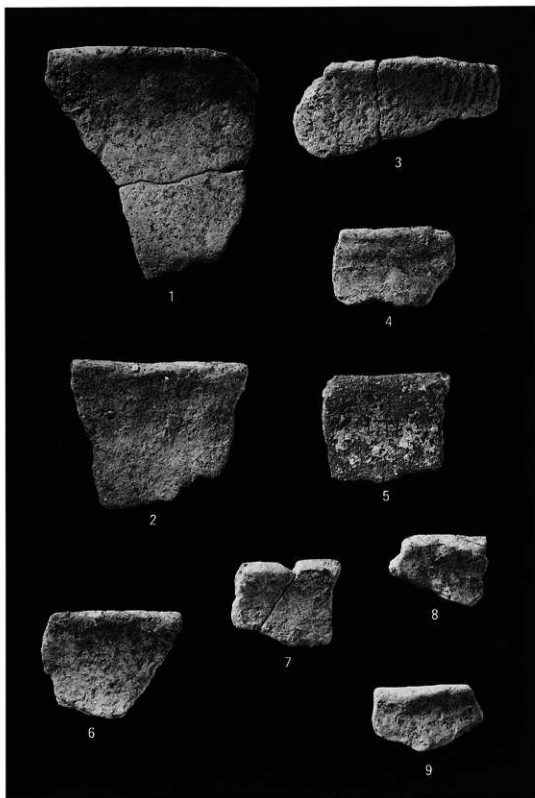
図版11 上：焼土遺構群
下：焼土Aの検出状況



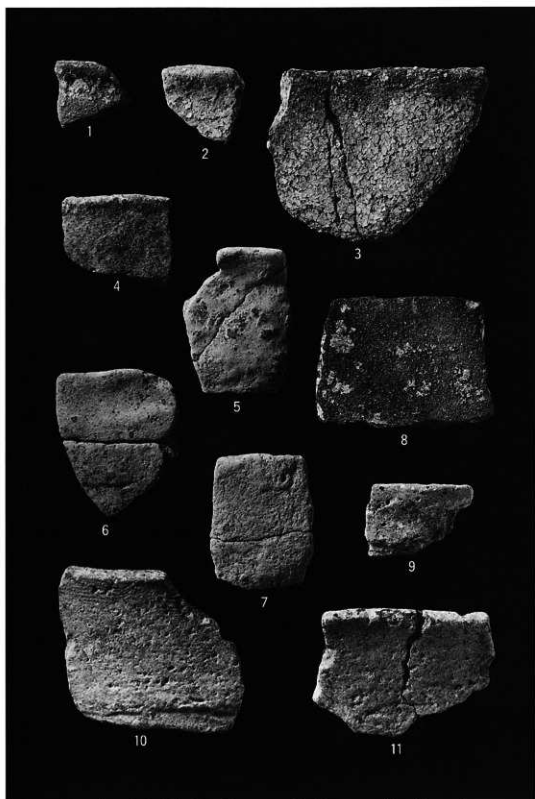
図版12 上：焼土Aの断面状況
 中：竪穴状遺構群
 下：竪穴状遺構の断面



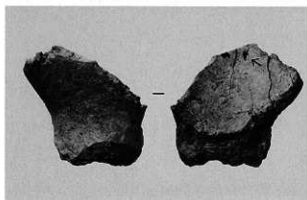
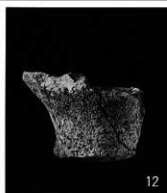
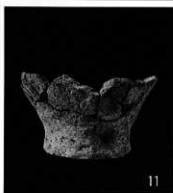
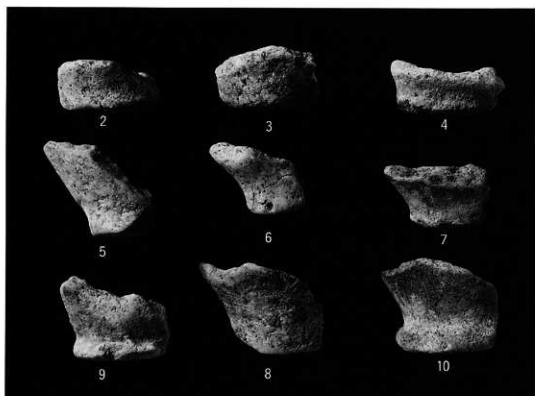
図版13 (第12図) 有文土器 (1~8)・無文土器 (第1種 9・10)



図版14 (第13図) 無文土器 (第1種 1～9)

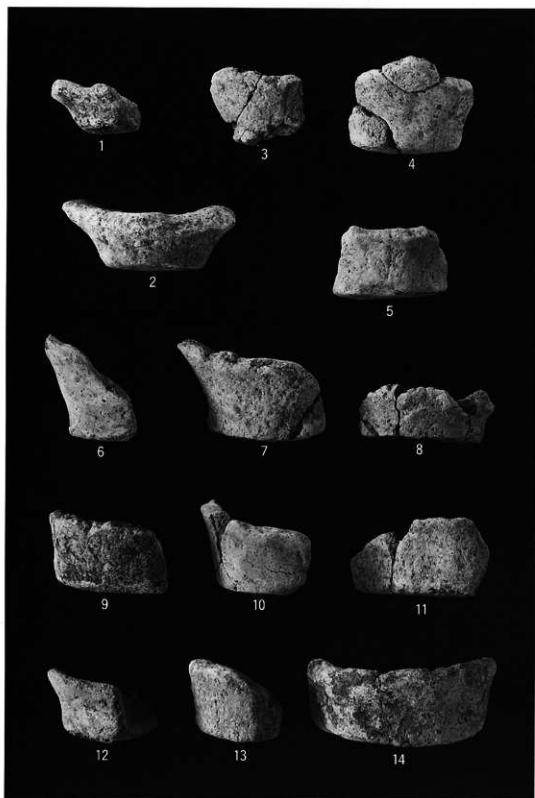


図版15 (第14図) 無文土器 (第1種 1・2、第2種 3～6、第3種 7・8)
有段口縁土器 (9～11)

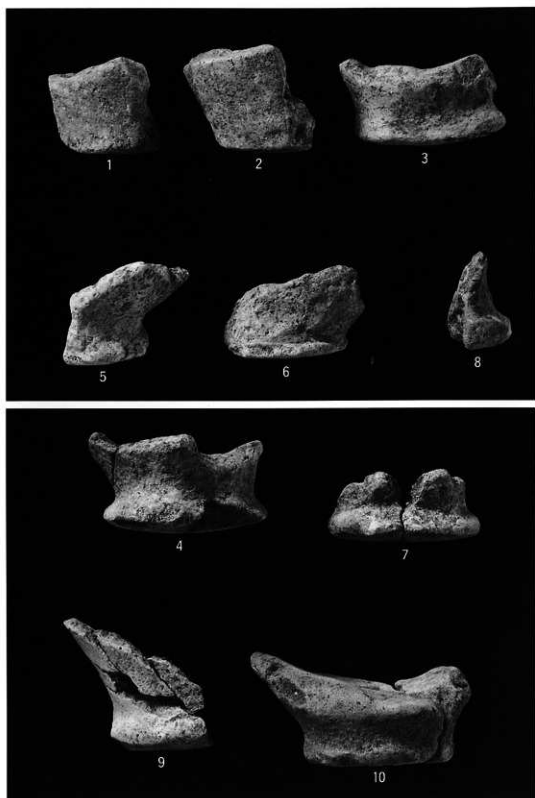


拡大（種子圧痕？） 13

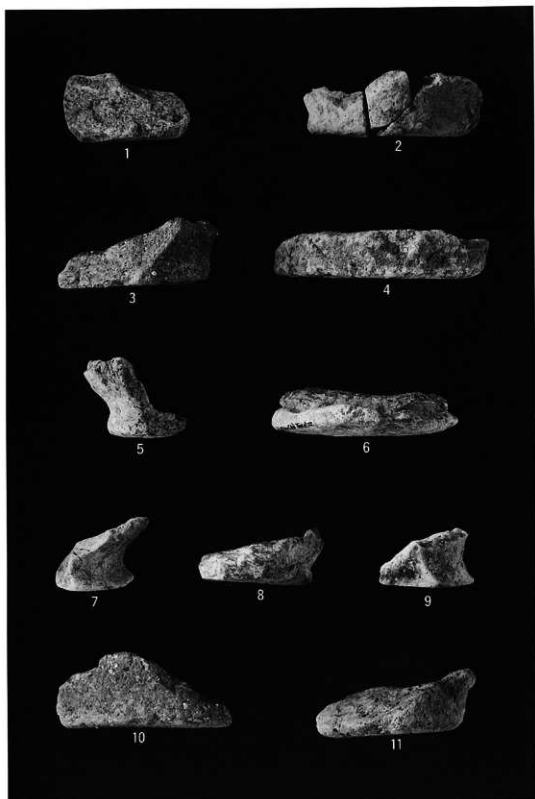
図版16（第15図） 底部：第1種 a（1～13）



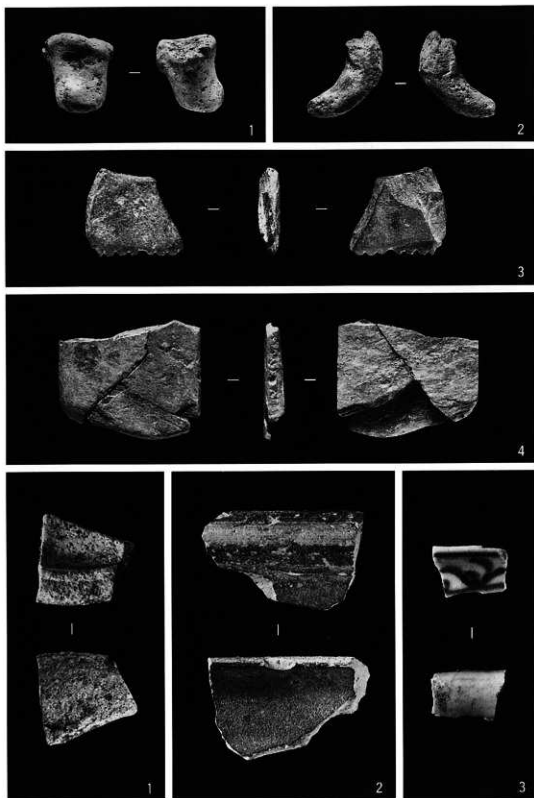
図版17 (第16図) 底部：第1種b (1～7)、第2種 (8～14)



図版18 (第17図) 底部：第2種 (1・2)、第3種a (3~10)

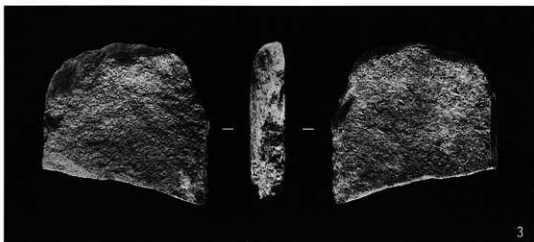
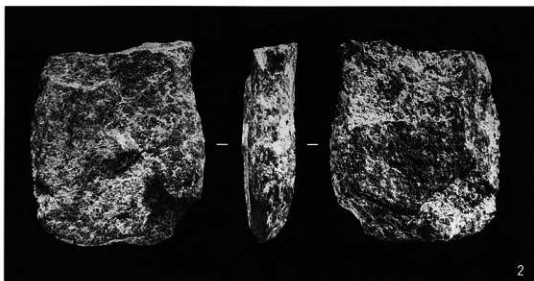


図版19 (第18図) 底部：第3種 b (1~11)

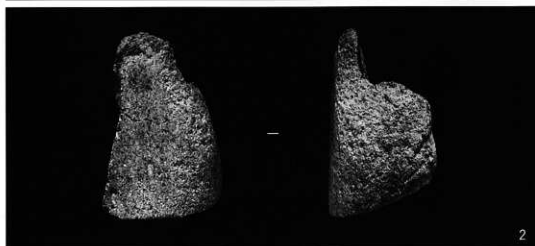


図版20 (第19図) 土製品 (1・2)、石製品 (3・4)

(第25図) タイ産土器：蓋 (1)、褐釉陶器 (2)、蓮華 (3)



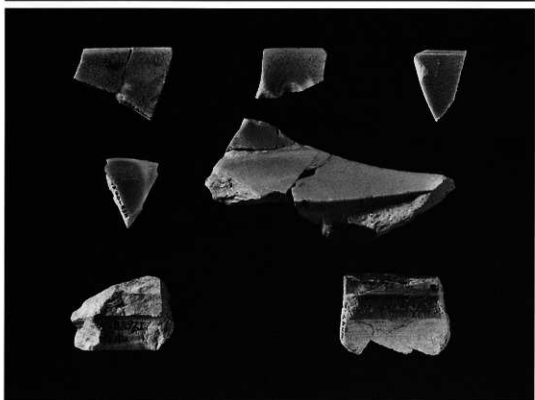
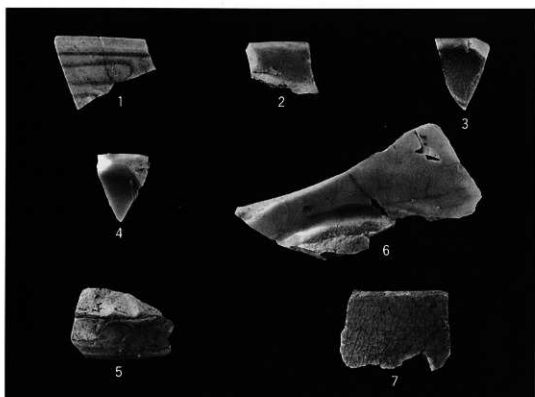
図版21 (第20図) 石器：石斧 (1～3)



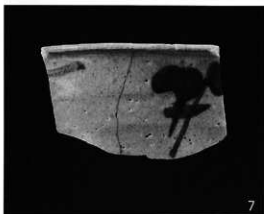
図版22 (第21図) 石器：すり石 (1～4)



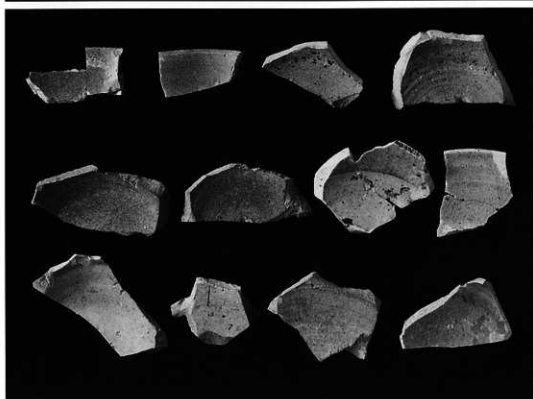
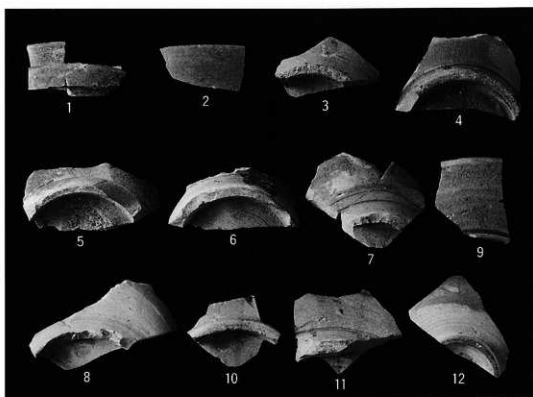
図版23 (第22図) 本土産須恵器 (1～3)



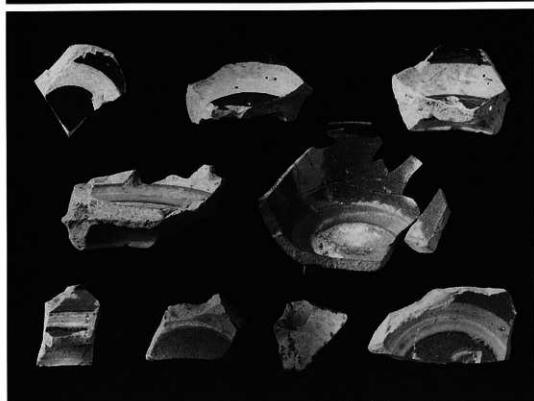
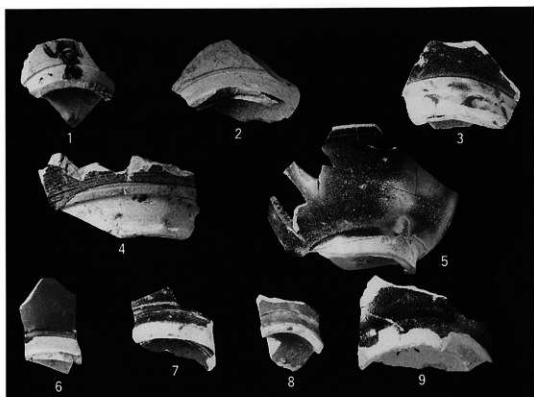
図版24 (第23図) 中国産青磁：碗 (1～6)・香炉 (7)



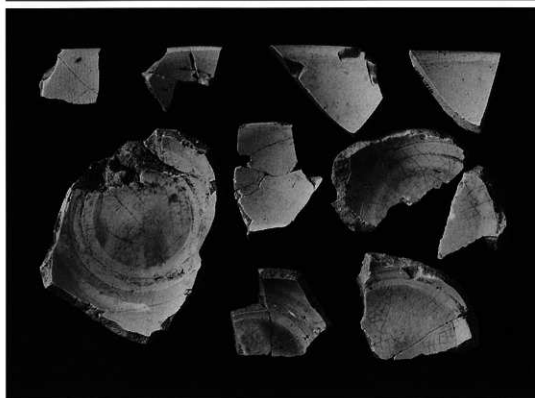
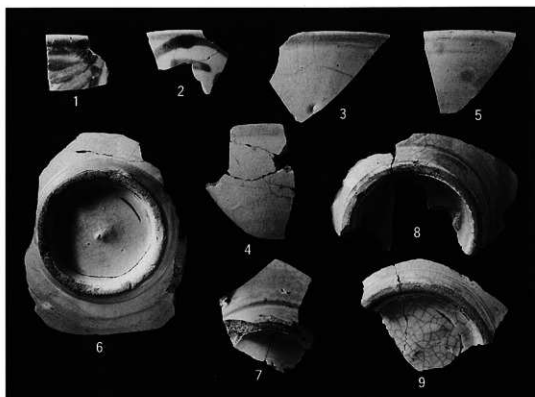
図版25 (第24図) 中国産青花：皿 (1・9)・碗 (2～8)



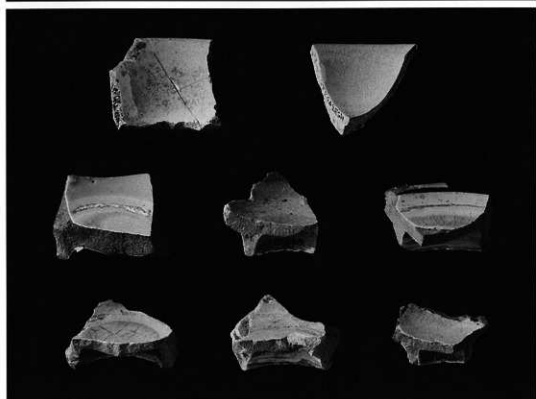
図版26 (第26図) 灰釉陶器：碗 (1～8)・皿 (9～11)・壺 (12)



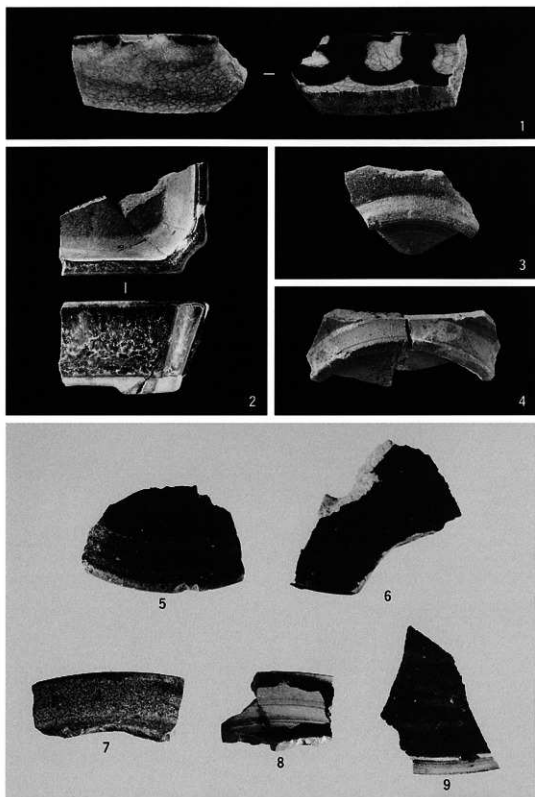
図版27 (第27図) 鉄釉陶器：碗 (1～3)、鉄釉+灰釉：碗 (4～6)
鉄釉+白釉：碗 (7・8)、黒釉陶器：碗 (9)



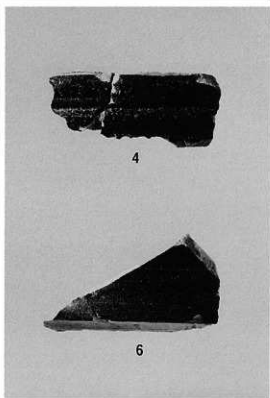
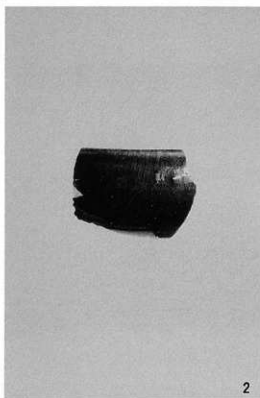
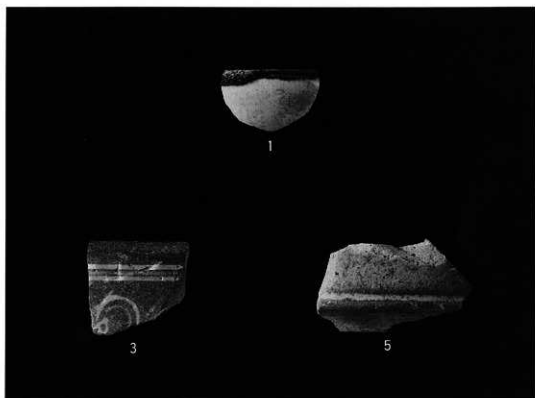
図版28 (第28回) 白釉陶器：碗 (1～9)



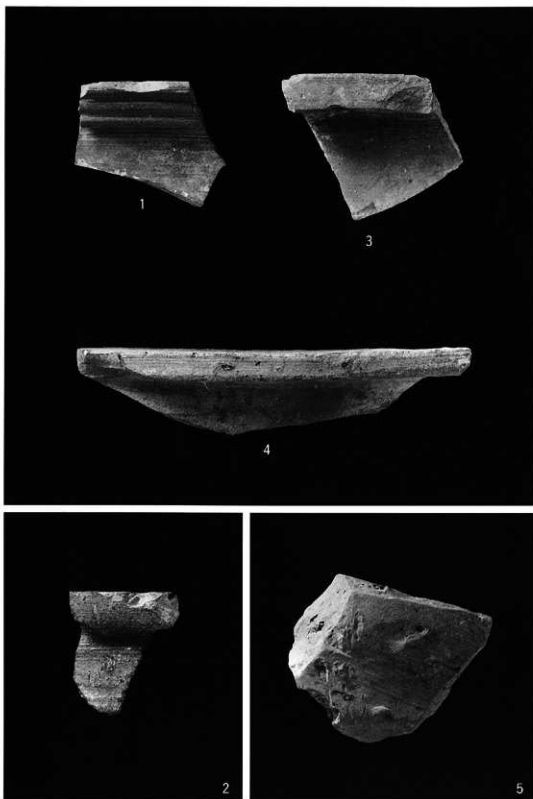
図版29 (第29図) 白釉陶器：小碗 (1～4・6～8)・碗 (5)



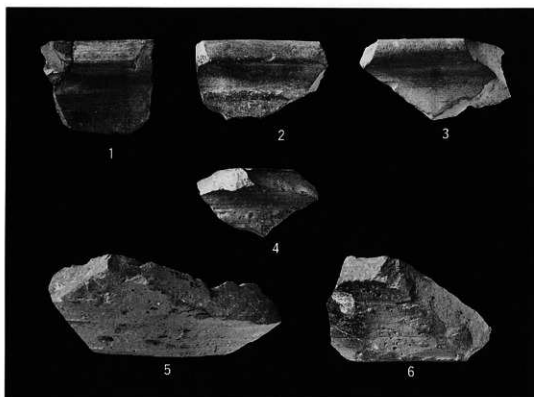
図版30 (第30図) 施釉陶器：皿 (1・3・4)・角皿 (2)・蓋 (5・6)・鍋 (7～9)



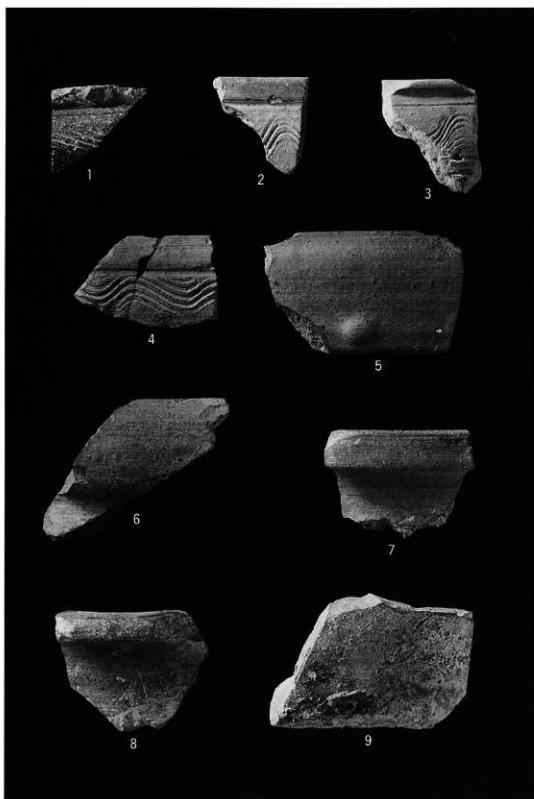
図版31 (第31図) 施釉陶器：灯明具 (1・2)・火入れ (3～6)



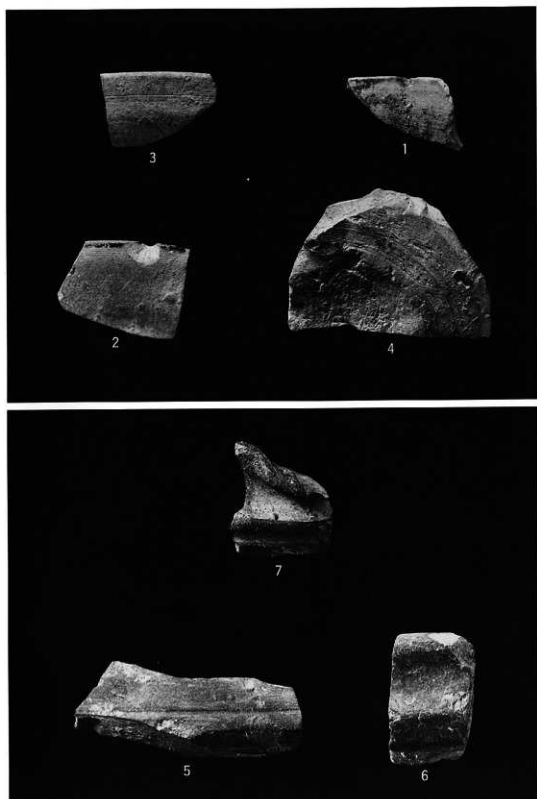
図版32 (第32図) 無釉陶器：甕 (1)・鉢 (2・3・5)・播鉢 (4)



図版33 (第33図) 無釉陶器：撞鉢 (1～6)



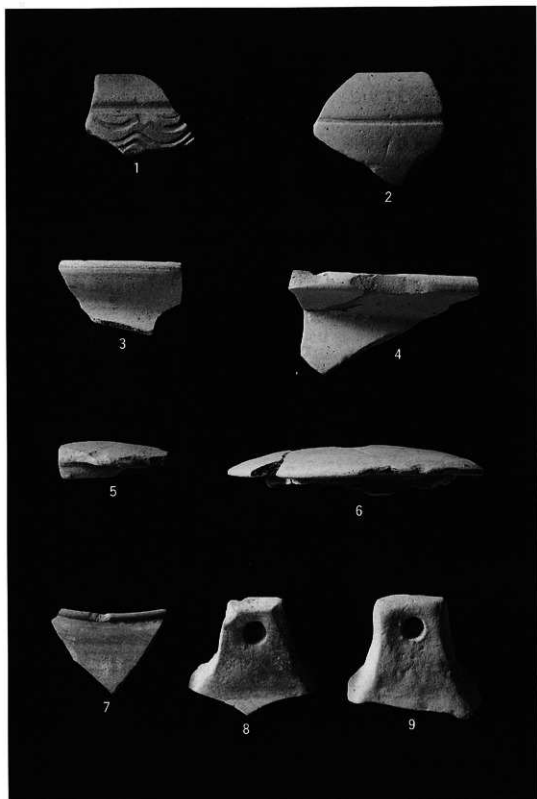
図版34 (第34図) 無釉陶器：水鉢（1～5）・壺（6～9）



図版35 (第35図) 無釉陶器：小皿（1～4）・火炉（5）・不明（6・7）



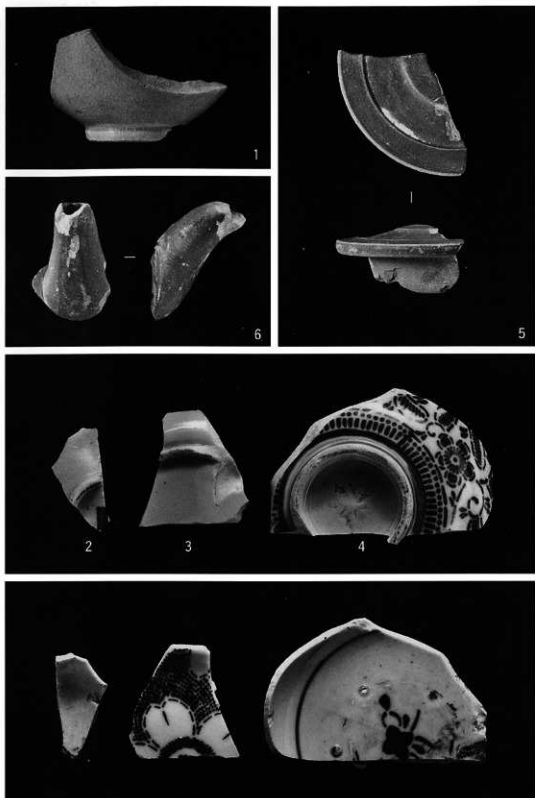
図版 3 上：北東側より遺跡を望む
下：北側より発掘調査を望む（右上に見える小島は瀬長島）



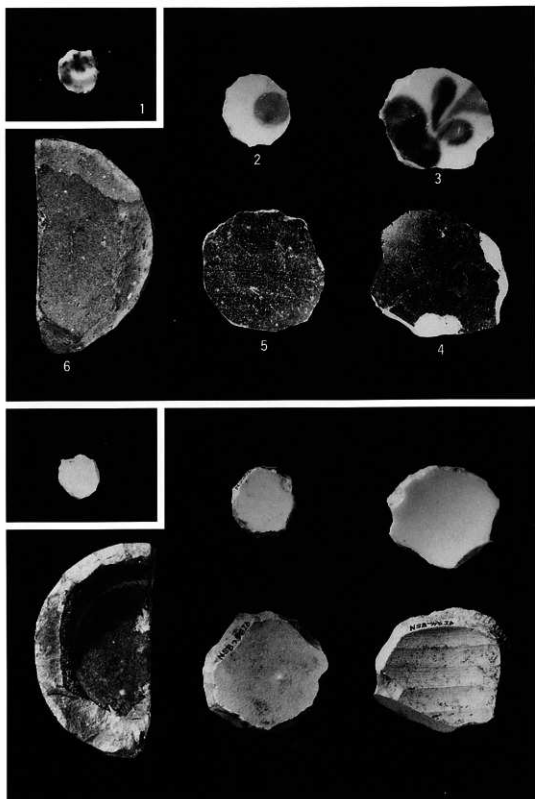
図版36 (第36図) 陶質土器：鉢 (1・2)・鍋 (3・4)・土瓶 (5～9)



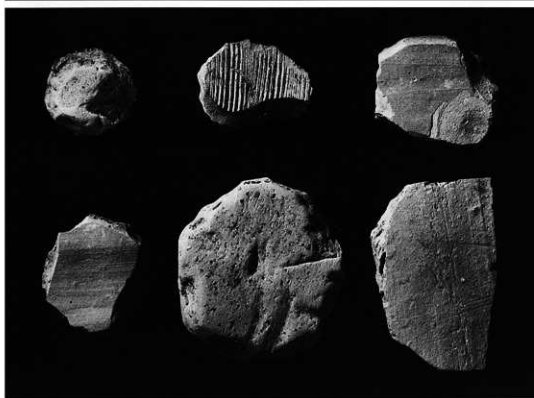
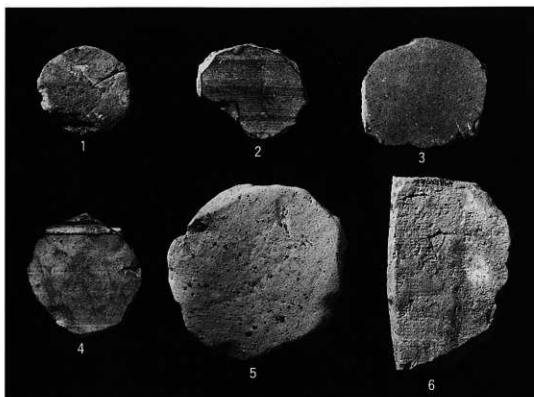
図版37 (第37図) 陶質土器：炉 (1～3・5)・不明 (4)



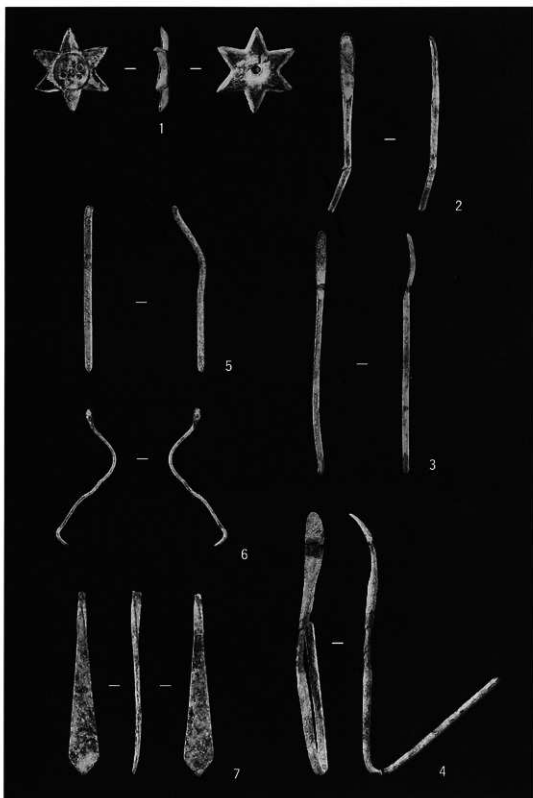
図版38 (第38図) 本土産陶磁器：小碗 (1・2)・皿 (3)・碗 (4)・水注 (5・6)



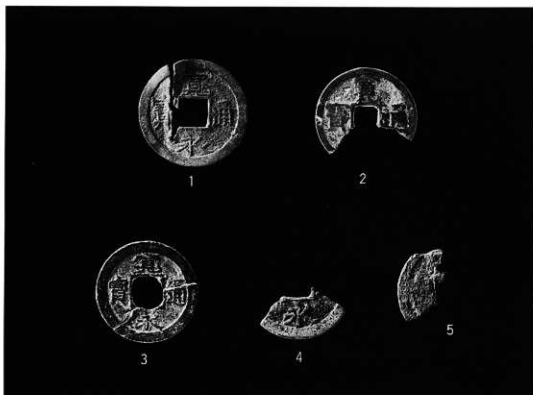
図版39 (第39図) 円盤状製品 (1～6)



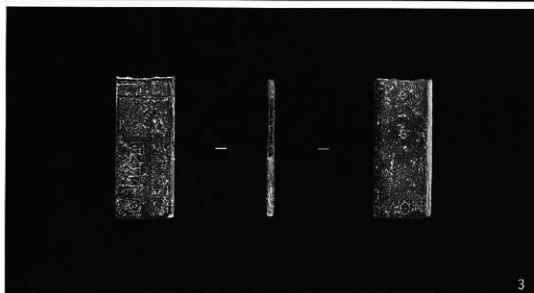
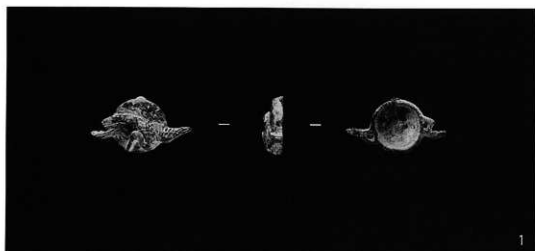
図版40 (第40図) 円盤状製品 (1～6)



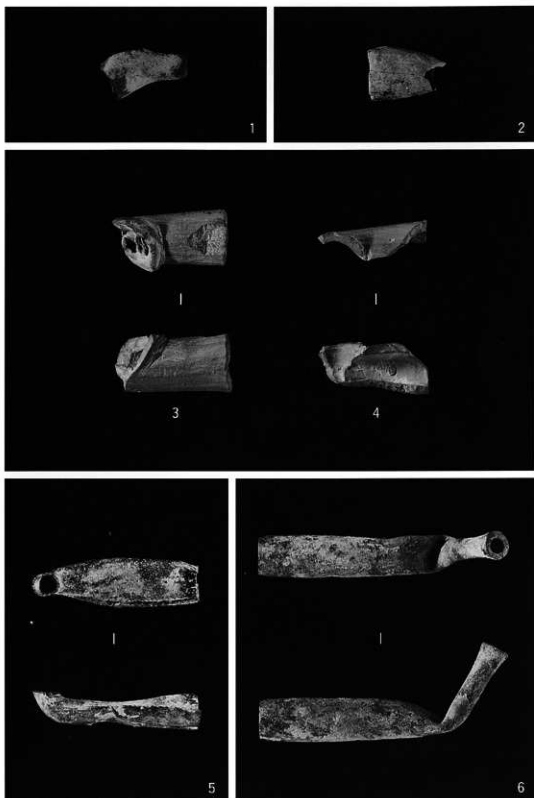
図版41 (第41図) 金属製品：カンザシ (1～5)・カンザシ状製品 (6・7)



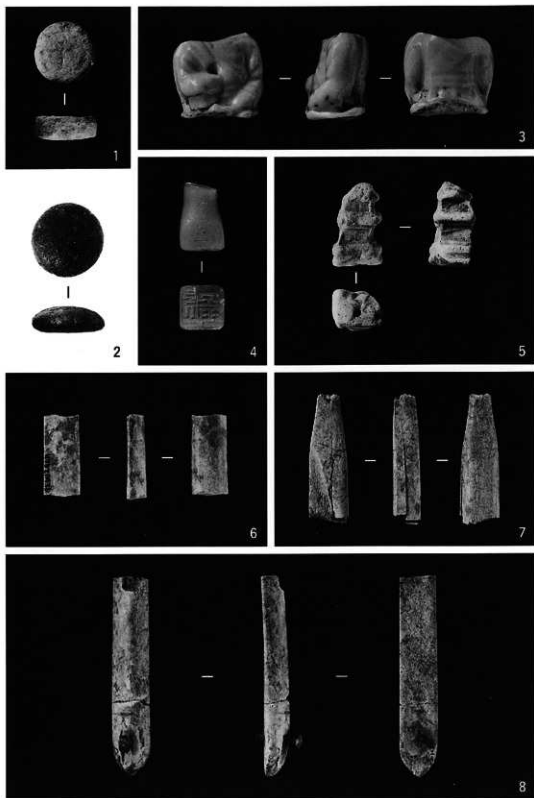
図版42 (第42図) 金属製品：貨銭 (1～5)



図版43 (第43図) 金属製品：用途不明品 (1～3)



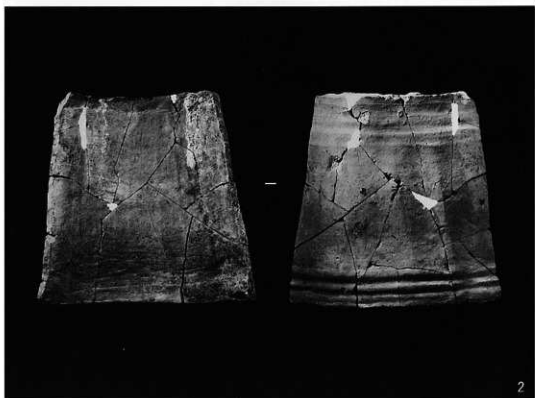
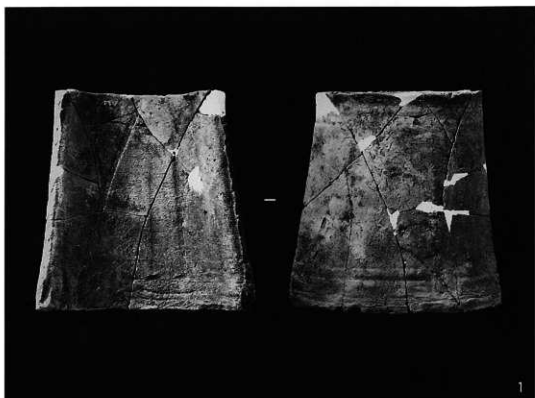
図版44 (第44図) 煙管：陶製 (1～4)・金属製 (5・6)



図版45 (第45図) 土製品 (1)、碁石 (2)、人形 (3)、印章 (4)、塔形製品 (5)、
ブラシ状製品 (6~8)



図版46 (第46図) 瓦：丸瓦 (1・2)



図版47 (第47図) 瓦：平瓦 (1・2)

那覇市文化財調査報告書第30集

那 崎 原 遺 跡

—那覇空港ターミナル用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告—

発 行 1996年 3 月

那覇市教育委員会

〒900 沖縄県那覇市樋川 2 - 8 - 8

編 集 那覇市教育委員会文化課

TEL 098-853-5775

印 刷 株式会社 南西印刷

〒903 那覇市首里石嶺町 1 - 127

TEL 098-884-4321
